うへよりよみくだして文義の通ぜる事。人々のよくせべきにしもあらねば。通國の法とはなしがたかるべし。うまれつきを見てをしふべきにや。からことばも。甚やすし。それがしからにゆき。三年ちからをもちひて。おほかたつかへなきほどにまなべり。わが國に同じく反言なるがゆゑなり

此國にて文作るといへる名ある人。經義をときてかける書物を。から人に見せけるに。これを見さふらへば。經義をもさとり。又は文つくる法をもしり。まことにこれ人の及ぶべきにもあらず。たふとき書物なりといひて。あさゆふよろこびてよみけるが。をり〱いへるは。此所には文字あまり。此所には文字たらずしてよみがたし。これは顛倒して句讀をなせるゆゑなるべし。玉に瑕とやいふべき。をしむべき事なりとかたりき。又正徳信使の時。四六の啓札を。から人におくりし人ありしに。此人はいかでものまなびして。かくまで妙なる文をばかきたるかと。よろこびあへりき。これらは。もろこしごゑまなびたるにはあらねど。その才高く。しかも學いたりて。こと國の人をも感ぜしむるなり

ある人呉音漢音といふ事をたづねしゆゑ。呉音は韓の字音。漢音はもろこしの字音にてさふらふ。されど年をへて。いつとなく。此國のこゑとなりたるなりとこたへき

鐮足の執政たりし時。百濟の尼法明といへるもの。對馬にきたり。維摩經をゝしへし。これをつしまよみといひて。呉音のはじめなりと。政事要略にしるせりといへり。此國の呉音といへるもの。今のから人の字音に似よりたれば。これも出羽の枳殼にて。はじめ法明がをしへたるは。から國の字音なりしかど。いつとなく今の呉音となれりとしるべし

呉音といへる名は。法明が維摩經ををしへし時。これは呉音なりといひし故に。此國の人はしりたるなるべし。その國の字音にてをしへしを呉音といへるは。から國の人。もろこしといふ事を。今は江南といへど。むかしは呉ともいひたるゆゑ。これはもろこしごゑなりといへる事を。呉音といひたるにや。から國も此國におなじく。よみはその國のことばなれど。こゑはもろこしのこゑをまなびて。出羽の枳殼となりたるなり

聖武帝の御時。吉備公入唐し。其後歸朝ありて。孝謙帝の御時。十三經をさづかり給ひし。これ漢音のはじめなりと。見聞抄に見えたりといへり。されば今の漢音といへるものは。もろこし音の出羽の枳殼となりたるとしるべし。もろこしごゑといへる事を。今は

唐音といへど。むかしは漢音といひたるなり

自注。中臣鎌子爲内大臣。在三十七代孝徳帝朝。而吉備歸朝。在四十六代孝謙帝朝。紫國史。十六代應神帝十五年。百濟國王遣阿直岐。貢良馬。阿直岐能誦經典。太子菟道稚郎子。延以爲師。阿直岐薦同國人王仁。以爲勝於己。乃遣使聘召。越翌年來朝。亦師事之。此時阿王二人所授者。當是韓音。蓋韓音即呉音也。則政事要略所云呉音。始於三十七代孝徳帝時者。似乎可疑。豈時世悠邈字音訛誤。至是釐而正之歟

此國の唐音をまなべる人は。うへよりよみくだして。文のながみじかをよくしるゆゑにや。そのことばしりやすく。よみやすく侍る。いづれも唐音をまなび給へど。信使にまたがひきたりし。中學士といへるもの。をしへしと唱和集にみえたり

孝謙天皇の十三經をさづかり給ふも。吉備公歸朝の後。もろこしごゑにて。かみよりよみくだす事をまなび給ふなるべし。されど甚かたきことなるゆゑ。其後ついでまなべる人なく。字音も其まことをうしなひたるなるべし

文字といへるもの。もともろこしよりはじまりたれば。よみはからも。此國もおの〳〵その國のことばにてつくれど。こゑはもろこしをまなぶにかやあるべき。出羽の栅殿にてなりたりといふにてゝろづきなく。字音も此國にてさだまりたるやうにおぼゆるは。おろかなりといふべし

知客といへる事。もろこしの字音にはつうけといへるを。此國の人。それをまなび。いつとなく字音かはりて。今はしかといへり。からもろこしにも。かゝる事あり。此國のかけをどりといへるをまなびて。から人は各其叢利（カコソリ）といひ。此國のつきをといへるをまなびて。もろこし人は讀急（ドキ）。またはト土器（トカイ）といへり。風氣のちがひ。聲音のおなじからぬゆゑ。かくは變ぜるなり。ちか比ある古董客を見しに。むはこべやとて。この國にてもてはやせる。けものゝかはゝ。その國のことばに。うはんこをるべあんといへるを。此國にては。あやまりてむはこべやといへるなりとかたりき。あやまりたるにはあらず。はじめは。うはんこをるへあんといひしかど。いつとなく變じて。むはこべやとなりたるなり。ひとつを擧げて。よろづみなしかなりとしるべし。今人のならひおぼえたる唐音も。とし久しくなりなば。これも出羽の栅殿にて。漢音呉音にも違ひ。もろこしごゑにもあらぬ。また一様の字音となり。今の漢音呉音の事をいへるごとく。この唐音といへるもの。いかにしていできたるかとうたがふべし

助語の事たづねし人ありしに。これは此國の人のしりがたき事なり。やまとうたによむ。かな。けり。らむ。などいへるを。いかゞしてもろこし人にしらせ侍らんか。いかほどくはしくいひをしへたりとも。此國のことばしらでは。ふかきこゝろもちはきまへあるまじ。此國の人は。かゝるところは。かゝる助語ありと見おぼえたるばかりにてかけど。そのみちくはしき人のしたゝめたる文を見るに。これはちがひたるにやとおもふことはすくなし。こゝろを用ふる事ふかければ。おのづからかくあるにや。ふしぎなりと思ひ侍るとこたふ。唐話をまなびなば。そのわけあきらかになり侍らんやととひしゆゑ。唐話まなびでも。此國の人はしりがたかるべし。柳子厚が杜温夫にあたへし書を見て。しり給へとこたふ

ある人の物語に。おなじく。すなはちとよめど。輙の字は。いつとてもといふこゝろ多し。乃の字は。かくしてこそ。かくありてこそといへるこゝろあるゆゑ。かたき言葉といふなり。悦歡懌喜いづれもよろこぶとよめど。こゝろはすこしづゝちがへり。正適方といひ。須當可といへるも。またこれにおなじ。かゝるもじくはしくそのわかちありてこそ。ふるき文をもよみ。またみづから文をもつくるべきなれど。此國にては。とりちがふる

葉にあらずといへるは。まなびてより〱ならふといへるを。はじめ此國つねのこと
ばには。まなぶといふ事を。けいこするなどゝいへど。まなぶとはいはず。ならふといへ
るは。はじめて人に物ならふ事をいひて。熟するなどいへるところにはあらず。より
〱といへるも。つねのこととむにねちがへり。かくあるゆゑにこそ。にかきおろかなる
人に。ものをしへをして見るに。いくへんとなく。いひきかせても。くつをへだつるかゆ
きをまぬかれがたし。から人のその國のことばにて。もろこしふみを。なにせるを見る
に。これも其國の聲律にもどりて。よみがたけれど。よみはみなつねの言葉なれば。をう
なわらべまで。文のこゝろしりやすくおぼえやすし。うらやましといふべし
それがしもろこしからのことばにて。長き事など物語りするを。わきより見たらんは。こ
の國のことばにて。此國の人と。ものがたりするに。違ひはなからんと。おもふなめれ
ど。さにはあらず。そのうちには。いかほどもしらざる事はあれど。あときさのつりあひ
にて。かゝる事をいへるなりとしりてうけこたへするなり。もろこしの文よむ事もま
たしかなり。史記。漢書などいへるもの。朝夕手なれて。その事も大かた知りたる事なれ
ば。これをよむに。なにのつかへもなく。みな〱がてんしたるやうにおぼゆれど。これ

もうへしたのつりあひにて。かゝる事なりとはしれど。くはしく見れば。近き言葉とおもふうちに。いかほどもあきらかならぬ事多し。そのあきらかならざるよりして。記聽する事もうとく。文かくたすけともなりがたきゆゑ。諺語といふ事こゝろづき。つけたけにおなじからんやとおそれなきにしもあらねど。やぶれてゝきのすてがたく。まかき人にはをしへ侍りき。おぼゆべきふみども。いかほどゝいふかぎりなければ。こと〳〵くかくすべきにはあらねど。まづ其ちかきをとりてさきとせば。益なきにはあるまじ。されどすぐれてかしこき人は。をかしとおもふなるべし

ほとけのをしへに。王法をとけるはまれなりときけり。是は其位にある人にゆづりたるなるべし。さればその位に在りて。其道をしらざるは。ほとけのこゝろにもかなふまじ

ある人の佛道をそしるとて。つくれる文を見るに。おほかた僧徒の惡業をのみあばき出だして。ほとけのみちの是非にはおよばず。かくいはゞ儒生のよろしからぬしわたいかほどもかきあらはし。ひじりのをしへをそしるべし。影を見てかたちをおもひ。ながれをさぐりてみなもとを知るは。まことにさる事なれど。末のつひえある事のみをいひて。其もとのいかゞとしらざるもうるさし

明の陳繼儒が佛氏を天下の大養濟院なりといへるは。季世の特見なるべし。韓退之も其位にゐて。その事に任ぜば。おほかたは三代をもてのりとはせじ

五倫といへるは。天下を擧げていへる言葉なり。君といへば。君の親戚屬し。臣といへば士大夫の朝にあるものゝみにかぎらず。農工商。婢妾奴僕。みなそのうちにこもれり。爾よりかみつかた。孫よりしもつかた。祖といひ。孫といへるは。父子に屬し。再從三從黨をおなじうするは。兄弟に屬す。おつとゝいへば。夫の親戚屬し。婦といへば婦の親戚屬す。朋友といへば。われと姓を異にする人。いやしくしては鰥寡孤獨。ほかにしては實教雜類。みな〳〵朋友に屬せり。されば天下の人。いづれか我五倫の中ならざる。一視同仁にして。これに處するに義をもてするを。ひじりのみちとはいへるなり

善をすゝめ惡をこらす事。ひじりのをしへ。ほとけのみち。何かちがひあらんといへるひとのありしに。さはさる事に侍れど。その善といひ。惡といへるにこそ。ちがひあるべけれと。あるみちしれる人いへるとぞ

杭州道林禪師。人目爲鳥窠和尚。白居易問佛法大意。師曰。諸惡莫作。衆善奉行

ものよみする人。やゝもすれば。鬼神の事を。そこ〳〵におもへるものおほし。これは世の

人のほとけにこび。淫祀をたふとぶを見。むせぶによりて食を廢するにや。天子は天地をまつるといへるよりはじめ。經傳にしるせるを見れば。さにあらず

ある人。神は聰明正直にして。一なるといふ言葉をあげて。聰明とはいかゞいひたる言葉なるかとたづねしに。一念こゝにおこれば。そのまゝ知り給へばこそと。わが師なりし人こたへられしに。其座に侍りたる人ども。いづれもせなかに水をそゝぎたるやうにおぼえ。感悟したりき。今かきつけて見れば。さまでかはりたる事にもあらねど。まことに會得したる人のいへるは。言詞のほかに人を感ぜる事あるにや。頭上三尺の天といへることはたふとしと。わが師はつねにかたりき

此國天主のをしへをいたく禁じ給ふ。とほきおもんばかりなりといふべし。ありがたくおぼゆ。寶永のすゑ。いたりやといへるもの。やくのしまに來り。長崎におくられしを。すでに誅せらるべきにきはまりしに。まづ其やうすを見給ひてこそとて。正德のはじめあづまにめされ。あがりやにおかれける。そのころものしりて。智恵ありといへる人。そのくにの事どもくはしくきかむとて。をり／＼ゆきてあひけるが。其をしへをきくも。釋氏のいへると。物の名ちがひたるまでにて。かはりたる事なければ。とるにもたらずさふらへど。其ひとがらはつねならず覺え。心にわすれがたくおもひ侍るとかたりしまゝ。妖人の人をまどはす事。まことにおそろしき事なりと。ふかくあやぶみしに。それよりみとせあまりすぎて。ひそかに。その法を。そばなるものにつたへしといふ事あらはれ。とがにおこなはれき

楚の熊渠が石を臥虎なりとおもひて。やじりをかくせるを。王充が論衡に誠なりといひし。其こゝろいかにかと。或みちしれる人にたづねしに。火事あるとき。ちからよはきものゝ。おもきにもつをおひかたげして出づるを見て。そのことわりをしりたまへとありしかば。それはわが身の力にてこそさふらへ。それもつねに過ぐるといふまでにて。かぎりあるべし。いしとやとは。ほかのものにさふらへば。かたきいしの。やはらかになる。もろきやの。つよくなることはりやあるべき。ふしんにおもひ侍るといひしに。いかにも矢もつよくなり。石もやはらかになり侍るまゝ。よくおもひて見給へとて。そのゝちはいらへもなかりしとぞ

近江のかたゐなかにすめるひとありしに。その名やゝ世にきこえしまゝ。あるひとたづねゆきけり。むぐらおひたる野邊の。さう／＼しきしばのいほ。とぼそなかばひらき。と

しごろよそぢあまりなるひとの。文ひらきよめるを見て。それぞとおもひ。御名きゝつたへてまゐりたるといへるよ。こなたへとて。茶など出だしもてなせるさまつねならぬおぼえ。やゝありて。儒者は世をことゝし。莊老は世をわすれ。釋氏は世をのがれさぶらふ。いづれかまがしまざとこゝろえてべらんとゝひしよ。まことよかたきこゝろましまさば。ものごと其ことわりよあたり給ふべし。世の中はいかゞしてをさまり。いかゞしてみだれさふらふかとたづねしよ。いつとても上たるひとの御しんしよよりおこり侍るなりとこたふ。おもしろくおぼえ。それよりいよしへいまの事など。あさゆふてつかあまりかたりてかへりけるとぞ

此ものがたりは。世のなかのなまとかいへるをそじめとして。あふみのかたゐなかといへるを終とす。第一段は序のごとし。第二段は凡例のごとし

芳洲雨森子しるす

たむれぐさ 終

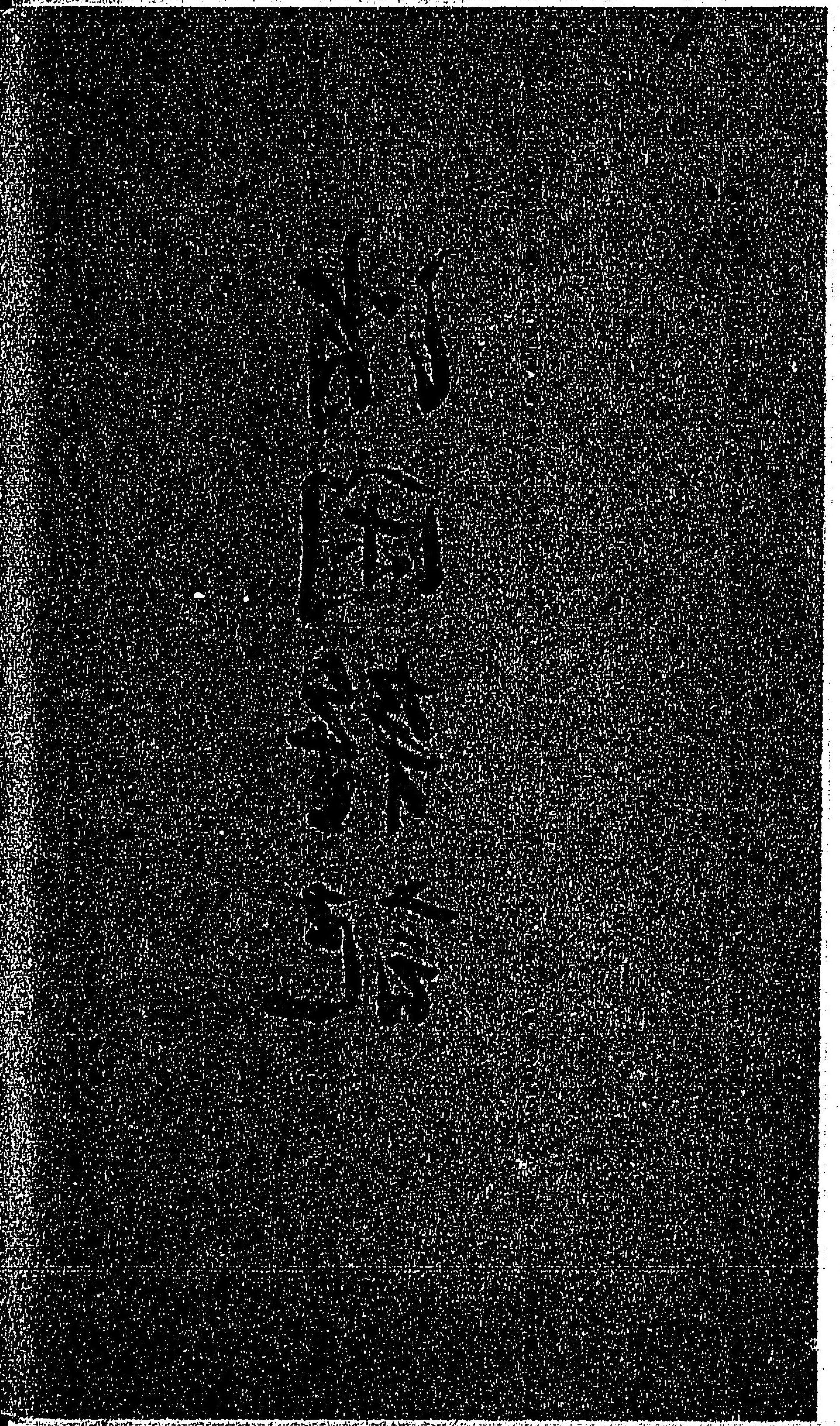
芳洲といへるは。對州の文學なるが。此書を著して。家よのこせり。正德信使の時。彼國の正使趙泰億といへる人。留別の詩あり。曰。絕海誰奇士。芳洲獨妙譽。能通諸國語。且誦百家書。落拓寧非數。才華儘有餘。明朝萬里別。回首意如何。芳洲の身世ほゞ知るべし。故よ錄を

鳩巢老人直清跋

清閑雑記

○岡西惟中小傳

岡西氏名ハ勝字ハ赤子一時軒また閑々堂と稱せり因幡の國鳥取の人なり弱冠の時より博物多識のきこえ高かりしが故ありて故國を去り備前の岡山に遊び專儒を以て業とせり延寶五年また備前を去りて大坂に出て高麗橋の側にト居し此の頃より心を歌道に傾け烏丸資廣卿および關貞盛等に就きてその意を極めぬ然るに當時西山宗因天滿の社地に住して連歌をよくし荒木田守武支那宗鑑等の流を汲みて出藍の譽ありきまた更に一派を開きて檀林風といへり井原西鶴田代松意等一世の名士みなその門に遊びぬ惟中則その門に入りて業を受け遂に和歌連歌俳諧の三道をきはめその名一世に聞えたり太郎五百韵。次郎五百韵。俳諧蒙求。和歌祕密。一時隨筆。枕草紙旁註。いづれ都の等の著あり元祿五年壬午八月十日歿せり年五十四俳林小傳に惟中を備前の人とし幼名を一有と呼び杉田望一に就きて醫を學べりといへるハ誤なり一有ハ斯波氏にして伊勢山田の俳人なり惟中の幼名にハあらず日本行脚文集御田扇當世百人一句等の書に惟中も一有も共に出でたるにて其の別人なる事ハ明らかなり



消閑雜記序

難波江爾。於非當都蘆能。都可徹之可奈留。筆乃壽斜比半。見處奈久思婦物可良。安之可爾能。南末利帝久良數。此年頃波。可々累事難良傳波。末疑留々事毛奈計禮盤。人乃思武遠母。可弊里美須之天。汀乃古都美。加幾安都免太流耳奈無安理計留。以天也。可々累書天布物波。於能可志々。心乃曳可太有天。歌人者。歌能事遠古知太幾末傳毛能之。儒者波。可羅布美能武都可之起春知遠。我波顏耳論之那登。美都栗廼。中乃保度爾天。是奈無餘幾斗思波留々者稀南免理。余波。差江奈幾遠古乃者那禮婆。其。中乃保登能與幾程波。玉川爾斜良數太都久理。更爾母以葉須。可能頻良波之

起學飛乃道毛。沖都白浪。志良奴事奈禮盤。見武人乃。耳傾武久斯幾不之波。於婦計南久天。於毛非毛可布左禮東毛。年頃見聞太累事能。可以洲天々。要阿里加多幾事登母々。南起爾之毛阿羅坐那留遠。俗古登毛天。布都々可爾。書那之多禮盤。以可爾見流免奈久。可比奈可留良牟。散連登。同之心乃人能爲爾者。是波可理古蘇。不斜波之可良迷登。秋乃薄能。保古離賀耳於毛婦毛。猶。例乃遠許心南利計理

一時軒惟中識

消閑雜記目録

○平等院建立匡房卿の記聽　一頁
○喜撰のうたぃ稀なる詁　一頁
○白河院宇治のみゆき行家朝臣の美談　二頁
○須磨寺さくらの制札評判　二頁
○一休の事幷ニ墨蹟　四頁
○佛法僧の鳥歌よよみし事幷ニ空海の詩　五頁
○萬葉莊子相通の論　六頁
○古文秋風辭幷和歌　七頁
○颶母の考衣笠内大臣のうた　八頁
○人の癖幷ニ詩人のかたぎ　九頁
○長明海道の記の說　十頁
○和歌の懷紙の書法　十頁
○烏丸殿の辭　十一頁
○平時頼臨終の頌　十一頁
○古今の序幷人麿入唐　十三頁
○人麿のよしのゝ櫻のうた　十五頁
○一首十體の和歌　十六頁
○布袋ニ四人あること　十八頁
○白鹿和尚の狀　十九頁
○聖人ニ異相あり　十九頁
○季仲の事付くろん坊　二十頁
○飯豊の皇女の御行跡幷ニ辨慶が性質　二十一頁
○天狗付愛宕山の太郎坊が素性　二十一頁
○狐のむくる事　二十二頁
○百丈野狐生佛の話　二十二頁
○動靜の沙汰　二十三頁
○鎌倉實朝公の前世　二十三頁
○夢ぃあやしきものゝ論　二十三頁
○三部神道　二十四頁

○中臣祓の大意　二十五頁
○二條冷泉兩流　二十五頁
○東坡王駕が詩　二十六頁
○宗祇名月の晴冥の發句　二十六頁
○心敬僧都の發句幷玄的の發句　二十八頁
○昌琢昌程の奇句　三十頁
○葉月十五夜九月十三夜をめで初し古昔　三十一頁
○夢の妙童菩薩の事　三十二頁
○萬葉集なる無心所着のうた付俳諧の論　三十二頁
○素性法師の秀逸のうた　三十四頁
○三十迄男もたぬ女の七夕の歌　三十四頁
○むさしの國なるほりかねの井　三十五頁
○同國の忍びか岡の考　三十五頁
○江戸傳通院の開基幷増上寺の寺號　三十六頁

○黒髮山　三十七頁
○白川の二所の關幷梶原景季か歌　三十七頁
○木の丸殿は土佐國なりといふ論　三十八頁
○吉備津の宮の釜の動する話　三十九頁
○人の名に麻呂とつくるとの考　四十頁
○古文漁父辭の六韻一叶の事　四十一頁
○王羲之が筆法　四十三頁
○唐音をしること　四十四頁
○源氏物語は歌學の棟梁なる事幷に祕事　四十五頁
○萬葉集の訓をしる事　四十六頁
○百人一首古今集の訓　四十八頁
○皇國のすべての古書どもの訓付清濁　五十頁

消閑雜記

岡西惟中著

○學文にこゝろざしあるものは。詩一絶。歌一首にても。心をとめて記臆すべきことなり。宇治關白頼通公。平等院を建て給ひて。總門のたよりを思ひ煩はれける折ふし。大納言公任參られしに。東は河。西はうしろ。南は山。北よりほかに大門を建つべき所なし。北に。總門ある寺やあると尋ね給ひけるに。さしもの公任も。覺悟なかりしにや。江の中納言未弱冠の時。車の後にのりて。同車せられけるに。さやうの寺やあると問ひ給ひければ。匡房卿我朝には。六波羅蜜寺空也上人の寺。漢土にては西明寺圓測國師の寺。天竺にては大那蘭陀寺と申されけるとぞ。誠に廣才記臆の一事なり

○此比は。人の心浮氣になりて。毎度の句數をこのみ。沈思の味ひをなめず。殊勝邊の事をおもしろからず。心ある人そぢおもふべきことなり。抑喜撰が歌。たゞ二首なり。我いほはの外に

木の間より見ゆるは谷の螢かも。いざりのふねのおきにゆくかも

此歌續古今集に入るべきよし。撰者いへるを。爲家卿。貫之が筆むなしくなるとつぶやかれ。いれざりしを。爲兼卿玉葉集に入れ給ふとぞ。古人の撰集おぼろげならず。此ごろの俳諧集。ちりあくたのごとし。撰べりやえらまずや。人もしらず。我もしらず

○白河の院。宇治御覧に行幸あり。餘興盡きざるによりて。いま一日御逗留あるべきよしを。京極の大殿奏せられしを。明日還御あらば。花洛北にあたれり。日ふたがりの御憚と。陰陽の頭奏しければ。殿下御遺恨ふかき所に。行家朝臣。宇治は都の南にあらず。吾撰都のたつみとよみたればくるしからじと奏せられしに。其日の還御はのびにけり。時にとりての高名。歌人ならずばかゝる事あらじと。殿下御感あり。人もまた美談とす

○攝州須磨寺の開帳。ことし二月より。四月の中旬に及び。老若男女群をなせり。寺の實物數々なり。其内辨慶が筆とて制札あり。其文章に

此花江南所無也。一枝於折盗之輩者。任天永紅葉之例。伐一枝可剪一指

壽永三年二月二日

是を弱木の櫻に添へたりといひつたへ。人もさ思ひ。住持もしかなりとす。余がおもふに是櫻のためにあらず。梅のために書きたりとみえぬ。もと南宋陸凱寄范曄詩に

折梅逢驛使。乞與隴頭人。江南無所有。聊贈一枝春

此第三の句より。江南所無を梅の一名とす。一枝といへるも。この詩より思ひたる文章なり。またこのはなと書き出したるも。梅のひゞきあり。「なにはづにさくやこの花」とよめるも。梅にあらずや。たゞ梅の制札を。櫻の名木あれば。取り合せて。須磨寺の什物としたるなるべし

○櫻を賞すること。我朝の事なり。いま連歌に花といふも。櫻の事なり。もろこしにては。海棠を稱す

唐揚妃傳。明皇嘗召太真妃。被酒新起。帝曰。此乃海棠花睡未足也。極めてうつくしき花なればなり。この國にも桐つぼの更衣をなづかしうらうたげなりしを。おぼしいづるに。はな鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなきと。紫式部は書きたり

宋景濂が詩に。賞櫻日本盛於唐。如被牡丹兼海棠。恐是趙昌所難畫。春風繞起雪吹香。もとよりもろこしの詩に見えず。たま〳〵王荊公が詩にみえぬ。それも全芳備祖にて。櫻桃の部にあり。其詩は山櫻抱石映松枝。比並餘花。開最遲。さて趙昌難畫といへる事は。清少納言が枕草紙のうち繪に書きて。おとるものなてしこ。さくらと書きたり。さもあるべき事

なり

○紫野一休宗純は。後小松の皇子なり。自稱酒肆婬坊狂雲子。又稱天下老和尚。應永元年甲戌に生る。文明三年辛丑八十八歳にて寂す。余がすみし備州の老臣土倉氏のもとに。一休の自畫自贊あり。芦花淺水の體なり。詩は忘れぬ。其奥に

天澤七世孫東海純一休書之。産御阿古女郎。此おあこは。御中居といふ同じことなり。一休はあこが腹よりうまるといへる事あり。このおあこは。後小松の院の清所をする人なり。清所とは膳部をとる所なり

○洛陽のなまがしとやらがもとに。一休の筆あり。初祖達摩大師とかくべきを。初祖摩大師とかゝれ。そのまゝ師の字の下に。達の一字を書きて。そのはねを引き上げて。摩の字のあたまにてんじて。おかれぬと聞きゝ。かたのごとくのものなり。是活人底の働き言語の及ぶ所にあらず

○菅家の幼き比に。よませ給ふとて。家の集に

梅の花べにの色にも似たる哉。あこがかほにもつくべかりけり

此歌におもふに。宋武帝女壽陽公主。日臥于含章簷下。梅花落公主額上。成五出之花。拂之不去。自爾後有梅花粧。又東坡が詩に

戀戀小梅花。彷彿吳姬面

○躬恒が家の集に。しはすのつごもりの夜の鬼を

鬼すらも都のうちとみの笠を。ぬきてやこよひ人にみゆらん

文選東京賦。卒歲大儺毆除群癘。此夜豆をうち。鬼は外。福は内とよむる事。いまだ所見なし。同東京賦。飛礫雨散。剛癉必斃。又漢舊儀正月十二月。命時儺以桃弓葦矢。且射之。赤丸五穀播洒之。以除疾殃と見えぬ。この赤丸は。小豆の事なり。もしこれらにもとづけるにや。又周禮に。方相氏黄金四目玄衣朱裳執戈。この方相氏。いまのとしをとこのたぐひなり。余さりし年。除夜に

鬼を追ふや綱金時に方相氏

いさゝか句がらのかなひたるにやあらん

○佛法僧といふ鳥。歌にもおほくは見えず

我國のみのりのみちのひろければ。鳥もとなふる佛法僧かな

うきことをきかぬみやまの鳥だにも。なくねはたつな三の御法に

松のをのみねしづかなるあけぼのに。あふぎて聞けむ佛法僧なく

下野國二荒山有佛法僧。藤原の敦光の記にあり 山城國宇治醍醐有佛法僧。此寺の鐘の銘にあり 松の尾によみしことさもあらんとおもひ合されぬ

神社考松尾側有大石。白髮老人坐其上。延朗問何人来此。對曰。是松尾明神也。擁護師法。又聽師誦法華。故數来。又我奉師給仕者二人。以是爲信。言已不見。延朗謂徒曰。二鳥来馴。子等莫怪。果如神言。其石尚在焉。備来二鳥外。餘羽不入寺。此鳥かの佛法僧といふ鳥なるべし。法華經を聞きしいはれ似かよひたることなり。後の達人考へおもふべし

○性靈集第一空海の詩に

寥林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有心。性心雲水倶了々。」三寶之聲は佛法僧なり

○此比。余莊子林希逸口義を講ぜるうちに

逍遙遊篇。何不樹之無何有之鄕。廣莫之野。彷徨乎無爲其側。逍遙乎寢臥其下。希逸が註に。

造化自然至道之中。自可樂地也。萬葉の歌に

心をし無何有の鄕に置きてあらば。藐孤射の山もみまくちかけむ

此歌の心。造化自然の無何有の鄕にだに置きてたのしまば。かの長壽仙室のはこやの山をば。目前に見るべしとの心なり。郭象註。無何有謂寛曠無人之處。不問何物。悉皆無有。故曰無何有之鄕。廣莫謂寂絶無用之理。藐姑射。身中至靈之山也。仙洞をもよむことなり

又莊子齊物論の中に

因是已已而不知其然。謂之道。林逸が註。以下句已字。粘上句已字。此是筆端遊戲作文處。いかさまこの字法めづらしきものなり。和文のうちにみえぞ。清少納言が家の集に。似かよひたる事を見あたりしなり

忘るなよなよといひにしくれ竹の。ふしを隔つる數にぞありける

○秋風辭。秋風起兮白雲飛。草木黄落鴈南歸。此心を夫木抄に。常磐井相國太政大臣

草も木も色かはり行く秋風に。南にかへるそつかりのこゑ

秋聲賦。但聞四壁蟲聲唧々。如助予之歎息。玉葉集に。西行法師

秋のよをひとりやなきてあかさらん。友なふ虫の聲なかりせば

魏武帝短歌行。月明星稀。烏鵲南飛。繞樹三匝。無枝可依。八雲御抄のうちに

月きよみ木ずゑをめぐるかさゝぎの。よるべもあらぬ我身なりけり

陸務觀が詩に。逸櫓點滴如琴筑。支枕幽齋聽始奇。風雅集に

燈は雨夜の窓にかすかにて。軒のしづくを枕にぞきく

夏雨の題。孟叔異。剛是道晴還未信。櫓聲和月落芭蕉。新古今集隆信朝臣

雲はれてのちもしぐるゝ柴の戸や。山風はらふ松の下陰

天陰の題。趙仁甫。數日陰晴斷復連。不成輕暑不成寒。行家集に

ふく風もあたゝかならず寒からず。霞くらせる春雨の空

江霧の題。蕭則陽。無數過舩看不見。人聲却有櫓聲中。金葉集に行家朝臣

河霧のたちこめつれば高瀬舟。わけ行くさをの音のみぞする

この心を里村昌琢の發句に

舟よべばたゞ川ぎりの答かな

林子中。逸郭。芙蕖拍岸平。華深蕩槳不聞聲。後京極良經の歌に

夏ふかき入江のはちす咲きにけり。浪にうたひて過ぐる舩びと

○舟人の詞に。風のふかむとする時。海のおもて。沖のかた。くわつ〳〵とひかるをほてるといふ。新六帖に衣笠内大臣

山のはにほでりせぬよはむろの浦に。あさはひよりと出づる舟人

余此ほでるといふことをおもふに。白氏文集十七。遊嶺南長篇。天黄生颶母。雨黒長楓人。この註に。颶母如虹。欲大風即見。これこそたしかなることゝ。はじめてみて。爰にしるす。後人いかゞ思はむ

○人ごとに癖といふものあり。慈鎮和尚の歌に

ひと毎にひとつのくせは有るものを。我にはゆるせしきしまの道

是によりておもふに。杜元凱。左傳癖。王武子。馬癖。和嶠。錢癖。王福畤。譽兒癖。黄魯直。香癖。李涉。竹癖。余おもふに。盲目にすねたる癖あり。名人に異風の癖あり。俳諧師に吟聲の癖あり

○山谷が詩に

閉門覓句陳無己。對客揮毫秦少游。陳無己は人にあはず。門をとぢて句を案じ。秦少游は人に對して筆をふるふ。詩人の生れ付なり。歌よみも。西行は縁行道して。うそぶきて歌よみしなり。和泉式部は引きかつぎてよみけるとや。それの時はかほをふところにさし入れてよみけり。道綱の母は。くらき所にてよみならはれしにや。燈を背けて。目をとぢて案

じけりとなん。是また歌人のかたきなり

○賀茂の長明が海道の記。世擧りて長明が作なりとおもふは。いぶかしき事なり。夫木抄のうち。不二の白雲の詠。かれ是數首皆深光行が東行の詠とぞ。後の歌人考へ見るべし

○余廿八のとし。忝も烏丸資慶卿にまみえて。歌道の御もの語承り來りし事。數ケ條あり」

耳底記。重寶なるものなり。光廣卿御若年の時の御聞書。まがひなしと。のたまひし

基俊の悅目抄といへるもの。とくところえぬ書なり。おほかたはよし。三五記といふもの。奥書の様にはなく。おぼつかなきものなり。擬作なるべしとなり

逍遙院實隆の雪玉集。歌道當流の姿なり。いまの仙洞も。御もてあそび遊ばさるゝのよし。つゝしみて承りぬ

井蛙抄六巻。愚問堅注一巻。いづれも頓阿の作なり。常に見るべし。上々のものなりと

歌數多く覺えたれば。卅一字につらぬる事はなるものなり。一度に二首も。三首もよむなり。それもまたいたづら事なり

○歌の懷紙(クワイシ)に當季(タウキ)の詞をかくべし

春日詠三十首和歌

崇敬して書くほど日を書くなり。名謁も必書くものなり。名のりの下に。上といふ字をかくなり。即興の歌。そのまゝ前書にても添削をこふ。くるしからず

一首の懷紙。三行三字なり。二首より七首まで二行七字なり。書きやり色々故實あれども。おほかたの分。たれも用ふる様なり。一首の懷紙のとき。和歌の二字をきへよせて書く。一行にてしつくりつまりし時の事なり。是一首の懷紙に限るなり。寛文丙午の年八月廿三日。資慶卿口授のことあり。かたく耳にとゞまりぬ

○資慶卿病重くならせ給ひて。日野大納言弘資卿のもとへよみて遣はし給ひける歌

友づるもあはれとやきく和歌の浦に。翅しをれて子を思ふこゑ

同じく御病中の歌とて

霜にさくこの一花の梅が香に。たのまれぬ身も春にあひぬる

御辭世の御うた

さめにけり五十の夢にみしやなに。たつたの錦みよしのゝ雲

誠に一生五十年を風花雪月になしたるこゝろ。言語のおよぶ所にあらず

○弘長三年十月廿二日。相模守平時頼法名道崇行年卅七。於最明寺。北亭卒御臨終之儀。着

衣袈裟。上繩床。令座禪行。業鏡高懸三十七年。一槌打碎大道坦然

○備州東南の山に。無抑和尚といへる道人あり。忘我法數といふものを編集して。世に行はる。その辭世に

傀儡抽牽。六十三年。蜀。春風拂天。傀儡とは。韻會に木偶戲とあり。木偶とは。日本の人形なり。是をあやどりて。種々の事をさするなり。人間一生のありさま。五體六根を動かして。うたひつまひつ。年月を過し。終にもとの木のきれとなること。誠に出羽が。操芝居のそてたるなり。第三の句に。一蜀して。結句に今日の現成をのべたる。色相たれかこれをしらん

○因州鳥取龍峯寺の和尚提宗。黄檗隱元禪師に謁して。長老と稱せられたる悟道の人なり。その辭世の頌に

如來右脇吉祥。諸祖座脫立亡。元來具骨董子。臨機一任縱橫。此結句生死岸頭にのぞんて。大自在底を得る人なり。如來は頭北面西右脇臥にして終り給ふ。諸祖は座してもぬけ。立ちながらむなしきもあり。元來具れたる形なれば。只今日の機にむかひて。たてになりとも。横になりとも。そのまゝにをべしとなり

○無善無惡心之體。有善有惡意之動。知善知惡是良知。爲善爲惡是格物。ある人のうたに

善もいや惡もいや〳〵いやもいや。事々物々は氣のまゝにして

此歌。莊子自然の骨髓也。余おもふに。氣のまゝにしての七文字をあらためて。事々物々は物々にしてとあらば。猶あぢはひをそふべきものならんかし

○古今の序に。人丸は赤人がかみにたゝんことかたく。赤人は人丸がしもにたゝんことかたくなんありけると書きたり。此勝劣は。赤人すこしおとれりと見ゆ。碁にとらば半目ばかりよわかるべしと。飛鳥井の榮雅は御講談あそばしけるとなり。人丸がかみにとかゝむ。これにてしるべし。もろこしにもかゝること有り。東坡云。柳子厚詩。在陶淵明下韋蘇州上。和漢の心似かよひておかし

○人丸の名。古今集にはあらはさず。後撰拾遺集に。名をあらはす。大切の習ひあることなり。此みちの先師。無上の歌仙なり。柿本人麿。住吉大明神。玉津島明神これを和歌の三神といふなり

○飛鳥井の雅章卿に。人丸の繪の賛遊ばしくださるゝやうにとたのみ申し上げしに。御作意の賛は憚あり。ほの〳〵との歌あそばしつかはさるべきよし仰ありて。一年あまり

とめおかせ。やう〳〵してあそばしくだされぬ故。いかんとうかゞひければ。此歌一首あそばすに。別日の御潔齋あれば。いまゝで御延引ありけるとなり。凡人として。みだりに人丸のかしらに賛書くこと。つゝしむべきことなり。天神の賛。また同じ。おろそかに思ふべからず

○人丸入唐の事。拾遺集にあり。別の部の巻軸に

あまとぶやかりの使にいつしかも。ならの都にことつてやらん

○古記に。文武の時。人丸四位に任ず。年十八。聖武の御時従三位。木工頭兼任太夫。神龜年中三月十八日八十八にして薨ず。この時のかたちを小野の春高宣旨を蒙りうつせ。人丸の装束ゑぼしに直衣を差給へり。普通の儀にあらず。故有る事なり。天子の御師範なる故なり。白青の直衣に。藤の丸なり。又おもだかぞりともあり。人丸のあづまくだりの時。をとながの里にみとせすみて

みとせ經し尾花が里の人ならば。おもだかぞりをきつゝなれなん

余是にて松門亭のなにがしが。人丸堂に奉納せし發句

もつたいやおもだかぞりの夏衣

又余。此比土佐の信實が書きし。人丸の御影を求めて。梅翁師のもとにつかはしければ。それにそへて給はりぬ。學窓信仰のため。影卿ありけるならんと。前序を書きて

お筆のさきほの〴〵と窓のほたるこい

○古今の序に。春のあした。よしのゝ山のさくらは。人丸が心には。雲かとのみなんおぼえける。此歌みえず。ある説に。人丸家の集に。文武天皇よし野に御遊興の御ともにて

白雲の色の千くさにみえつるは。このもかのもの櫻なりけり

此歌を出だせ。これもいぶかしきよし。諸人一同説なり。後撰かくし名の歌に

みよし野のよしのゝ山の櫻花。しら雲とのみ見えまがひつゝ

是は此序の心をよめるとみえぬ。水無瀬殿にある人丸の賛に。一條禪閣書き給ふ歌に

ことゝはむよし野の櫻くもとみし。やまと言葉はありやなしやと

是も此歌のなき趣なり

舊記に。堀川院の御時。内裏に歌仙を集めて評論して。古今の序に。よしのゝさくらを。人丸が目には雲とみるといふは。いづれの歌をさしていふか。此事いぶかしとて。八代集のおほくの本を集めて見給ふに。此歌みえず。人丸家集にぞ定めてあるらんとて。俊成卿に。

彼家の集を御たづね有りければ。俊成もちて參らる。堀川院彼家の集を御覽あるに。おし紙したる歌あり。こなちて御らんぜんとするに。俊成卿こしりよりて。うはひとりてかしこまりぬ。その時に天氣よろしからず。俊成これは家傳の秘歌なり。たとひ首をめされ。頭をおとされぬとも。御師讀にめさずば。輕くさつけ奉らじと申す。みかど重ねて俊成卿をめして。事の子細を聞しめし。げにも家を執すること。神妙なりとて。俊成を御師讀にあそばし。この歌を御相傳ありしとぞ。古歌最上の大事なり

○一首十體の口訣

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に。しまがくれ行く舟をしぞ思ふ

「ほの〴〵としま隠れ行く朝霧にあかしのうらの舟をしぞ思ふ」「ほの〴〵と舟をしぞおもふ朝霧にあかしの浦のしまかくれ行く」「ほの〴〵とあかしの浦の朝ぎりに舩をしぞおもふ島がくれ行く」「ほの〴〵と島かくれ行く朝霧に。舟をしぞ思ふ明石のうらの」「朝ぎりにしまかくれ行くほの〴〵と。明石の浦の舟をしぞおもふ」「朝霧にあかしのうらのほの〴〵と。しまかくれ行く舟をしぞおもふ」「あさ霧に舟をしぞおもふほの〴〵と。あかしの浦の島かくれ行く「朝ぎりに舩をしぞおもふほの〴〵と。しまかくれ行くあかしの浦の「あさ霧にあかしの浦のほの〴〵と。舟をしぞおもふしまかくれ行く。誠に一首のすがた。なびらかなるゆゑいかやうによめども。口のうちさはらず。ふしぎの事なり。さればこそ。四條大納言公任卿。此歌を三年までこゝろえず。やう〳〵のちにこゝろえて。九品の上品にこのうたを出だせり

○一首五體のうたは。「月やあらぬはるやむかし」の歌なり。是等の姿を思へば。口にとなへてなだらかならぬは。下品とおもふべし。連歌もたゞやすらかなるを本道とするなり。俳諧とても同じことなれども。世間なにとなく異體をこのみて。肩を襟にし。ありをかたましして。ほそみちのつた山のあし引きなどやうに。句作るを人皆興とす。余もこのましからねども。時につれて。五句のうち。二句はつぶやくことなり。この體を未来記に。定家卿のよみ置かせ給ひぬ。達人考ふる所たがはず

打ちいづるなみだの氷ときは山。こゑに色ある黄鳥のたに

雪白し曉かけているそのに。千里の月のほの〴〵の山

おなじ體を。また雨中吟と名付けて

そよくれぬならの木のそに風吹きて。ほし出づる空のむら雲の影

など見えぬ。此風體をさかりによみこのまん時は。歌道こと〴〵く捨つべき世至れりと知るべし。ゆめ〳〵好むべからずと。玄旨法印も書き給ひぬ。今の俳諧も同じ。やがて捨たるべきことなり。未来をくりかへし考へ。言語のおよぶ所にあらず。たてになり。横になり。俳諧をあんずるに。一句は寓言を本意とすべし。此比あやの巻とて。梅翁師わが上などを誹謗したる書あり。かつて寓言といふことかちをしらぬかきやうなり。時を待ちて正すべき覺悟なり。詞はいくたびも古人の詞にて。そのうち一字二字の作に寓言あり。詩にも岑参が作に

孤燈然客夢。寒杵搗郷愁。孤燈といふ二字もむかしよりのつゞき字なり。然の一字の作寓言なり。ひとつの燈にむかひ。ほち〳〵とねふり。たび寐の夢をみたることを。夢をもやすと作りぬ。下句の寒杵も。郷愁も。古き字なり。搗の一字寓言なり。故郷をおもひつゞくる折ふし。きぬたの聲をるは。我故郷の思ひをたゝくと作りしなり。これにてよく〳〵詩歌の寓言を知るべし

○人丸に四人あり。布袋に四人あり

唐末僧契。此形裁腲脮蹙頞皤腹常荷布嚢。由是號布袋和尚。宋僧了明形頎肚大。道貌豐碩。世稱布袋。再来亦有元布袋者。亦元季棗陽張氏男。容貌異常。龐胖擁腫見人嬉笑。恰似俗所畫布袋。契此あり。宋の了明あり。元の布袋あり。棗陽張氏あり。いま世に圖するは。いづれの布袋にか。おぼつかなし

○白鹿和尚如何。是布袋師便放下布袋。又問。如何。是布袋下事。師負之而去。傳燈録。白鹿和尚布袋の況界を問ふ。布袋そのまゝ袋をなげすつ。又とふ。その布袋下の事をとへば。師そのまゝ負ひてさりしなり。たゞ今日無事底のはたらきなり。すべて人の心はものに着せず。とゞこほりなきやうにもてなすべきことなり。これ無事の上の有事なり。よく工夫をべきことなり

我戀は障子のひつて嶺の松。火打袋に鶯のこゑ

此うたの意は。戀慕の一念あれども。目前の障子の鐶釣とうちみて。やがて嶺の松ときゝ過ぎ。火打袋のこち〳〵をいかにや〳〵とおもふうちに。そのまゝ鶯のこゑなりけりとうつりし念頭。一點もとゞこほらず。當下一念の今日底なり

○聖人に異相あり。劉子新論云。伏羲日角。黄帝龍顔。顓頊駢骭。堯眉八彩。舜目重瞳。禹耳三漏。湯臂二肘。文王四乳。武王駢齒。孔子返宇。顔回重瞳。皐陽鳥喙。愚思ふに。人は天地の靈。

萬物の長なれば。たゞすなほにうつくしきうまれ付なるべきに。かゝる形相のあること。いぶかしき事なり。近比遊頬堀に可坊といふをとこあり。かしらするどにとがり。眼まん丸にしてあかく。おとがひ猿に同じ。又頭大甫春といふものあり。顔色常體のごとくうつくしき。人にこえたり。其たけ一尺二寸。足脛すぐれてほそく。四五歳にこえず。梅花心易を誦ず。粗書をよみて。義に通ず。またとし十ばかりなるをんなあり。足手あざなへる縄のごとし。足をとりて首にまとひ。手をまねをにいたらざる所なし。また大女房あり。江州のものなり。白髭大明神の變化なりといひつたふ。たけ七尺二寸。足のながさ一尺三寸。手のながさ一尺。全身すぐれて骨たかく。力人にこえて。達者究竟のものにもまされり。これらのもの聖なりや。聖ならずや。人一旦の見ものにして。つひに傳へてかたらず

○中納言藤原季仲太宰の帥になりて下向す。此人色あくまでくろきによりて。黒帥と號す。又西塔のむさし坊。色黒し。いかなるうまれ付にや。醫書に。色黒者腎之餘也。精のつよきことかならずと知るべし。また因州鹿野といふ所に。長七尺のをとこあり。崑崙國のものなり。高麗陣の時とらはれて來りし。色油煙のすみのごとし。常に崑崙坊といふ。幼きもの恐れおのゝきし。余が故國にてよくおぼえしなり

○人皇廿四代顯宗天皇の姉。飯豊皇女位につきて。政を行ふ。此皇女一たび男にまじはりて男女の交會既にしれりとて。そののち男に會をることなし。飯豊の天皇といへども。在位十月あまりなれば。王代のかぞにいらず。西塔のむさし坊辨慶も。ひとたび女と會して。すでに此交會こゝろみぬ。一度千會に同じとて。ふたゝび會合なかりしとぞ。まことに大男のしるし。ものにたまぎぬ質なり。おほくの軍出を見るに。辨慶が女色にたてふれしことつひに見えず

○天狗の事。杜子美が天狗賦に。上揚雲旓兮下列猛獸。されどもこれは魔道の天狗にてはなきかとぞ思ふ。その故は。此賦の中に。天狗嶙峋兮氣獨神秀。色似狻猊小如猿狖とあり。たゞ畜類のうちにあるべし。史記。天官書の中に。天狗如大奔星。有聲其下止地。類狗所墜及炎火と有り

○愛宕山の太郎坊を。なにものぞとおもふに。洛陽正六位紀朝臣御國が子。高雄の眞濟なり。柿本の僧正と號す。天安の帝不豫の時。眞濟病に侍りて加持を。しるしなくて崩じ給ふより。常の不快あり。また俗につたふ。眞濟染殿の后にあひ。そのいろにまどひ。死にて天狗になる。是太郎坊なり

○東鑑に。建治二年比。南都天狗現恠。一夜中於人家千餘宇書三字。未來不盡 尤爲奇怪

○狐はあやしきけものなり。常に人にむけてたぶらかし。また人の皮肉の内に入りてなやまし。あらぬ妙をなす事多し。抱朴子曰。狐壽八百歳也。三百歳後變化爲人形。夜擊尾出火。戴髑髏拜北斗。不落則變化人。これほど修行なり。功つみたるものなれども。一旦やき鼠の香くはしきを見て。たちまちにわなにかゝり。命をうしなふ。人もまたおなじ。智慮才覺拔群のうまれつきにて。かたのごとくの人も。色にまどひ。利にまどひて。生涯をうしなふ事。狐に同じきものなり。可以人而不如狐乎

○百丈野狐の話に。百丈に參ずる次。一老人有り。大衆に隨ひて。法を聞く。衆人退けば。老人も退く。一日不退。師問面前に立つものはたそ。老人曰。某は人にあらず狐なり。過去毘婆尸佛より。第六佛にあたる迦葉佛の時。この山に住す。學人問。大修行底の人。還落因果也。無。某答曰。不落因果。爰に依りて。五百生墮野狐身。今和尚下一轉語。脫野狐身。問。大修行底人。還落因果也。無。師曰。不昧因果。老人於言下大悟。某脫野狐身。敢告和尚。乞亡僧の式に。葬禮をなし下されよ。此後の山に死せる狐なりと。師つひに山後岩下に至りて。以杖挑出一死野狐。乃火葬。この話則の不落因果の答は。大活現前の善知識に。何の因果かあらんと。因果を撥無したるなり。又不昧因果の答は。因に落ちず果におちず。しかも現前の因果了々たる所なり。よく〳〵工夫をすべし

○佛祖錄曰。止動止更彌動。この語のこゝろは。心の動ずる事をやめんとす。やめん〳〵とおもふ念。また動ずるとなり。されば此の心を歌にもよめる

　おもはじとおもふもものを思ふなり。おもはじとだにおもはじや君

この動ずるもの何ならん

○鎌倉右大臣實朝は。宋朝育王山の長老なりしが。此國にうまれて。將軍となり給ふ。是陣和卿が申す所なり。建暦元年六月三日。實朝の夢中に。高僧一人告奉る事。この和卿が申にたがはず。この夢のたゝち六年すぎて。しかのごとく符合せると。東鏡にみえたり

○夢は呂東萊が左傳の博議曰。形神接而夢者。世謂之想。東萊讀書記曰。一體盈虛消息通於天地。應於物類。故陰氣壯則夢涉大水恐懼。陽氣壯則夢涉大火燔焫。陰陽同壯則夢生殺。甚飽則夢施。甚飢則夢取。是以浮虛爲病者夢揚。以沈實爲病者夢溺。藉帶而寢則夢蛇。飛鳥啣髮則夢飛。この論。古今の定論なり。又高宗傳說といふ賢人をゆめみ。孔子。周公旦を夢み給ふこと。これまた大體の人信じがたき所なり。されども實理なり。千聖一心はじめより

隔なし。心に靈賢をしたふこと。實に徹をれば。古人も自然に夢中に現す。たとへば萬頃のすめる水に。遠山の影を見るがごとし。遠山不来。澄潭不去。二のもの覿面にあひあふ。是又うたがはれず

○揚雄曰。人心其神矣。人之有夢也。蓋亦誠之形。而心之神也。今夫入無人之室。而其心惴焉。則或聞蕭々之聲。見罔象之形。何也。心之動也。黄山谷詩に。病人多夢醫。囚人多夢赦。又大恵語録曰。聖人無夢。この無の一字は。有無の無にあらず。世皆てじめより終り。あしたよりゆふべひるのうち。夜の間なにことか夢ならぬと。觀念したる上。別に夢といふべき夢なしと。悟りたる所なり。實朝の夢。なにの夢にか。あらず。まなぶものありてんかし

○歌道は神道の根本なれば。神道をしるべきことなり。神道に三部あり。宗源神道は。中臣。卜部。忌部の傳なり。兩部習合の神道は。弘法傳教等の智識。佛法を以て神道に合し。胎金兩部を陰陽に配し。神佛の本地一體とす。一とせ備州の大守邪神婬祠のほこらをこぼちて。其跡を田地とし。家とし。名正しからぬ社をひとつによせて。よせ宮と名づく。そのうち彌陀藥師を體としたるもあり。狐狸やうのものを體としたるもあり。延喜式。神名帳にのせたる来由正しき神社のみあらため。神職を置き。其所をまぎれしめ給ふ。本迹縁起の神道は。其の神其の社。古来よりつたへ来たりし縁記に依りて。祭禮を執り行ふ。これまて三部の神道なり。此外理當心地の神道あり。しる人すくなし

○中臣祓に。高天原に神留座須とみえぬ。此一語。この祓の至極也。高天原は本心なり。心は混沌の宮。神明の舍也。心清淨にして。神明来格す。此心の外に。高天原もなく。誠の外に神もあらず。されば儒門神主をまつるの心を。范氏が詞に。有誠則有神。無誠則無神

○歌道の傳来は。紀貫之。基俊。俊成と。古今集の相傳あるなり。二條家は爲世卿より。頓阿がつたへて。經賢。尭尋。尭恵。尭孝。東野州常縁。宗祇。逍遥院實隆。稱名院公條。三光院實澄。細川玄旨法印と。傳来して。八條殿。中院殿。烏丸殿など皆玄旨よりつたへ給ふ。宗祇より牡丹花肖柏へつたへられし流を。堺傳受といひ。南都饅頭屋へそれをつたへしを。奈良傳受といふなり

○二條家冷泉家とは。もと定家卿の住所。二條通と冷泉通とへ。うらおもてなる故なり。それをふたつにして。おもての二條の方に。爲家はゐられしより。二條家といひ。うらの冷泉のかたに。爲相卿は居られしまゝ。冷泉家といふなり。冷泉家は。上冷泉。下冷泉藤谷殿なり

○眉山早行の詩に。馬上續殘夢。不知朝日昇。又唐王駕句に。馬上續殘夢。馬嘶時從驚。上の五字同じ。東坡よだれをねぶる男にあらず。名誉のことなり。歌にも中宮權太夫

　よハの海の氷の上の通路ハ。けさ吹く風に跡たえにけり

上の句相違なきの上。詠ぜる意趣またおなじ。六百番歌合の判に。百首のうち。殊に秀逸にあらざバ。さりがたく取る事ありとなり。王駕東坡が下の句の。善惡いづれならん。このうたの下の句。またいづれかまさらん。連歌の事。前句だにかはれバ。同じ一句のしたてを付くること。勿論難ぜることなし

○宗祇の句とやらん。名月のくもりたるに

　一とせの月をくもらすこよひかな

とせられ。あくるとし明月のはれきりたるにまた

　一とせの月をくもらぬこよひかな

詞ハおなじけれども。意の用ひやう別のものなり。等類にあらず。また梅翁師のある年のくれに

　茶やすしこんな事なら百年も

その一夜あけて元日に

　立安しこんな事なら百とせも

と作せられぬ。この氣轉また作なり

○いつのとしにかありけん。歌よみて飛鳥井雅章卿のもとにさゝげ。御添削をこひしに。五月雨の題にて

　ふりそめてながれもあへぬ杣木まで。うみに出でぬる五月雨の比

海に出でぬるといふ言葉を。うみに出でぬらんとあらためて點なり。まことにのびたる詞つかひ。たけたかくこそ。又秋夕の題にて

　神代よりのあハれをおもひつゞくるも。物のかずならぬ秋の夕ぐれ

此五もじを四の時のと改めて。御褒美のことばあり。余烏丸資慶卿にまのあたり承りし御詞に。歌に相應といふものあり。たとへバたゞこの事に。不二の煙を引きくるやうなるも。尤道理ハたちながら。たゞこハあまりかろく。不二ハあまりおほいなれバ。相應しがたし。とりあひのよろしきやうによむべしと。の給ひぬること。此秋夕の歌の五もじにて。彌こゝろ得べきことぞとおもひ合せて。有りがたくこそ

○寛文丙午のとし。資慶卿に三十首の詠をさゝげて。御添削をこひしに。本歌のとりやうよろしく。一首の體然るべき趣なりと。ほめさせられし歌。寒草といふ題にて

　露霜にあまりてなどか淺芽生の。小野のしのはらかれのこるらん

また水風晩涼といふ題をくだされて

　夕日かげいりにしかたは池水の。緑涼しき風の色かな

いりにしの詞連歌のやうなり。ゆふ日影かげろふかたはと有るべしとのたまひぬ。詞つかひ雲泥のかはりあり。歳暮に

　身ひとつはさもあらばあれ。たらちねの老にはつらき年のくれかな

孝心のすがた殊勝の由の給ひて點なり

○寂静谷にて閑なる意を心敬僧都

　ちる花の音きくほどのみやまかな

言語同斷の句なり。此句を吟ずれば。繁花の地に居ても。さびしきけしき顯はるゝなり。又玄的の付句に

　もえて園生のみどりそふいろ

　とぶ蝶のつばさばかりに風みえて

これまた春野のしづかなる體。胡蝶のつばさひら／＼とみゆるほか。一點も風なきけしき。誠に奇妙なり

○本歌を細察したる發句に。西山宗長

　きのふこそ岸にさびしき門のまつ

試筆の詞に。さびしきといふ詞をとり出だされて。しかも心の新しき述作歳旦には。奇妙の句なるべし

○備州の武士熊澤淡庵といふ人の句に

　いざよひは月のかつらの一葉かな

昌程祖白玄祥。いづれも長點に褒美の句なり。心詞たぐひなくこそ。同國盲人玄與といふ連歌師の句に

　小松さへそゞろかにたつ冬野かな

冬野のけしきさび／＼としたる一體。そゞろ寒き感情止みがたき句なり　又余が句に

　とりとめぬ風もみえけり朝ごほり

祖白の長點褒美の句なり。連歌はゐならひやすく見えて。たちのぼるほど及ばれぬさかひあり。ことしの元日に

立ちにけり世を思ふゆゑにけさの春

宗因。宗春兩師にうかゞひければ。長點なり。うれしさに昌程老につかはしければ。また長點にてありき

○昌琢ある會にて

おち行くかねのゆくへしられず

水邊三句きて人々あんじわづらひしに。昌琢の前もよかりしが。例のくせにて。よき句とおぼしめせし句。吟じ給ふには扇を手のうちに二三度手ならし給ふが。この時も扇をならして執筆にむかひて

竹の子はもとよりふしの顯はれて

とあそばしぬるとぞ。奇妙のとりなしなり

○いつのとしにかありけん。昌程の付句に

いづくの山にかくれそむらん

卯の花のさけどもなかぬほとゝぎす

一座あと感じ。既に執筆懷紙にかゝんとせしが。父昌琢まちつと有るべき所なり。あんじて見よとのたまふ。ひとぐゝいかならん事にか。此ごろの秀逸にて候と申されけれども。昌琢かぶりふり給ふまゝ。昌程しばし案じられて。又卯の花のと。五もじ執筆へわたし給ふ。昌琢それにてこそよけれとのたまふ

卯の花のちれどもなかぬほとゝぎすを

さすがの昌琢なれば。二の句きかぞ。うの花のといふ五もじにて。それにてこそとのたまふ。不思議のことなり

○梅翁師に。俳諧のさしあひの事とひければ。先生のたまふは。さし合は連歌にさへ定めがたし。むかし昌琢の新式。御講釋あそばしけるに。何に何は嫌なり。他は准之とある所にて。爰が大事なり。この准ずといふ字に。其准じ手の了簡よきとあしき學者不學者のかはりありと。仰せられし。まして俳諧のさしあひ。猶これにてこそとかたられぬ。至極のことなり

○八月十五夜の月を賞ること。もろこしにては。李唐より。專。起りたることなり。婁宿

に當りて。必。清明なるべきに。必くもるなり。されば擊壤集に邵康節が中秋の吟に

一年一度中秋夜。十度中秋九度陰。と作せられぬ。九月十三夜の月。もろこしに沙汰なし。日本にて。菅道真

昔被榮華簪組縛。今爲貶謫草萊囚。月光似鏡無明罪。風氣如刀不破愁。此詩をつくりて見そめ給ひしより。あまねく常する事になりぬ。又無題詩集。法性寺關白の詩に

十三夜影勝於古。數百年光不若今。獨憑前軒回首見。清明此夕價千金。これらの事を本として。此良夜をもて遊ぶ

○尚書の大傳に。桀自言。吾有天下。如天之有日。日亡吾亡耳。この意を萬葉十二戀のうたに

久堅の天津みそらにてれる日の。うせなん日こそ我戀やまめ

○戀ひしき人をゆめにみんとおもへば。雙陸盤を枕にして。衣をかへして夢の妙童菩薩を念ずれば。必夢にみるとなり。ある歌に

いとせめて戀ひしきときはぬば玉の。よるの衣をかへしてぞぬる

○萬葉十六。無心所著の歌とて

吾妹子之額爾生流雙六乃。事負乃牛之倉乃上之瘡。まことに此歌のつゞき分けなき姿なり。此比世間よからぬ人の俳諧の詞つゞきに。一句のたよりもなく。むざと何の山。何の雲と結び。あらぬ詞のそやること。無心所著の體なり。百韻のうち五句三句はさもあらん。毎句此いき樣をこのむこと。あるまじきことなり。此ごろの世上の句體を。梅翁もなげき給ひて。發句に

いま筑波がまくら宗鑑いはぬ櫻

と記せられぬ。太平記第一に。時政九代の後胤相摸守平の高時入道宗鑑が世に至りて。天地命を改むべき危機。こゝに顯れたりと書きたり。此宗鑑。數千の犬を庭上にてそなちがみ合せし遊興。北條九代滅亡こゝに究まれり。いまの俳風も。江戸。京。大坂面々の流をたて。專に無心所著のみ好むこと。山崎宗鑑より。今此時に當りて。俳諧亂逆の摸樣なり。その故は。京。江戸。大坂の俳士。昨日の作。けふは古しとし。春もてあそぶ風儀。秋はもちひず。去年の格。ことしはかそりぬ。これらを板行して。國々へ下す。遠國波濤のすゑに。やゝ用ひてかくもあらんかと。もと志なれし風格を。五句三句あらため。少しもとづくうちに。また異風の體をとり行ふ故。天下の俳諧。一日も安堵の作意をめぐらさず。かの守武がもてあそ

ぴし千句の樂ハ。やゝつき。梅翁の好みし句體のかろさ。やがてやみなん事。こゝろある人眉をひそめ。きく人唇をうごかす。是俳諧に主たるものをたてず。面々の家をたてんとするより。かゝる事になりぬ。俳門に學士なきがいたす所。なげくべし

○むかしの人のおもひ入り淺からぬ事なり。源覺僧正の夢に。素性が入りて。我が第一のうたと申しける歌

手向にハつゞりの袖もきるべきに。もみぢにあける神やかへさむ

此素性法師ハ。左近將監にして。清和の時の人。かくれなき能書なり。やまと物語に。遍昭がもとへ行きたれバ。法師の子ハ。法師こそよけれとて。法師になしたまふよしみえぬ

○歌仙のかきように。三様あり。世尊寺行能の流。尊圓親王の流。徳大寺殿家のちうしやう。余つたへて習ふ。人しるべきことなり。やがて梓にちりばめて。世の寶と可爲覺悟なり

○いづこの國の事にてかありけん。三十にあまるまで。をとこもたらぬむすめの。七月七日の夜よめる

ものいまひせずバかさましたなバたに。我がひとりねの衣なりとも

此歌。所の主聞こしめして。頻にめあハせ給ふとぞ

○菩薩の無生忍を得るものすら。もと見たる人の前にてハ。神道をもあらハし難しと。なにやらんの書にて見あたりし。實にこゝろざしある人ハ。見ずしらずの國にて。その業をなすべきとなり。ことに醫術針治の人。その國にて。其まゝ業をなしてハ。おほくハ人信ぜず。他國に入りて事を行ふべきことなり

○斑。西域萬字佛胸前吉祥相也名長樂 卍此字も。書滿の訓あり。廿の字なり。延喜の帝を。七の帝と申すなり。七人の賢人を左右にして。政をなさしむる故なり。久しきことをいハんとて。七世といひ。德の數をあげて。七德といふ類なり

この殿ハむべもとみけりさき草の。三葉四葉に殿作せり

此歌の三葉四葉も七なり。多き心なり

○むさしの國ほりかねの井。余。廿二歳のとし。江府に下りて。もの學びせし時。儒學の師檜川氏。半融軒に隨ひて。安座府のほとりを遊歩せしに。おもひ出でゝ。あるものに問ひければ。安座府天徳寺の未申のかた。なにがしの（名ハわすれぬ）後園にありとをしへぬ。かたのごとくの名水なり。たちよりて一盃のいさぎよきをおもふ

○忍の岡といふ所ハ。東叡山寛永寺也。南光坊慈眼大師の開基なり。堯惠法印の紀行に。十

二月のすゑつかた。武藏の忍の岡に優遊せり。そのところの鎮守を。五條の天神となん申し侍ると書きたり。五條の天神とは。少彦名命にて。大己貴命と。心を合せ。醫藥の事をつとめて。世にをしへ給ふ神なり。夫木抄俊成卿のうたに

たがための忍の岡の下わらひ。けふりはたてどもえにたるらん

○江戸無量山壽福寺傳通院は。了譽上人の草創にして。順徳年中の開基なり。本尊は惠心僧都の作。座像の阿彌陀なり。この了譽上人往生の儀を。蓮花化生の義なりとの給ふ。空也の歌に

一聲もなむあみだ佛をいふ人の。蓮の上にのぼらぬはなし

又了譽上人の詞に。一向愚痴の人。決定往生を。小分智あるもの。往生すべからず。此愚痴の二字。たふとき事なり。この愚痴をしらば。もろ〳〵の智たるべきなり

○三縁山増上寺は。大蓮社酉譽聖聰上人の開基なり。了譽上人の弟子なり。淨土經の文に。親縁近縁増上縁といふ事あり。それより名付けたる山號。寺號なり。是によりて思ふに。軒號表徳號。古語を思ひてこそ付くべきに。いまの人の軒號。名に相應せず。たしなみて熟字を付くべし

○黒髪山は。下野國二荒山なり。補陀落とも。和訓ふたあら。ふだらく近し。今の日光山なり。釋道勝初めて開基を。新千載集に。公實公の歌

旅人の真菅の笠やくちぬらん。黒かみ山の五月雨の比

黒髪山は。備中なり。余は一たび此上にのぼりて。遊歩せしが。ちいさきほこらあり。殊勝なり。行家の歌に

色かへぬ黒上山のやまかづら。かくてやひさにつかへまつらん

○白河の關は。芦野といふ所と。そたの宿といふ所に。二所あり。これ故。白河二所の關といふなり。能因がよみしは。そたの宿とて。むかしの海道なり。其上に關山とて。高山の九折なる一里ばかりも侍るべし。そこに滿願寺といふ密宗の寺あり。桓武帝の願刹とて。勅筆の額ありといふ。白河關高玉縄下。夢觀集に。隆天錫が作りて。もろこしまで聞えたる名所なり。なにやらんにて見し。さしものうた人。此關を通るとて。たび姿を改め。衣冠正しくかいつくろひて。うや〳〵しくして通り給ふ。いかなる故ぞと尋ねければ。かゝる殊勝の名所を。徒に行かん事。おそろしき事なりとの給ひしとぞ。有り難き志なりけんかし

○将軍家白河をこえ給ふ時。關の明神に。奉幣あり。此間に景季をめして。當時初秋なり。

能因法師が。古風おもひ出ださるのよし仰せらる。景季馬をひかへて。其儘一首を詠ぜ

秋風に草木の露をはらはせて。君がこゆれば關寺もなし

誠に勝勇の武士の。かゝる風流のある事。かの魏の曹操が。槊を横たへて詩を賦せしに。同日の論ならんや

○人王卅八代齊明女王。登極の日。天智天皇爲皇太子。此時新羅百濟の取りあひあり。故有りて。齊明。天智。攝州浪花に行幸。爰にて軍事をはかり。戰艦を作りて。浪花を發し。海陸の兵馬あらそひ來り。つひに龍駕を。土佐の國朝倉山に止め。橘廣庭の宮に居給ふ。このたびに。清御原天皇も隨ひ給ふ。これ天武天皇なり。時に朝倉山の木をきり。かりの皇居を作る。皆黒木の丸木を用ふ。故に木丸殿といふ。新に關所をかるかやの地にまうく。關を行くもの。其姓名をとなへざる時は通さず。されば天智天皇の詠み給ふ御製に

朝くらや木の丸殿にわがをれば。名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ

是を和歌の家の談に。木丸殿朝倉はつくしの事なりと。多くは談じ。又百人一首の抄共に書けり。あやまりなるべし。右藤原兼良の説なり。是日本紀。延喜式を證とせ。土佐の國を正說とすべし。今考ふるに。土佐の國鶉来巣（ウキス）山は。苅萱（カルカヤ）の關なり。林氏向陽軒春齋鴻儒。是を證として。土佐朝倉宮再興の記にも書きたり

○濃州稻葉山は。いまの岐阜なり。また因幡有山名因幡山。有松。この因幡山は。今鳥取より南北にあたる所に。宮山といふ地あり。風景すぐれたる山にして。松もまたふりておかし。宗祇の說なり。余も爰に遊觀せしが。はやむかしになりぬ

○先年行幸のとし。禁裏和歌の御沙汰あり。題は松契遐年と四字の題なり。烏丸光廣卿。因州の牧少將殿にかはりて。よませ給ふ御歌に

峯におふる松の千とせをとりそへて。君はちよませ宿のくれ竹

五もじ奇妙なり。たれやらんかたりぬ

○備中吉備津宮に。釜の動ずることあり。巫覡釜の下に火をたき。あらひ米を一つまみ入れ。水をくみこんで。たき立つれば。何時も釜動ずるなり。神納受あれば。雷の如く動ずと云ひならはしぬ。されども。常に人家にある釜のうなること。かならず凶事なりとて。忌む事なり。楚辭卜居篇に。瓦釜雷鳴。朱子の解に。瓦釜無聲之物。雷鳴。謂。妖怪而作聲如雷鳴也などあれば。凶事といふ事も。さも有るべきことなり。今吉備津の宮の釜の動ずること。愚盲の男女ひとへに信ずること。誠に笑ふべき一つなり

○在原業平は。幼少なりし時に。曼陀羅丸と號そ。うまれつき。天下の美男たりし。空海の弟子。真雅僧都戀慕して。やまとうたをよみて。贈れるとなん

おもひいづるときはの山のいはつゝじ。いはねはこそあれこひしきものを

○人の名に。丸といふ字をつく事。まるは不淨を入るゝ器なり。不淨は鬼魔のたぐひも嫌ふものなり。されば鬼魔の類ちかづかざる心を祝して。名の下につく心なり。古今集の作者に。屎といひ。貫之が幼名をあこくそといふ類おほし。いまも穢多の子にして。その名を穢多とつけ。又いぬと名付くること。皆同じ。是玄旨法師の古今にて。沙汰し給ふとぞ

○寛平八年九月二條后（清和の后陽成の母）東光寺の僧善祐と密通のこと顯れ。后は位をすべり。善祐は伊豆國へながさる。后この時五十五歳なり。としといひ。身の分限といひ。あるまじき事なれども。色にふけるものゝ。身をあやまつ事。聖人より已下。まぬかれず。つゝしむべし

○避嫌疑詩に

女子年當省事時。莫容出外去遊嬉。僧房佛室尤當忌。親戚人家亦不宜。また遠僧道詩に

僧尼道士到人家。女子休教出侍茶。いかさま十念をさづけ。决脉をつたふといひて。女子を密房眠蔵に引き入るゝ事。そなはだこゝろえぬ事なり。僧尼。女子のまじはりつゝしむべきことなり

○念佛に。一念多念の二あり。一念義は成覺より起り。多念義は隆寛よりそじまる

○雷霆の理。人おほくうたがふ。余薛瑄の讀書録のうちをみるに。めづらしき發明あり。小童に栗を焼かしむ。忽に殻破れ。聲はりさく。これ熱氣内にあり。いづることあたはずして。ふるひ起りたるなりとあり。程子はいなびかりをは陰陽相きしり。雷は陰陽相擊つとのたまふ。是古今の定論なり

○五月の雨をつゆといふこと。本草雨水の下にあり。五月上旬より。下旬につらねて。尤甚し。この後皆書物畫像等をさらすべし。この雨にかびたる垢は。梅の葉を煎じてあらへば。速に落つるとなり。時珍曰。梅雨或作黴雨。芒種後逢壬爲入梅。小暑後逢壬爲出梅。芒種とは五月の節なり。また小暑は。六月の節なり。究竟五月中の雨をつゆと云ふと知るべし

○古文真寶漁父辭。六韻一叶の事。古来よりの難義にて。人しらず。林道春考へて粗明白なり。淸醒纓（庚耕淸一韻）移釃爲（支脂一韻）波（麻韻）衣汶（文欣一韻）濁足（一韻）白埃（史記屈原傳塵埃之二字作二蝹蠖一）是にて六韻なり。衣の字青徵。所謂一戎衣言一戎殷也。見禮記鄭玄注。五山長老。古文十三巻抄。こ

のかたもろ〳〵の抄頭書あれども。此說をみず。三百年来の一奇事なり。三韻一叶。六韻一叶の置所のたがひ。人皆しりたる事なり。考へてみるべし

○陶淵明が詩。採菊東籬下。悠然見南山。この兩句の高遠第一の達摩なりと。葛常が韻語陽秋にみえぬ。世間この二句にのみ高遠あることをおぼえて。歸去来の賦。一篇にある事をしらず。歸去来の字に。達摩も及ばぬ道德の骨髓あり。このかへんなんいさの味ひをしらば。浮世をにたる事。やすらかなるべし

○劉伯倫が酒德頌の發語。有大人先生の五字。林以正註して。假託辭とす。これを劉伯倫が自假りまうけて。いふとばかり講ず。さにはあらず。心中の大德酒にあらず。粕にあらず。高明の大人先生なり。その大人先生の。起居動靜の樂しみをのべたるなり

○五柳先生傳に。先生不知何許人。亦不詳其姓名。これまた淵明がみづからの事をかくとてしらず。つまびらかにせずと書きし事。かろく見るべからず。かの一心高上の先生なり。この一心高上の先生は。来る所もなく。去る所もなく。たゞ渾々たるものなり。尤姓もなく。名もなき心なり。この地位をのみこまずして。古文を講ずるもの。たゞ文章の糟をくらふ輩なり。よく思ふべし

○蘭亭記。王羲之が筆。一生の出来ものなり。鼠の鬚の筆にて書きし二十八行三百二十四字あり。おなじ文字は。皆別體をかく。中にも之の字多し。二十許さま〳〵に變じて。其體不同。されば論者稱其筆勢若遊雲。矯若驚龍。この遊雲矯龍の詞。手跡の活法なり。世上筆法を沙汰するに。いくつ書きても。字形のかはらざるをよしとおもふ。このかはらぬ筆格は。遊雲にあらず。驚龍にあらず。皆死筆なり。尊圓法親王も。文字の體相十八樣あそばしけるとなり。古今の能筆なり。余卅八の年。いまの青蓮院殿にまみえし時。この御沙汰をつゝしみて承りぬ

○王秋江といふ文人。詩に巧み。また筆道によろし。羲之が筆を俗なりといへり。余この詩におどろく。文如王勃徒輕體。字若羲之秖俗姿

○赤壁賦に

白露橫江水光接天と。蘇老泉が書きし露のよこたはるといふ詞。めづらしき作意なり。是をとりて。昌程が發句に

しら露の江によこたはる柳かな

とせられぬ。柳の一字にて。よくよこたはりたる事。東坡もうなづくべし

○唐音をしること。二首のうたにて心得べし

一は五に四は二に通ひ五は三に。二三の時は本坐がへしぞ

引くはてねてぬるはてぬる入聲の。あしをきりすて 三字中略

一は五といふは。アイウエオ。アンハオン 四は二に通ひは。カキクケコ。ケンハキン 五は三にとは。サシスセソ。ソンハスン 二三の本坐は。タチツテト チンハチン ツンハツン

東引は てぬる 珍はぬるは ぬる 格 入聲の足 きる 達 同 玉 三字中略 略 同格

○呉音といふ事。呉音は日本に近き所なる故に。入唐の僧徒。先。呉國に入り。其聲をつたへて。經文を呉音によみ來りて。漢音に分つ

○真言の悉曇は。傳授をべきことなり。余もある智識に。懇望して。いさゝかならひぬ。悉曇をならはねば。和語の心にうとし。たとへば歌を何とて歌とはいふぞとおもふに。うたとのひゞきに。天地萬物のこらずこもる心あり。歌學者しらで。叶はぬ事なり。是悉曇にて埒明事なり

○老子は生れながらにして白首なり。玄妙内篇に。李母懐孕八十一載。逍遥李樹下。迺割左腋不生。生而白首。故謂之老子。人皇廿三代清寧天皇は。雄略の子なり。母は葛城の韓媛といふ。圓大臣が娘なり。この天皇生れながらにして。御髮白ければ。白髮の天皇と名付けぬ。和漢の事同じく合せてしりぬ

○源氏は。和國の奇筆なり。細川玄旨法師の扈從に。宮木善右衛門孝庸といひし武士。因州の牧に仕へ給ふ。若年の時より隨ひて。奥曲に傳授して。脩り終りぬ。かたのごとくの口訣ともあり。ある中に。孝庸。玄旨法印に。世間の便になる書は。なにをか第一と仕るべきと尋ねさせければ。源氏ものがたりと答へ給ひし。また歌學の博覧第一のものはと問給へば。おなじく源氏と答へさせ給ふとぞ。なにもかも。源氏にてもみぬるごとくうけ給はりぬ。源氏を百色つぶさにみたるものは。歌學の成就なりとの給ふよし。孝印はかたらせ給ふ

○源語秘訣といふ一巻は。源氏の大事を十五箇條あらはして。傳授することとなり。その目録は。「桐壺源氏の服。あり無の事「ゆふがほ揭名のすけの事。同侍童着指貫事「花のえん翁もほと〳〵舞出でぬべきこと「あふひ大将かりの隨身のこと。同ねのこ三つがひとつの事。同さるもじいませ給へのこと「さか木とのゐの袋のこと「あかしまくなぎの事「うす雲にか君のたきき引きゆひ給へること「玉かつら水鳥のくがにまとへること「て

つね高市子のこと「こてふひのよそひのこと「藤のうらばついたちころの月のこと。このうち三箇の大事は「揚名の介「ねのこ三がひとつ「とのゐの袋なり。誠に源氏みざらむ歌よみは。むげの事なりと。さすがの歌人もの給ひ置かせ給ふもの。和國にうまれてよまずしてはかいなし

○東鑑を閲するに。建保元年十一月。藤原定家秘本の萬葉集を實朝卿に贈らる。定家卿歌道の門弟三人の上手は。常磐井相國。衣笠内大臣。鎌倉右大臣實朝なり

○萬葉は集の鼻祖。尤しるべきものなり。文字をもっててにをはの分ちをこゝろ得ること。第一なり「吾舩者枚乃湖爾榜將泊與部莫避左夜深去来はてんなどの一字。はねはすてんとすの心なり。「なゆきそは行くことなかれの心なり。「月疑零疑か もらしの詞。皆うたがひの心なり。「將黄變うつろひぬらんのことばは。黄に變ぜんとその心なり。「峯の上「雪者雖零ふるといへどもなり。「令落莫ちらしむることなかれの心なり「垂乳根之母我養蠶乃眉隠馬聲蜂音石花蜘蛛荒蚊異母二不相而いふせくもあるかの詞。此字にて見ればたへがたく。いやなる心なり。「あはずてといふもあはずしての心なり。この字の心にて下の句のてとめもこゝろうべき事なり。してといふ心に通ずるては。何時もとまるなり「欝の一字も。また萬葉にいふせくともよみたれば。欝しふさがる心もあり。「吾戀矣老矣このらくの詞心なき助辭なり。矣文章の置字なり。「豫あらかしめの心なり。「欲得ねがひの證據なり。得むと欲すの二字にてしるべし。「石尚民副すらはさへの心なり。巖すら。民すらの詞を。巖ら民らの心と思ふは誤なり。さへと同じ。今ひとつ物をそへたる心なり。源氏に多し。きりつぼの巻に。さきの世にも御ちぎりや深かりけん。世になくきよらなるたまのをのこみこさへうまれ給ひぬ。これ更衣源氏の御なかの。いとふかきに。剰をのこみこさへうまれ給ひぬと。物をそへたる心なり。「及相日及戀までにといふ詞は。それまでにとおよぶ心なり。「領知伊勢物語のしるよししても。領知のこゝろなり。「戀云てふは。いふにてふ二句去にすること連歌の式なり。いつぞや或人の連歌に。小松をも引きつれしてふ花の春といふ付句を。祖。白老に點取しに。このてふの詞。つゝきいかゞ侍らんと。批判の脇書ありしなり。誠に尤のことなり。いまの俳士など。多くはやすめ字のやうに心うるものあり。誤なり。「將關めやの詞。せきとめんとせんやといふ心なり。「將行哉同じてにはなり。「諸所因来これにてみれば。宮古のたつみしかぞすむも。よく應諾してすむ心なり。應諾はよく〳〵合點してうけかふ心なり。「否藻諸藻これ

もいやといひ。應といふ詞なり。「妃水逝そじめて水のゆく心なり。「東風越路の詞に。東風をあゆの風といふなり。「迅風急にふく風なり。「如是戀かゝるはかくのごとくなり。家鶏の垂尾乃亂尾したりをは。みたれたる尾なり。「降乍ふりつゝの心はふりながらの心なり。「眠不寢眠てもねられぬ心なり。「宿妃繋かねてねそじめけんの心なり。「朝魚夕菜朝夕の魚菜なり。「海士乃潛云かつくは海底をくゝりゆくこゝろなり。「汐滿来者潟無かたをなみは。干かたなき心なり。「將依よりなんは。よらむとすの心なり。かゝる文字のあつかひにて。詞の分ち明白なり。よく〱心を付けてみるべし。又やがて連俳のたよりになる歌を。萬葉より抜粹して。四巻閉板せしめ。世の補ひとすべき心ざしなり

○萬葉集似古詩。古今集似唐詩。伊勢物語似變風之發情。源氏似莊子與天台書

○百人一首は。百人一首と四字をあらはによむべからず。一の字を人の字の下にふくみてより聞へぬやうによむが習ひなり。「天智とにごりてよむ。「持統天皇。持統の二字共にすみてよむなり。「山邊とよむべし。「法師多けれ共。喜撰ばかり法師とつめてよむなり。「丸の字いつも磨とよむべし。「陽成院陽成院とよむ流もあり。「在原氏の時は何時もはらなり。所の名にてはわらなり。「文室すみてよむなり。文字も文屋は俗字なり。「貞信公「壬生忠峯氏の時すみて。名所の時濁るべし。此例通用の事なり。「坂上さかのへとよむ。坂の上とよむべからず。「深養父深やぶとよむべからず。深ようと訓べし。「文室朝康ともやすとはよむべからず。「赤染衛門にごるべし。「權中納言權中と濁るべし。「行尊とにごるべし。「祐子内親王家紀伊とばかりよむべし。崇徳院しゅと訓むべからず。「あまのかぐ山。「ひとりかもねんかもと上へつけてよむべし。「つくばね古今の序にてつくはやまとそむべし。「有明の月をまちいでつるかな。まちいづる哉とよむべからず。「月みればちゝにものこそとすむべし。「人にしられでくるよしもがな濁るべし。「人しれずこそ思ひそめしかの。か文字すむべし。なるほど口のうちかろくよむがならひなり。「ちきりきなかたみに袖をしぼりつゝとよむなり。「あひみての後の心にくらぶれば。むかしはものをとあれども。定家卿自筆の小倉色紙には。ものもとあり。しかるべきなり。「あふ事の絶えてしなくのしもじ。上へつけて乙音によむべし。「えやはいふきとよむべし。あきらかに伊吹とよむべからず。「さびしさにやどをたちいでゝながむれば。いづこもとかくべし。これも定家卿の自筆に。いづことあそばしける也。「瀧川とにごるべし

○百首のうち。五ケの祕歌あり。人丸。喜撰。仲丸。忠岑。定家この五人のうたなり

○古今の序のうちに。先さしよりはいさゝかあるべきは。やまと歌はといふよみやう。やまあと歌はと。すこし引く心もちによむべし。閒合はやまをさげて。とを上て。歌とさけてよむ調子のならひなり。たゞしまあと引きて。もちひぬ傳もあり。しかるべき説なり。したてる姫はすみて。そとほり姫はそとほりびめとにごるなり。たかきやまは。ふもとのちりひぢよりなりてを。ちりいちとよむべし。かゝるにいますべらぎのあめのしたといふを。すめらぎとよむべし。すべらきとよむべからず。「衞府すむ。いせものがたりに衞ふのかみとあるは。ようのかみとよむなり。「むら戸あなたこなたにある戸なり。すみてよむなり。沖なか川すみてよし。長川といふ心なれども。すみてとなへきたれり。「ゆふくれは雲のはたてすむべし。「松しまやをしますむべし。松しまにつゝけぬをじまはこるがよし。「もゝしきとすむべし。「くちつきすむがよし。わたつうみわたつみと書くとも。五字によむべし。病葉夏の季なり。わくらはといひて。罕なる心をいふはすむなり。千舟百舟いつれもすむなり。雨げ雨むり心なけ朝夕の心なり。萬葉には。朝にげとみえたり。相撲の事をことりつかひといふつがひと濁るべし。こゝろ端心のそづれなり。御ざうし公家衆は。おほかたすみて用ひさせ給ふ。昌琢は上を濁りてよみ給ふとなり。弓槻が嵩にごるなり。目

くせせ目ぐはせともよむ人あり。天磐櫲樟舟舟の字濁るべし。ゆふつゞ宵にいつるほしなり。大白星と書くなり。「ゆふつけ鳥けと濁るべからず。「新志まもりとすむべし。「むかしべと濁るなり。清みてよむ流もあり。「岩かき濁るべからず。「秋の季の色鳥濁るべし。「すゞろのすゝきおなじ。春やきたる野の灰をゝきのよのうちに入るくろきをいふなり。「盃ぐつむ。「すがもの。「すがかさとよむべし。「みしま菅笠ありますが笠おなじ。「すすめいろ時と濁るべし。「いちじるきと是も濁るなり。「こまかへる草春なり。若色の二字をよむなり。連歌にて白髮をしらかみとよむべし。このとなへ梅翁師につたへぬ。「ゆたのたゆた、ゆするゆふかつら、かつらにゆふ付けたるなり。歌書にむかひよみてとあるは。いつとてもよんでとでねてよむべし。「深草本にてはふかくさとよむべし。「太政大臣とよむべし。「千首の和歌などゝいふをすみてよむべからず。「續後撰續拾遺などの續の字。何時もしよくと訓むべし。「さのふこそさなへとりしかいつの間に。かもじすみてもちふべし。「としたけてまたこゆべしとおもひきや。命なりけりさやの中山。夜といふ心をうけたる時。さよの中山とよむべし。さならぬうたいづれもさやの中山なり。「宇治のむしびめ濁るべし。「とこなれ両鵆なり。「かはたれどき曉の事なり。「かほ鳥。「おほど

か。ぐもり日。ぐすりごふし川。横川はすみて。其ほかみな濁るなり。「朝妻舟あまのたぐなはとは。あまのたぐるなはといふ心なり。「さしづかさ。さしざはなり。「ゆらく玉の緒。「おほあらきのもり。おあらきの森とよむべし。「わかむらさきのすりころもにごるべからず。「ひたやごもり。「ものこもり。「雨そぼふる。「あさがしは説々あれども。たゞかしはの事なり。「杏とき。「ひこしへ。「せみのもろ聲。「つるのもろこゑをみてよむなり。多くなくことなり。「などてかく何とてかくなり。いせものがたりのうち。「おほしりすみてよむ「しもつふさの國。「くすこ。「後凉殿のはさま後凉とよむべからず。色このみ。あだくらべ。かたみにあけるとたの字をおとしてよむべし。「わらうだ。「めがれせぬ。「いさごの山兩説なり。「すゝなん青さこけをきざんでとよむべし。ぎざみてとはよむべからず。「おほみやす所と書きておほみやすん所とよむべし。「女をはまかでさせてを。まかんでとすぬべし。「なにのよきことゝおもひてなんのと。すぬべし。これらの格式よく〳〵こゝろにかけて見るべし

◎朱雀院亭子院とよむがならひなり。正一位とあるを神社にて。正の字をみてとなへ。人倫の上にて濁るなり。「内親王をひめみこともよむべし。なにがしの男とあるをむすことよむなり。「女官とあるをにようくわんと引くべし。女院とおなじ。「陰陽師と書てをんみやうじとよむなり。「暦の字をりやくととなふるなり。「晴の字。諱の時はれといふべし。ゑるとよむべからず。「信の字公家にてさねとよみ。武家にてのぶとよむ。歌仙の信明もさねあきらなり。「朝の字も。武家にて朝。公家にて朝とおほかたとなふるなり。「師の字なんのそちととなふべし。「別當をべたうとよむ。「文殿修理のすけなどゝとなふべし。勘解由小路勸修寺などよむなり。仙洞といふ二字は。様とつけて唱ふる事。あるまじきなり。公家衆の前にても憚なく。仙洞と許いふべきよし。資慶卿は仰せられぬ。「皇太后宮太夫を后宮と引くべからず。「納言の二字でかりはなふごんととなふべし。これらは職原にての沙汰なり。すべてよみくせ。清濁のならひ。よく傳受すべき事なり。無學者のそづる所なり。神書のうちに「彼方屋繋木加本乎焼鎌乃敏鎌於以天とあり。かなのごとくによむべし「吾皇御孫尊乃美頭乃御舎仁「畔於放地溝乎埋樋於放地かなのごとくにとなふべし。神書は神書。歌書は歌書。佛書は佛書。いづれもならはで我流によむこと。ゆめ〳〵あるべからず

◎すべての歌書。巻頭の歌は。みだりに講ずべからず。萬葉の巻頭二首。古今の巻頭。百人

一首の巻頭。詠歌の大概のそしめの歌。皆々その書に至りてのこゝろえある事あり。講誦のときにもおほかたはのこしてよまぬがならひなり。しかあれば。いまの代かりその物をあむとても。巻頭の一首。巻頭の一句は。よくふかゝるべきみちなり。かならず人によらず。位によらず。男女の差別によらず。一部の巻頭。子細あるべき事なり。「あまの八重雲(ヤヘグモ)「丸寐(マロネ)「まぶしさす「古文(フルフミ)など濁りてよむべし。「あまがつ尼児と書くなり。ほうこの事なり。「さくら獵(ガリ)「朝獵「ゆふがり皆濁るべし。「妹許(イモガリ)とよむなり。「明がたにくらくなるをあけぐれと濁るなり。「あけやみともいふなり。「秋去衣(アキサリゴロモ)と濁なり。古今の序に。「御國忌(オンコクキ)とあるをこきと訓むべし。「そつ木にかけほを衣。また木やそつ木のさゞふねなどつなぐくひにとまりたるなり。泊木と書くなり。「そだら雪「そたれ雪「五十鈴(イスズ)川あまのそしたてはかならずすむなり。「あをからはわかなつまんとしめし野にもみてよむ。しめ置きたる野の心なり。「四極山(シハツ)しそつ山ともしそつ山ともよむなり。「いほざき「妹(イモ)がしま「緒(フ)たえのそし「有度濱(ウド)とすむなりくらふ山と常はすめども。ものにくらぶるやうによみかけし時。くらぶ山と濁るなり。「淺澤小野(アサザハ)といふ時にこりてたゞ淺澤といふ時はすむなり。「雲消(ユキゲ)の澤とにこるべし。かやうの例をよく辨ふべきなり。

○おぼゝしてを何時もおほしてとばかりよむべし。「うへ人なともなどゝあるなどの詞。いつとてもなんどゝそねてよむべし。「五六日をいつかむゆかとよみ。十二日などゝあるは。十まり二日と。あまりの字入れてよむべし。「三位のくらゐとある所を。みつのくらゐとよむなり。「弘徽殿(コキデン)を弘徽殿(コウ)と引くべからず。「しゆくえう(宿曜)のかしこきみちのひとゝあるをそくえうとよむべし。「くまんさの御殿と書きたるをくわざとよみてそねぬなり。「御の字歌書にむかひておほんとよむ。御(ミ)とよむは。おほかた釋教の所なり。「御前はおまへとよむべし。「ひだりのつかさひだんつかさとよむ流もあり。「をりひつものとあるをおりうづものと訓むべし。この詞共きりつぼのまきにあり。「舍衞國(シャエ)をさゑこくとよむ。「娑婆世界(シャバ)をさむせかい。修行をそぎやう。「珠數(ジュズ)をそゞなどゝよむが例なり。「沙羅爲樹(シャラカンジュ)をさらゐ樹。「跋提河(バツダイガ)をむつたか。「三藐三菩提(ミャクサンボダイ)をもそねぞにさみやくさぼたいのほとけたちとよむなり

消閑雜記畢

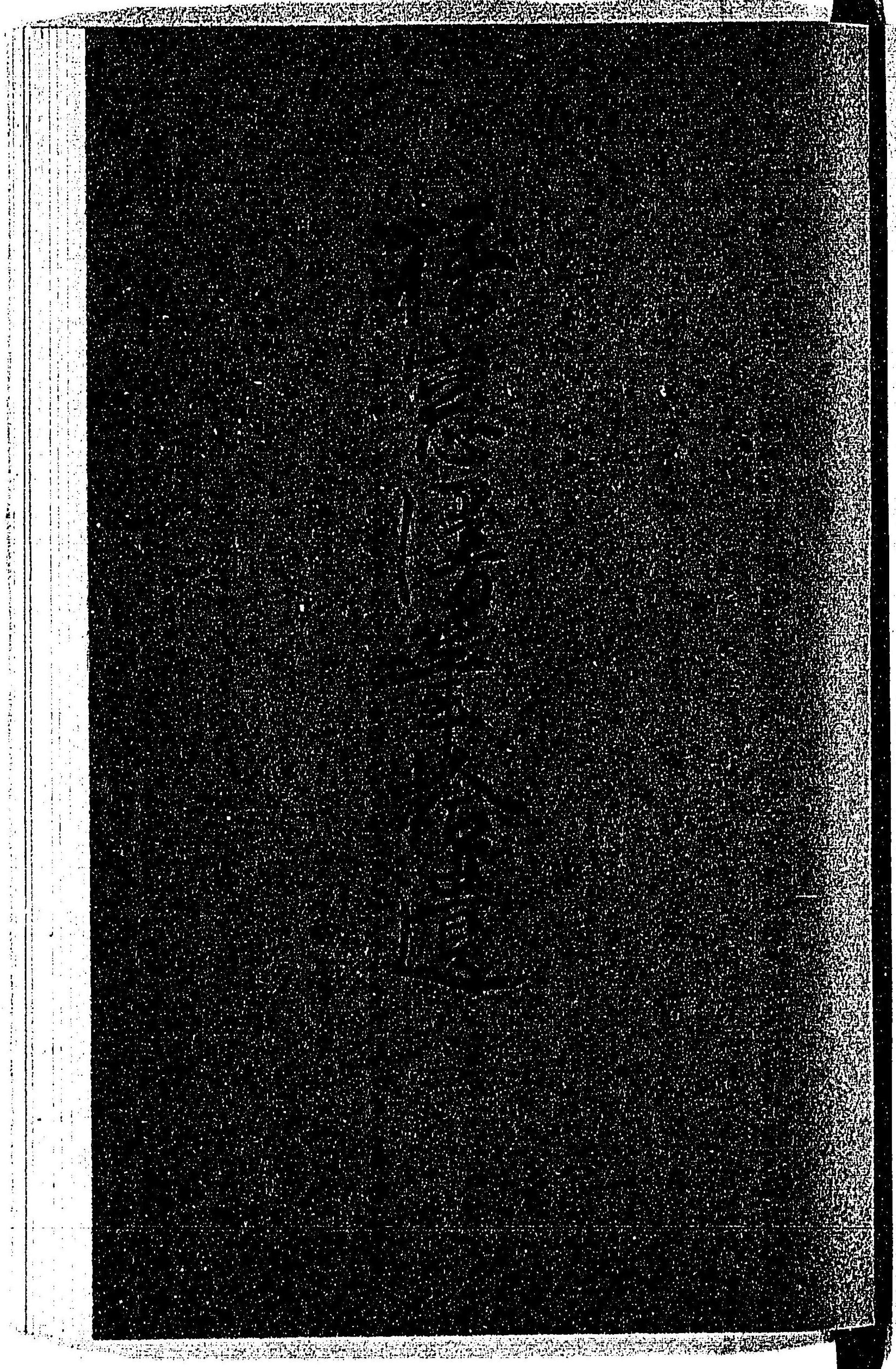
むかし一時軒のさかんなりしは。今に倍せり。抑此居士。吉備の國より出でゝ。高麗橋邊に卜居し。向榮庵も遠からねば。

いかのぼりかみはあがらせ玉ひけり

とうたへしに

うめの花とんで着らぬはてらかな

贈答の風流をかゞやかして。俳蒙求。海士兒洲砂美など。人の心を動しけり。さて此一帖は。其あひだの筆をさびましていづれの道にまなび入らむ輩にもあれ。ひとわたりは見るべく。暗に記臆せんには。不巧の費はあるまじとおぼゆる雜記なるをや。木に上せ。公になす。秋玉堂のこゝろざしは。よきゝぬ着たらんにはあらしかし



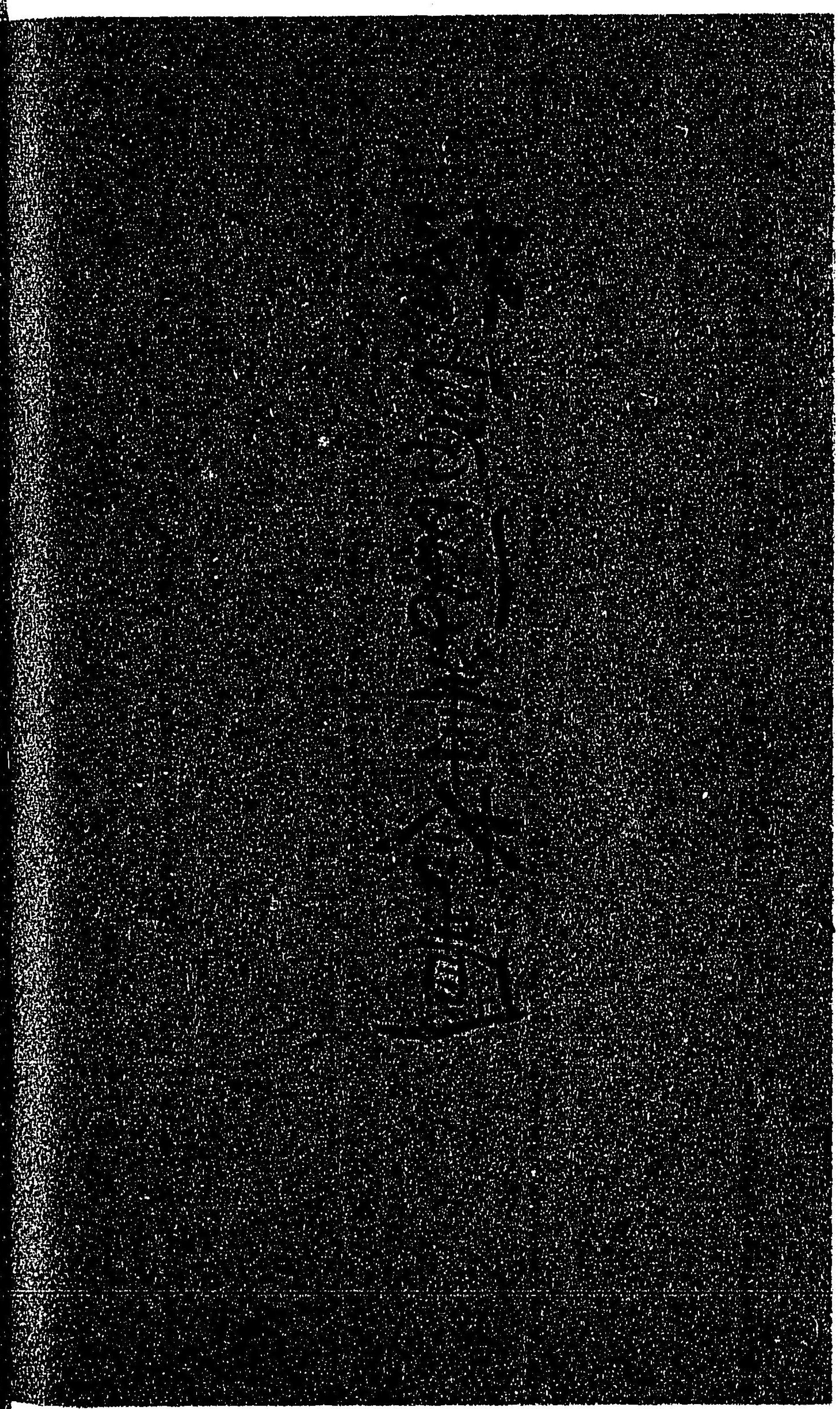
晉臥鵬敘

梧窓漫筆拾遺

晋卧鵬叙

○大田錦城小傳

名ハ元貞字ハ公幹俗稱才佐錦城ハ其號なり七世の祖崇山監物豊臣大閤ニ事へ祿一萬二千石を食み諸侯ニ列せられたりき監物千利休ニ師事して茶道の奥秘を窮めぬ所謂茶博士七雄の一なり監物の孫を宥庵と曰ひ醫となりて京師ニ居りき二子あり各自族をわかち長ハ能勢氏次ハ大田氏みな加賀ニ仕へたり父名ハ玄覺東岩先生と稱せり出でゝ外家を繼ぎ樫田を氏としたり讀書強記ニして陰陽本草の說ニ精しく施與を好み陰德を行へり子八人あり錦城ハ其の季なり明和二年三月朔日大聖寺上福田町ニ生れぬ資性穎異五歳ニして士土の義を曉れり家長皆謂ふむかし陸象山嬰孩ニして宇宙の字を知れりといへりこの兒殆象山の儔なり後必大儒とならんと十一ニして詩を賦し文を屬し十三ニして經史を講說せり鄉里甚之を異とし神童と號せり然るニ不幸ニしてやゝやく茶寥ニ丁り伯兄北岸ニ敎養せらる因りて家學を切劘し頗成立をる所あり然れども方技の士たるを甘ぜず一旦奮然として感激し遂ニ四方の志あり是の時京都ニ皆川淇園あり江戸ニ山本北山あり共ニ一時の大儒と稱せり錦城乃京都ニ遊び淇園ニ事へて益を請へり其の意ニ滿たず乃東江戸ニ行き北山ニ從ひて疑を質す亦其の意ニ



淵たず是ニ於て慨然として之を古人ニ求めんと欲し勵精刻苦して學大ニ進みぬ天明中歉歳相續ぎ道殣相望む此時ニ當りて錦城久しく羽生の生覺院ニ寄食し拮据多年つぶさニ艱険を嘗め世態人情悉知せざることなかりき後再江戸ニ来りて幕府の侍醫多紀桂山の宅ニ寓せり桂山博學洽聞ニして名關東ニ震ひまたよく客を愛し士ニ下れり故ニ一時知名の士多く之ニ從遊せり中ニも錦城の才學を嘉し子弟ニ命じて業を受けしむ毎ニ人ニ語りて曰ハく才佐ハ真の才士なり今世縫掖中の第一なりと此ニ由りて名を知られぬ水戸文公其の奇材なるを聞き之を辟さんと欲を沮むものありて果さず是ニ於て帷を兩國元矢倉街ニ下して以て生徒を教授し聞達を諸侯ニ求めず陋巷ニ窮居して將ニ身を終へんとせり閣老吉田侯幣を重くして之を招き世子の爲ニ經書を講說せしめき禮遇極めて優渥世子の位を嗣ぐや扈從して本藩ニ至りぬをりしも沈痾發して暇を乞ひ再京都ニ遊びぬ搢紳學士其の論說を聽きて悉其の精識ニ驚服せざるハなかりき日野相公尤之を景慕し師賓を以て遇せり既ニして再江戸ニ歸りぬ齒既ニ五十ニ踰えたり是の時加賀金龍公錦城が北藩の產ニして竟外の賓師と爲れるを惜みまむ〳〵使を吉田邸ニ造りて之を請ふ吉田侯きかずすなはち其の食俸を倍し禮遇愈渥し然れども加賀侯なほ請うて止まず吉田侯其の大藩の請なるを以て之を峻拒すると能はずして錦城ニ命じぬ因りて起ちて其の聘ニ應ぜり加賀侯祿三百石を授け上士ニ班して煩はすニ職事を以てせず高田富山六鄕七日市の四侯も亦錦城の名を聞き賓禮を以て之を待し與ふるニ數人廩を以てせり錦城博學ニして百家の書ニ通じ尤經術ニ長じ詩書易春秋沈潛反覆し參互錯綜して攷證の妙多く先賢のいまだ發せざる所を明らかニせり四子の書ニ於て終始を相爲す所以のものハ最深く思を致せり上ハ先秦の古文より下ハ後世の雜書ニ至るまで苟經義ニ關するあれバ旁引曲暢して其の同異を審ニし其の是非を辨せざるハなし其の漢唐宋明および近時の清人と我が國朝の諸儒の說と會萃演繹し必至當ニ歸してのちニ止めぬ老釋の言占相の書の如きニ至るまで亦皆粗その歸趣を究め凡宇宙三千年の治亂成敗のごときハ歷々として之を掌ニ指すが如し而して其の皇朝ニ於ける特ニ應仁天正以来の傳記英雄割據の迹ニ熟し其の土疆の廣狹大小兵賦の多少强弱および將士の姓名譜牒皆能く娓々として之を言ふ其の當時の郡國の利病ニ於ける亦竊ニ其の故を究め反覆辨論鑿々として已まず然れどもひとり其の時世の得失ニ至りてハ敢て妄議せず曰ハく治亂の原ハ人主の耆と慾とニ在

るのみと其の世を憂へ後を慮る識今に至りて明驗あり眞に天下の事理に通じ治忽の術に達せる者に非ざれば孰か能く此に與からん又かつて武を講じ兵を練るを論じて曰はく敵を威す利器は固より弓銃に在り然れども士卒の勇を養ふは刀槍に如くはなし或は專長兵を恃みて短を用ふるを知らざる者はその俗必弱しと識者皆知言と爲せり錦城人と爲り清癯骨立にして殆その衣に勝へず而して音聲鐘の如く雄辨懸河の如しその書を講じ古を談ずる近く譬喩を取り聽く者をして躍々として興起し身その時に當りて親しくその事を目擊するが如くならしむ故にその徒を撮め經を授くるや門外常に市を成し擔夫漁丁に至るまで耳を傾けて離聽せざるなく皆殆倦むことを忘れたりとぞ錦城の人と交るや雅俗を擇ばず文人墨客醫家本草家歷學算數家より劍工俠客僧徒祠官隷農商賈の輩に至るまで苟一言の善一行の微一技の取るべき者あれば皆これと相親み以て其の離心を結べり又財を輕じ施を好み務めて鰥寡を惠䘏したり故にその死する日紼を助け執るもの千餘人比隣知ると知らざると皆涕を垂れざるはなかりきといふまたその忠愛の誠よく人を感ぜしめたり文政八年四月二十三日病みて歿せり年六十一配武田氏六男一女を生めり長德厚嗣ぎて加賀に仕へ劍擊を以て稱せられ三子敬吉田に仕へ才學を以て聞えたりき

梧窓漫筆拾遺

太田錦城著

孫　修文翼武筆錄

○清和天皇の御子孫。三度天下を領し給へり。頼朝。尊氏。東照神君なり。其故知り難し。八幡殿の貞任。宗任。武衛。家衡二度の亂逆を勘定し給ふ。豊功の餘慶にもやと。少かりし時には思ひしが。後。光圀卿の大日本史を三過まで讀みし故。其說を得たり。清和天皇は染殿后の御子にて。忠仁公良房の外孫なり。外戚の勢にて。兄の惟喬皇子を踰えて踐祚ましませり。後に此事を深く悔い給ひしにや。御一生の行狀。苦行の僧に似たり。天下を有つの身にして。苦行の僧に似給へること。是又制欲克己の大德なり。されど御子孫相續して。帝位を踐み給はゞ。夫にて漸々に御福德も磨くべけれども。御子陽成院發狂し給ふ故。昭宣公基經廢之。小松院（光孝天皇）を立て給ひしより。文德。清和の御血脈は斷絶せり。看よ看よ。草木は窮陰沍寒の時。其氣根柢に潛伏して。春夏の華葉を煥發す。清和潛伏の御德。御子孫にて榮發せざること不能。故に其積累の陰功。武家の榮華を發せるは。天地

自然の理なり。吾此事を常に兒雄啓輩に告げ語る。近頃。水戸の藤田子定来り問ふに此事を以ても。答ふる處。予が見と毫黍をたがへず。子定且つ言ふ。此御時代より。攝政關白の職起りて。祿去王室時ハ。此亦御子孫の天下を領し給ふべき基本なりと云へり。此亦知言なり。關白ハ昭宣公に始まれり

○信玄の歌に。「立ちならぶ甲斐こそなけれ櫻花。松に千歳の色ハならハで」是天正十年に。甲。信。駿の三ケ國。松平家の御手に入るべき讖なり。然るに。信玄の口より甲斐なしと云ひ。立ちならぶ松の千歳と祝せり。神妙不可思議の事なり。是武田が。亡國の妖孼にて。德川家にハ無雙の奇瑞なり

○帝王御相傳の觀音經の二句と。東照神君の薨御ましします時。大猷院殿へ天下の治ハ慈悲なりと被仰たるも。堯舜禹の相傳に。四海困窮せば。天祿永終と。是あるも。唯是一同にて仁の事なり

○紀州南龍院殿 賴宣卿 の明暦の火災の後。今の麴街五町目の御邸を御造營の時。世人の御賑にとて。土石材木を運ぶ者ハ。老幼男女の差別なく。一度運べば。一日の賃錢を賜ひ。一日に二度三度運ぶ者にハ。二度三度の賃錢を賜ふ。汗を流して勞をる程に。働くに及ばせと命じ給ふ。尤御造營の初より。諸色ハ商賈の望に任せ。價を賜ひしと云ふ。御造營出來の後。四方二十町餘の町人共。珠數を按み掌を合せて。此御邸を伏し拜むと云ふことを。安藤帶刀の申し上げたる時。看よ。此の屋敷ハ燒失をましと仰せられたるに。元文の今迄。百有餘年煙かゝりたる事もなしと。事跡合考 元文年間の作あり と云ふ書に記載せり。誠に難有御事なり。先年南龍院殿の御行狀を讀みしに。此事ハ記載せざる樣に覺えたり。如何なることにて漏らせるにか。仁惠の御德の天地神人に感應せるにや。元文までにハ非ず。文化十年癸酉の今日迄。祝融回祿の祟を免れ給ふこと。必然の理とハ申しながら。又不可思議の御事なり。寛政二年七月麻布の笄橋より出火して。小石川迄延燒せり。麴町ハ不殘類燒をれども。此御邸にハ恙なし。加藤清正造營せられたるといふ。井伊の口邊の邸も此時燒失せり 又其寅年正月麴町五町目の横町より出火して。芝の海邊迄延燒せり。されど此御邸ハ。風上にて恙なし。文化八年辛未二月。市ケ谷四ツ谷赤阪一面に祝融の祟をなせど。此の御邸にハ恙なし。是れハ予が眼前に見て知る所なり。仁德天地に感通すること。此御邸より著明なることはなし。予が少かゝりし時。亡友吉田恒藏 漢官學生 江戸侯邸に。此御邸より古きハなし。行きて看るべしと云へるによりて。行きて拜見せしこと有り。其後事跡合考を讀みて。此事

を知れる後は。此御邸は。吾儕愚陋のものには明師範なりと思ふ故に。一年に一度は。御門前迄行きて拜し奉るなり

○南龍院殿の御行狀を讀むに。極めて東照神君に似給へり。其御孫は。天下をしろしめして。有徳院殿なり東照神君の御子孫も。此一脉。最も御繁衍なり。天道の照明なること如此東照神君も。儉素なる御性質にて。有徳院殿も。亦御性質儉素也。聿修其徳儀刑文王と云ふは。有徳院殿の御事なり。さるが故に。東照宮の血脉と。有徳院殿の御血脉のみ御繁昌なり。此にて天道の與する處を悟るべし。老人雜話に。蒲生氏郷が東照神君をしはしと云ふ言を載せたり。是は太閤の驕奢を見習ひたる故に。誤りて批判せるものなり。氏郷も一代の英雄なれども。書を讀み道を知りたる人に非る故に。眼前の神龍を見て誤れり

○武家の創業の人有徳君子と云ふべきは。唯泰時と。東照神君に止まれり

○近く常憲院殿の御時代。上奢侈を好まれ給ひ。下は繁華なれども。大地震。又は富士山焼とて。天地の妖變多し。浚明院殿の御時代も。誰が奢侈を好みしか。世間一統奢侈繁華なりしが。淺間山焼け。大火洪水。大飢饉の變相繼きて起れり。是にて陽氣繁華の亂徴を悟るべし。有徳院殿と。御當代初は儉素を宗となされたる故。世の中物靜にて。寂寥なる様なれども天地の氣和して。五穀年々に豊穰せり。是にて陰氣治興の象を悟るべし

○さて予も丙丁の災厄は。親しく目撃せり。天明五年丙午正月元日日食皆既に。正月廿日より江戸并近在迄。火災日々にて數十百度に及べり。城中の人荷擔して立つと。柳宗元が云へる勢なり。二月中旬。雨ありて忽に止みたり。（前年十月八日より雨ふらず）六月土用中冷氣扶綿たり。七月中旬大雨連日。關八州大洪水。五穀皆腐れぬ。八月より御病氣にて。九月八日浚明院殿甍御なり。執政田沼主殿頭罷ありて。相を免ぜらる。諸州不熟にて。米價騰躍し。丙午冬より。丁未の春夏の交に至りては。三斗五升俵金二百兩。百錢に二合五勺なり。是に於て五月廿一日の夜。飢民蜂起して。米商の家を打ち破る。此を打こはし騷動と云ふ。三都會同日に蜂起を。丙午の春より丁未の秋まで。民心洶々誠に畏るべき勢なり

○丙午丁未の厄歳を知るは。學問の效なれども。夫れを防ぐ術を知らざる時は。學文も又功なしと云ふべし。平常の歳と思ひて。漫然として省せざるときは。災厄免れがたし。さればとて。神社佛閣などに祈禱するのみにては愚なることなり。儉素を宗とし。身行を正し。大仁政を發し。刑罰を省き。税斂を薄し。或は非常の大赦を行ひて。死罪を宥め。或

は服濟の法を行ひて。困窮を憐み。賢者を進用し。不肖者を退け。良民を賞し。惡民を戒め。此等の條々を行ひて。天意を挽回せば。如何なる厄歳も。其祟あるまじきことなり

○徳川家天下をしろしめしたるに。天下久安長治なるに。三箇の大事と云ふことあり。「第一には。諸侯の妻子を人質として。江戸に指し置るゝ故。諸侯も妻子を棄て紋にして。叛逆を企る人はなき情理なり。且つ妻子江戸にある故に。何も參府を喜ばる。故に一不朝二不朝三不朝の患なし。「第二には祿ある人には權なし。權ある人には祿なし。足利時代等三管領と云へる執權の。斯波。細川。畠山皆數ケ國を領したり。祿厚くして。權重し。故に權を爭ひて相下らず。山名の一族は。十一ケ國を領せる故。六十六州の十分一なりとて。十分一殿と唱へたり。明徳に氏清の叛逆にて。山名の一族。大半は亡びたれど。持豐入道宗全（宮内少輔時熙子。伊豫守時熙孫。時氏には曾孫なり）赤松滿祐を誅してより。又其勢強大になり。細川勝元と舅甥の親みにて。權を爭ひて應仁の大亂は起れり。豐臣大閤の時も。五大老と稱して。天下の權を秉り給へるは。江戸内府は關左八州を領し給ふ。加賀大納言は加能越の三州を領し。毛利は中國の七八州を領し。浮田は備作の二州。上杉は會津仙道の諸郡。出羽酒田（二十萬石なり）百五十萬を領す。故に遂には關原爭亂も起れり。御當家天下をしろしめしてよりは。加賀薩摩大祿の諸侯は。天下の政を執らず。權ある人は。三萬石にて勤めらるゝ故に祿なし。是を祿ある人權なく。權ある人祿なしと云ふ。内外相制して亂れぬべき繫なし。故に大猷院殿の時に。酒井空印公に。百萬石を賜はらんとありければ。左樣にては天下は亂ると被仰上と聞き傳ふ。此一つには。世間の妬妻より亂を生ずべきと云ふ理と。二つには。此理を辨へられたるなるべし。「第三には武士の勢を殺ぎて鉢植武士となし給へり。是れは其初は知れざれども。諸國の武士。東鑑に出でたる云々。（此條は評に漫筆前編に見えたり。故に略す）さて此三ケ條にて。天下は太平なれとも。其實は三ケ條とも。新に建立まし〱しど云ふにも非ず。自然にかくなりしこと。却て天の自然を得て。久安長治なることは法の然るに非ずして。東照宮の神德の廣大よりして。かくもなり行きたるものなり

武士は。城下にありてだに僻事多きに。土著して在々に是あらば。いかなる事をかなさん。果は兵を起して。打ち給ふ樣のこと。眼前に起るべし。畏るべきことなり

○桃源遺事を讀たるに。西山公の御一生。黄色なる紬の夜著。蒲團。一つのみにて。床の上げ下じも。御自身に被遊たる故に。御近邊に召し仕はるゝ人も。健にとは認めざりしとあり。其御勤儉の德。可仰可尊御事なり。近頃。藤田與助の言を聞きしに。賴房の中納言。

光圀の中納言御二代の火事羽織今に存在するにうんさいなり。今は水戸の御足軽ならでは。うんさいの火事装束不用と云ふ。治亂の形眼前に現出す。畏るべきことなり

○有徳院殿も。紀州に潜藩の御時。日光御社參御供に。上下一統御綿服なりと云ふこと。鳩巣小説に見えたり。大屋遠江守が噺なりとて承り傳へし。大宗御世を嗣がせたまひて。夏などは葛ひらの御袴を召し給へり。先々鳥井丹州の年久しく衰老まで。勤仕せりと云ふ御褒美に。上より賜はりし御刀は。有徳院殿の御指料にて。鐵拵へなりと。其家老の高須源兵衛予に語れり。御儉徳の高き難有御事なり

○新太郎少將の御行狀を讀みたるに。是にも蚊幬のつり糸には。御一生御自身捻り給へる觀世よりを御用ひなされたるに。御子の代には。真紅の太綱となれるを御覽ぜられて。夫にて諸勘定の書付讀むに及はぬと被仰たることと見えたり。尚書に。于其子孫不率。皇天降災とあり。可畏可畏。大雅に亡念爾祖。聿修其徳。又云。上天載無聲無臭。儀刑文王萬邦作孚とは。文王は他に非ず。東照神君と有徳院殿の御事なり

○天理は日々に暗くして。人欲横流す。今日人欲の横流は。堯の洪水よりも甚し。其本源を尋ぬれば。承平久しくして。民生偷惰に。奢侈風をなし。競ひて華靡に是走る。是れ故に財乏うして困窮なり。困窮するが故に。利欲熾盛なり。欲盛なるが故に。人を欺き謀りても利を得んことを欲し。人を竊み奪ひても。財を得んことを願ひ。人を殺すをも憚からず。親子。兄弟の間も相保つことを得ず。天下の人。大抵虎狼の如し。されども上の綱紀は森然として張り給ふ故。巨寇大賊兵亂の憂なし。然し此まゝならんには。永久の治覺束なし。神祖。徳宗御兩代の古に復して。儉樸を以て。下を率ゐ。務めて奢侈華麗を嚴禁せられば。人欲の横流少しくは水落ち石出てゝ。天下亦久安長治ならん

○山下廣内は。有徳院殿へ上書せしに。當時不諱の朝寬弘の徳あらせ給ふ故。為御褒美白銀を頂戴し。諸大名にも一通を寫し置くべしと被仰と承る。鄉里にある日。此を讀みて。其說を知れり

○東照宮の承兌長老。崇傳長老。足利の三藥などを御用ひなされたるも。實は儒者の用に召し仕はれたるものなり。後の世の政を爲るものは。此僧に笑はれざる樣に。心得べきことなり

○本朝通鑑にて知りたるや。池田の祖教正と云へるは。實は楠正行の遺腹の子にて。正行打死の後其後室の懷妊せるを。池田へかへせるが。池田へ再嫁して。生みし子なり

と云ふ。正成の子孫と云ふものは振はず。唯此傳は繁榮せるを見れば。正成。正行の子孫たること必定にや。正成の忠勇剛直。節義正大の氣の子孫なくして可ならんや。子孫榮昌ならずして可ならんや。新太郎少將と云へる大賢人を生ぜしを見れば。傳はるところの說。其實を得たる必定なるべし

○只今聞けるに。近頃は書畫詩人。世に所謂きほひものに擬して。會集の度に。打合罵詈を平常の事となす。學者此に至る。文運の厄にや

○大賢八九分の地位。惡賢とも云ふべきは。千百載の間。唯。東照神君御一人なり

○竹垣三右衞門と云へる御代官の手代。宇佐美律右衞門語れり。三右衞門の仕法を以て。十年に一萬二千兩を拜借して。其管内の下野常陸の廢田を開き。又洗兒(コマビキ)の止みしに。千人小兒を養育せり。さて十年過ぎたる故。又十箇年一萬二千兩を拜借せりと云ふ。此等の事は。外御代官にも多くあるべし。如此の御陰德。御仁政多き故。御世繁榮にて久安長治なる事。豈天命の偶然ならんや

○早川八郎左衞門と云へる御代官も。備中美作を支配せし時。管内の洗兒を止めたり。是れも。善政多き人にて。關東御代官に遷りし時。管内の百姓途中まで出で。駕籠を攀援して。進むことを不得。此等の事は。歷史の循吏傳に入るとも恥かしからず。されども記載もなき國故。多く世に知る人なし。早川の事は。予が其墓表を撰せし故。詳に知りたり。美作も備中も。學校を建立し。關東へ遷りし後。久喜に學校を建つ。感賞すべき人なり

○有德院殿の享保二年に豐穰して。米價卑く。士農迷惑せりと昔がたりを聞きたるに。又御當代。寬政。享和にも。多分年々豐穰なりしに。文化元年甲子より。當十年癸酉までは。年々豐登せり。往古より世は饑饉兵亂とて。饑饉は亂亡の先徵なり。然るに。如此年々豐登なるは。白河の少將より以來。御政務の正しきことの。天地に感應せるにや。難有御事なり。されども人は厭き足ることを知らざるものにて。何か彼此申すものあれど。天意の與せる處を見て。人事の善を見るに足れり。然し善は消し易く。惡は長じ易し。其任に當る人は。兢々業々戒め愼まずんばあるべからず

○東照神君は。御妾も多けれども。阿茶の局(忠輝卿の母なり)の事。細微の御失德にもやと存ずる計にて。御一生上淫など云ふことはなし。如此の御德は。漢祖。唐宗などの企て及ぶ處に非ず。古の聖人を除きて。誰か御德に比並するものあらん

○東照宮御一生の御武功の中にハ。長湫にて秀吉の先手を打ち破り。池田父子森武藏を打ち取り給ひたること。義戰にて。御武德の第一なり

○室新助が鳩巢小說を讀みたるに。今に至るまで。天下泰平なる事ハ。祖宗の御德と。伊豆守殿の功によるものなれバ。社稷の臣と云ふべき歟とあり。伊豆守とハ。吾國の大祖松林院殿(信綱公)の事なり。「如此良弼賢輔の出づることハ。實に神君の御德なり。さて新助が此言。實に知言と云ふべし。大功の餘慶にや。子孫繁衍し給ふこと。世々先職を繼ぎ給ふ人の出づること。由なくして「如此ならんや。當時肩を比べて。名臣と稱せられたる人も。今ハ家名存すれども。子孫血脈斷絕せるものあれバ。吾國の大祖の功德ハ。別に天地の神祇に感通せることもあるにや

○幾度か思ひ定めて替るらん。賴みがたきハ心なりけり」深艸元政上人の歌なり

○天正十年三月。甲州滅亡の時。織田右大臣殿。東照神君と兩大將床机にかゝり給ふ所へ。武田四郎(勝賴)の驗首を持ち來り。實驗に備へけるとき。右大臣殿ハ。床机にかゝりながら。眼を怒らし。聲を暴げ。汝の親の信玄が。一生無道を働きし。其業報なりハてを見よとて。足にて蹴られしと云ふ。神君ハ敵ながらも。大將の首なり。武田ハ二十四代甲斐の國を領する名家。新羅源氏の嫡流なり。信玄無道なれども。一代の弓矢取なり。夫等のことを心に思召し給ひしにや。床机を降りて。敬肅し給ひ。さて右府へ仰せられたるハ。四郎ハ若輩者ゆゑ。思慮薄く。無理なる弓矢を取り。かく成り果てたると。不愍の次第なりと。御挨拶有りしとかや。此事を見もし。聞きもしたる甲陽の武田の士。德に傾きなびきしとかや。其歲の六月二日。右府ハ惟任日向守(光秀)が爲に。本能寺にて生害し給ひ。多年の功業徒にし。此歲天正十年に。駿河ハ勿論なり。甲信二國。皆御領國とハなりたり。さて慶長五年九月十五日。關ヶ原の逆徒退治の後。石田(三成)生捕となりて。大津の濱に引きすゑたり。御先陣の福島(正則)其所へ行かゝり。馬上より高聲に三成を罵りて。いらざる事を仕出だして其樣を見ろやと云へり。三成も汝等を「如是にせざることハ。返す返すも遺恨なりと申したり。其次に黑田(長政)細川(忠興)行きかゝりけるが此體を見るより。早く馬よりとび下り。さてさて傷ましき御事也。古より名將と稱せられし方々も。「如是ことも少なからぬぞ。されバ御恥辱にハ候ハぬぞ。さぞ寒氣に堪へがたかるべしとて。着たる陣羽織を脫ぎて。三成に打ち着せて。通られけりとなり。然るに。正則ハ關ヶ原の先手の功に誇り。伊奈圖書に腹切らせ。安藝備後二ヶ國を拜領してより。殘暴肆虐にして。台德院殿御

代に。二ケ國御改易。川中島に流罪せられて。一生蟄居の身となれり。長政。忠興は大國を領して。福禄を子孫に綿延ず。されば吉凶禍福の來ること。人の各招く所にして。其機甚だ微なり。一念の動く所。此に少の言にて。其善惡の異なる 吉凶禍福の別を生ぜり。中庸の動於四體と云へる處にして。左傳。國語の禍福を識せることを。世人の疑を生ずるは。至當の理を知らざる愚昧の至なり。此二條を見ても。古人の言の僞ならざるを悟るべし。さて神君にもせよ。長政にせよ。忠興にもせよ。我殺さん。我滅さんと計る敵に對しても。怒りの發を抑へ。誇る心を抑へ給へること。天錫の德聖言抑威の字を得給へるなり。難有御事なり此一念天の與する所なり。人の服する所なり。知らずんばあるべからず。服膺せずんばあるべからず

○大津にて。神君の。三成を御覽の時。治部少輔不運なりと仰せらる。三成は此上の御恩には。疾々首を召されよと申したりと承る。信長。秀吉公二君などの企つべき御德量には非るなり

○神君の黃金百兩を人に賜ひて。其上は。包みの奉上の紙を御近邊の人に。善き紙なり。用に立つべし。仕舞おけと仰せられたると。黑田長政の御旗本へ。白銀二百枚を借したるに。程を歷て。其人の返濟せんとて。持參せしを。初め借し申したる時。兼ねて進上すべしと思ひたりとて。受け取らず。さて今朝吉鬣魚を貰ひたり。まゐらすべしとて。料理人を召して。吉鬣魚の身所を鹽にして貯ふべし。中打あらを潮煮にして。客に饗すべしと申されたり。百兩の金二百枚の白銀を以て。人を惠むことを吝惜せずして。一枚の紙。吉鬣魚の身所を無用には費し給はず。國天下を與す人は。天得の性に各別あり。聖人の論も如是なるべし

○吾が知る所の人の云ひし。邊鄙の村里の里長邑正など。各別の才畧も無けれども。能く治まり。江戸などの大都會は。豪傑の方々治め給へども。能く治め。よき人情風俗と云ふは。我邦の漢土にまされることとなる可きなり

漢土は大國ゆゑ。大河の魚の大なるに同じく。我邦は小國故。小川の魚の小なるに同くして。漢土は善人も格別に。大善人ある故に。惡人も唐の則天のごとき。無類の大惡人を生ず。我邦には大善人もなき故に。大惡人も生ぜず。これも治めよき一つなり。さて又海外の孤島にて。外夷に接屬せず。是れをさめよき第一義なり。治めよき國と云ふは。道の行れやすき國にて。漢土にまされる國と云ふべし。去れども如何なる

治めよき國ニても。上たる人徳義を失ひて。政治あしきときハ。保元。平治より慶長。元和まで。四百年の干戈爭亂ニも至れバ。人情風俗を憑みとなさずして。政治を能くすべきことなり

○學者ハ漢土のみよき國と覺えて。今の世の御政治までも。さみする心あり。笑ふべきなり。文盲者ハせん方なし。書を讀む人ニて。如是ハ何事ぞや。堯舜三代の聖人ハ。申すも畏れあり。是れハ格別のことなり。其餘。漢。唐。宋。明の世ニ。今の世の如く治まりたることハ無きことなり。漢の宣帝ハ。一代の英主ニて。魏相。丙吉又一代の賢宰相なり。此時代ニハ。黄霸如きの循良の吏も出でたり。漢。唐。宋。明四代の間ニて。此時などを盛世となせり。去れども。魏相の言ニ。當一年の内ニ。天下中ニて子弟殺父兄。妻殺夫せる者。二百二十二人と云へり。是ニて今の世の御政治ニ遠く及ばざることを知るべし。今の世ニて主親を害するもの。間々此れありて。此れハ御政治の行き屆かざる處ニて。上の御恥辱とハ申すべし。けれども。五年ニ三人。十年ニ三人の事なり。一年ニ二百人など云ふことハ。褒賞を賜ハりたるとも有るまじきことなり。此の一事ニても。今の世の御政治の。遠く漢。唐。宋。明ニまさることを悟るべし。漢。唐。宋。明四代創業の主。何れも我東照

神君の御徳ニハ企て及びがたく。四代の政治。又我今日の政事ニ企て及びがたし。眼を開き史傳を讀みて。是等のことをも悟るべし。されども少しの心得違ニて。治平も亂敗ニ及ぶ者なれバ。政治を掌る人ハ。泰平の功ニ誇る心あるべからず。周易の危者保其安者也。亡者保其存者也。治安の時。亂亡を忘るべからざること。聖言の大戒なり

○信長。秀吉ハ論ずるニ足らず。さて勿體なきことなれども。我が東照神君の大徳大福。古の聖人ニも劣り玉ハざれとも。御夫人と申せバ。淫妬無道の築山殿ニて。御嫡子ハ御生害なり。御晩年上總介忠輝君ハ。一生配流の身となり給ふ。大罪を犯し給ふ。是ニて御福分十分ならざるを悟るべし

○聖人ハさすの神子なり。世ニ侈侈なる者。鄙吝ならざるハなし。驕且吝と仰せられたるハ。此事なり。節儉ハ。吝嗇ニハ非ざるなり。世人ハ此を傾城買ハ辣味噌汁と云ひ傳へたり。世ニ言ひ傳ふることハ。多く妙理あり。此も其一なり。東照神君ハ。御幼少より。御一生讐をも恩ニて報ぜんと御心掛被成たりと。晩年御近邊の人ニ。御物語ありしと承り傳ふ。是ハ論語とハ違へど。禮記ニ。以徳報怨。寛身之仁也と云ふニ符合して。雖有寛大の御心なり。又此頃ハ。戰爭の忙しき世なれバ。武士も打ち死ニして。其子幼少なれバ。

家祿をば嗣せずして別に勇士を召し抱ゆること。一統の風俗なりしに。三河にては。打死の幼孤は。當歳子にても。家祿を其まゝ賜はりたりと傳へ聞きて。天下は最早家康に取らるべしと。高坂彈正の言ひたりと承り傳ふ。行ふ人は神君なり。褒むる者は高坂なり。神君の御仁惠。高坂の明智。孰れも感賞すべし。さて是は文王の仁政。仕者世祿と云ふに符合して。此御時代には。難有仁惠の御政なり。寬仁の御德にて。天下泰平。御子孫の繁榮を基し給ふ。難有御事共なり

○臣の君を奉じ。子の父を敬するは治なり。亂とは臣の君を弑し。子の父を害するなり。故に足利の世にては。下剋上の世と云へり。一體は治世の時。上樂逸に誇りて。下の艱難苦勞を憐まずして。聚斂刻剝の政を成したる。上剋下憤怨の心。天地の和氣を破り。終には飢饉兵亂となるものなり。上剋下の變じて下剋上となるは。大暑の歲の大寒となるに同じ。小雅に。高岸爲谷。深谷爲陵とは。亂世の樣を能々知りたる者なり。故に是迄の王侯貴人は。滅びて左傳に云へる。三后之姓於今爲庶と云へるに同じく。故もなき卑賤のもの。天下を領し。國を有つに至るなり。いかなる匹夫下賤の。天下を紛亂すまじきにも非ず。又天下を掌握すまじきにも非ず。漢土は常の事なり。我邦にては。先づ如是ことは少なかりしに。豊臣太閤にて。此後は計りがたきことを知るべし。故に治世にては兵を用ふることを深く忌み畏るべし。又兵亂のおこらざる樣に。政を執ることこれ第一のことなり

○越前は斯波の領國にて。朝倉は斯波の家差なり。越前にて增澤甲斐守など云へるもの。共に爭亂を起せるを。朝倉此を誅せし故。文明三年か五年に。義政將軍より越前國を朝倉に賜はりしを。林道春の將軍家譜には。增澤を誤りて。甲斐某と云へるものとす。此時代の事を記せるもの。大抵は誤謬多し。是は考證の學を假らざることを得ざるなり

○東照宮の御言に。諸侯の爭より興りたる兵亂は。久しからずして止むものなり。世間の困窮より起りたる兵亂は。止まざるものなりと仰せらる。其神妙即聖語と同じ。堯舜も。四海困窮して。天祿永終と仰せられたるに非ずや。さて應仁記に。應仁の大亂は。起るべきこと八ケ條あれども。其八ケ條よりは。其大本は義政の華靡なる事を好まれて。七度の晴と云ふ事を致されたるにて。天下の諸侯士民まで。困窮してゝ。人々亂を希ふ心より。此の大亂を生じたりと記せり。奢侈華靡より困窮を生じ。困窮より變亂するは。千古一轍の事なり。されば國天下を有つものは。華靡は國天下を亂す大寇讎なりと云ふ

ことを念々に忘れずして。上下の華靡に流るゝことを嚴制して。困窮の源を防ぐべし。諸侯の忿爭は。和解をするものなり。久しければ怒りの心も自然に和ぐものなりと。仰せられたり

○近頃の加賀宰相は。在國の日。坐臥共に江戸の方を後ろにし。足にし給はず。將軍の御方なりとて。畏れ敬ひ給へりと承り傳ふ。誠に難有御事なり。吾所知の醫生の。畿内に老母あるもの。日に目通りに出づるに。毎例其者に逢ひ給へるには。其名を呼びで。上方にある老母は無恙やと問ひ給へり。是も亦難有御事なり。如此の律義なる御方故に。種々の難にも逢ひ給へども。武運全くして。長壽にて參議までに上進し給へり。感賞すべきことなり

○龜田鵬齋の語りし。備前儒士井上嘉膳は。婦女を惡みて一生不犯なり。婦に逢ふにも。一間を隔てゝ尊敬せり。是れは非常の行なれども。世人好色の戒ともなるべし。婦女を惡みけるは。後梁の先主蕭登に似たり。一生不犯なるは。唐の陽城の兄弟に同じ。さて此の嘉膳。初めて其君備前の太守に謁する時。佛を拜するには。南無阿彌陀佛と唱ふることなるに。何ぞ唱へ言なくては不叶と思ひて。口の内にて馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿と唱へたりと。鵬齋は面白きことなりと思ひて吾に語れり。是は以の外のことなり。嘉膳の井上金峨に物語せるを。鵬齋は金峨の門人故に。聞き傳へたるなり。己れが主人に。初めて拜謁するに。心内に愚昧の馬鹿なりと唱ふる。無道不敬。天地の戮民と云ふべし。是れは全く嘉膳の罪には非ず。物茂卿が聖人の道に不案内。唯客氣を以て門生へ教へ。豪傑氣象。英雄氣象など云ふ風俗故。世人を足下に見くだすこと。學者の常態と覺えたり。故に嘉膳如き美質の人までも。不思如此の不敬無道をなすに至れり。まして其放蕩無頼なるものは。いかなることをか言ひ出だし。いかなることをか行はんも計りがたし。今其學風の邪惡を辨斥して。一掃蕩地せずんば。此後父を弑し。君を弑し。謀叛反逆の賊も。英雄豪傑氣象の學者より出づべきことなり

○大内義隆の滅亡は。相良武任。上杉憲政の滅亡は。菅谷大膳。上原兵庫。今川氏真の滅亡は。三浦右衛門。武田勝頼の滅亡は。長坂釣閑。跡部大炊。此數人は日本の佞幸傳に入るべきものなり

○一萬兩の普請は。五千兩は入用にて。五千兩は盜臣と。夫れに加はる町人百姓の聚斂に入る。盜臣と覆商と。共に潤澤を得るときは。廣大の仁恩仁政とも云ふべけれども。夫れ

等の爲に。財用匱窮して止むことを得ず。聚歛の臣を用ひ。頭會箕歛に及ぶ。されば良民を浚剝して。姦民を畏かしめ。盗臣の貲を聚歛の臣にて償ふ。後の世には。此等のこと多かるべし。經濟の臣。此等のことを知らば。經費過半を減じて。財用優足なるべし。殺身成仁。捨生取義。臨危致命。過渉凶義亡咎の類。格別のことなり。只今の太平無事の世界に生れては。家を興し。身を全する人は。賢智者と知るべし。家を滅し。身を敗る人は。愚不肖と知るべし。智愚。賢不肖の前は。廢興存亡にて分明なり。去るが故に。愚昧に見ゆるも。身を全し。家を興す人は。何か各前の人に超過することありと知るべし。或は身を敗り。家を滅す人は。何か人に劣れる愚昧のことありと知るべし。姦才にても身を全し。家を興せば智者なり。去れども是は曹孟德司馬仲達天下を取りし類にて。子孫永久は覺束なし。仁義正直にて。家を興し。身を立つる人は。堯舜三代の聖人。漢。唐。宋。明創業の君と同じ。身家と天下とに理あるに非ず。家を興す人は。天下を興す人。家を滅す人は。天下を滅す人なり。故に放蕩無頼にて。身家を滅す人天子となれば。とりも直さず。桀。紂。幽。厲なり。齊の東昏。陳の後主。隋の煬帝なり。唐の玄宗。宋の徽宗。元の順帝なり。去るが故に。與治同道無不興。與亂同事無不亡と云へり。然るに。世の文人才子など云ふ者に。身家を廢亡して。我は天下を治むべしなど云ふ者あり。笑ふべきことなり。身家をも守り得ずして。如何に天下を治むべきか。此等の人の才藝は。玄宗の詩文。徽宗の書畫にても。都を出奔せるか。五國城の囚俘となるべき人物なり

○常憲院殿の御時。西山中納言光圀卿御前にて。大學の三綱領を講じ給ふ事は。桃源遺事に見えたり。又吾藩の先公。宰相綱紀卿は。御前にて中庸の性道教の一節を講じ給ふ事は。木下順庵が錦里文集。加賀菅侯奉旨進講中庸記に詳なり。元祿五年壬申六月三日の事なり。常憲院殿の常に御自身にて。經書を講じ給ひて。周易傳義の御講釋に。兩山の僧徒（寛永寺 増上寺）まで拜聽に出でたること。武野燭談に詳なり。御自身經書を講釋し給ひて。水戸。加賀大國の大守まで。御前にて各經書を講ぜ。誠に難有御事にて。當代文學の盛に行れ。前古に超越することは。此將軍の御功德なり。蘐園の物茂卿の。昔者憲廟好學。海内靡然たりと云ひたるは信然なる言なり

○綱紀卿の五十歳の正月に。醫者共を召されて。養生の第一は。何ぞと問ひ給ふ。醫者共僉一同に。房事を愼むを攝養の第一と存ずる旨を申したり。綱紀卿の仰せに。吾れも左樣に思ふなり。吾今年五十なり。此以後は房事を斷ぜべしとて。五十以後は奥へ入り給は

を。如此の修養ゆゑ。在位七十九年。壽八十二歳にて薨じ給へりと。是吾先考東岩府君の御物語なり

○綱紀卿は。先公陽廣院（光高君）の早世し給ふ故。三歳にて家督を承け嗣ぎ給へり。寳は正保二年にて。大猷院殿の御時なり。是より嚴有院殿の三十年を經て。又常憲院殿の三十年の御榮華をも見果て。文照院殿。有章院殿の御二代。天下の御正統の斷絶して。有徳院殿の紀州より入りて。大統を嗣ぎ給へるを見て。享保九年に薨じ給へり。仙家の七代の孫に逢ふなど云ふにも比すべきか。さて周公の無逸に。殷王中宗帝大戊の在位の長きを稱美して。七十五年とあり。夫にも優り給へり。まして秦漢以後には。在位五十年を越えたるは。漢武一人なり。近代。清朝の康熙乾隆六十年の在位は。三代以後是なき偉事なり。夫れも十九年まし給へり。天の大徳に報ゆるの偶然ならざるを知れり

昔漢書を讀みたるに。漢の宗室に在位の長き人ありたるを覺ゆ。夫れも吾松雲院公には及ばざるか

○綱紀卿は。文武の二道に達練の御方にて。一時の名士を召し抱へられたり。木下順庵。室鳩巣。稻生若水の類是なり。新井白石も召し抱へらるべきを。岡島忠四郎と云へるものに譲りたること。白石の折焚柴の記に詳なり。鳩巣は十四歳の時。只者ならざることを知り給ひて。召し抱へられたり。順庵は。常憲院殿御代に。江戸へ辟され。鳩巣は文照院殿御代に江戸へ辟さる。當代の學問文章は。加賀を盛とすること見るべし。さるが故に。四五十年前までの學者。此卿の御事を。加賀の綱紀。加賀の松雲院と云ひ。知らぬものなかりしに。近來の學者は。浮華にのみ走りて。此卿の御事も。知るもの多からず

○光圀中納言。學を好み給ひて。多く書を集め藏し給ふ。其後大日本史を撰修し給ふ故。殊に國書を多く集め給ひて。藏書の富盛なること。一時の冠冕なりと云ふ。されども華本の多きことは。綱紀宰相の集め藏し給へるには。遠く及ばざりしと。水戸の篁墩吉田坦藏（漢官學生）の物語なり

○水戸の史館（彰考館）には。綱紀卿の御直書の手簡多くあり。皆水戸の御家臣の名當にて。懇遜の御事なり。多く書籍を御假し借りの簡牘なり。其内黄門卿へ書を借し給へる手牘に。此書は當時借り寫せる時。他見致すまじき約束にて借りたる書なれど。御懇望故。無據入御覽候事なり。故に一日御借し可申。二日とは相成り不申と云ふことありと。故の史館總裁翠軒老人立原萬（甚五郎）の物語なり

綱紀卿を生み給へる清泰院と申しゝは。大猷院殿の御養女にて。實は水戸の頼房中納言の御子なり。されば光圀卿と。綱紀卿は。舅姪にておはしませば。共に學を好み給ふ故。殊に御親み深かりけるにや

○近藤登之助は。一代の侠者にて。大小の神祇組と云へる其一人にや。其徒と河合又五郎をかくまひて。大なる騒動を起しゝ事。世人の知る所なり。綱紀卿の御若年の時にや。登之助家僕を放打にせんとて。打ち損じ。家僕は本藩邸の門内へ逃げ入りたり。兩度まで使者を以て。歸し給はるべき旨を申し入れたれども。綱紀卿の御答に。此方屋敷を憑もしく存じ候ひて。駈け込みたるものに候へば指し出だし候事は致を間敷候。御宥免候ふべしとなり。三度目に登之助自身にて來り申すは。拙者小身者の家僕を。大國の太守の左程までに。御憐愍被下候は。忝なき御事なり。さて此小者も。大國の太守の左までに御憐愍を蒙りしは。冥加の者に候へば。此以後は。士に仕り召し仕ふべし。御歸し可被下との事なり。綱紀卿も左樣の事に候はゞ。歸し遣をべしとて。歸し給へり。さて登之助右の家僕を。已の家敷内にて縛り。本藩の火の見より。能々見おろす處へ引き居ゑて。首を打ち落せり。綱紀卿此事を聞し召されて。以の外に怒り給ひ。惡き登之助の振舞や。小身者に欺れては。一分立ちがたし。さらば登之助を打ち取るべしと下知し給ひ。在邸の諸士。諸卒に命じて。甲冑を被り。南の門の内に群集す。今一相圖にて。南門を開きて打ちて出でんとひしめきけり。此時光圀卿追分の御屋敷に居給ひしが。本藩邸中の騒動せるを聞き給ひて。何か加賀屋敷は騒動するぞ。見て參るべしと。昵近の人に仰せ付けらる。其人駈せ歸り。何かは不存。加賀屋敷の内。馬。物具の音仕り候と申し上ぐる。光圀卿されば こそとて。鞍を置き給ふ暇なく。裸馬に打ち跨り。加賀の屋敷へ駈せ込み給へば。綱紀卿六具を固め。將机に腰かけ。采幣を把りて指揮し給ふ體を見て。馬より飛び下り。是れは加賀守殿には。物に狂ひ給ひし歟。如何なる事にてかくはし給ふぞと御尋なり。其時。綱紀卿。登之助の不埒を。逐一に仰せられて。此趣に候間。只今人數を差し遣し登之助を打ち取り可申と仰せらる。光圀卿の仰せに。夫れは以の外の僻事なり。登之助は。小身の事なり。御自身手を下さるべきものに非ず。縱ひ打ち取られたりとも。大國の太守の。小身ものを打ち取ること。武勇にも候はず。拙者へ御所存を仰せ聞られ候はゞ。御本丸へ申し上げ。登之助事は縛り首にも。切腹にも。自由に可相成事に候へば。今日の御企は。強ひて思し召し止まり可然と仰せられたり。此理に屈服し給ひけん。綱紀卿頭

を低れて。暫時黙し給ひたり。やゝありて仰せられ候ハ。此れハ加賀守が誤りにて御座候。登之助を打ち取ること仰せに従ひ。思ひ止まり申すべしとなり。光圀卿も大に御喜悦にて。さらバ思し召すまゝを不包に御語り候へ。御本丸へ申し上げ。如何様とも取り計ふべしとなり。綱紀卿の仰せに。此上ハ何の所存も候ハねど。箇様の事の出来するも。登之助の門と。拙者の門と。相向ひ合ひ候より。事起れバ。此以後ハ。彼が屋敷の門を。此方へ不向様に。御取り計らひ可被下となり。光圀卿の。夫れハ易き御願なりとて。仰せ上げられ。登之助の門ハ。北の大通りに明けさして。南の隠屈なる所に明けたり。今に登之助の表門ハ。傘谷の方に附けたるハ此時よりの事なりと。是も吉田垣繖の物語なり。虚實ハ不知。面白き物語にて。今の世の孱柔なる風習とハ。事替りたること故。記録して傳ふるのみ

○本藩の本郷の屋敷と。水戸の追分の屋敷と。間の垣ハ右等の御趣意もあるにや。卑くして見越を故に。綱紀卿の毎度御願ありたれども不叶。御老年までもかくの如し。御出入の御先手など參りたる時に。御手前方御存知の通り。水戸の間の垣の事を。毎度願出で候へども。今に御許容なきハ。加賀守の白髮頭へ。冑を被れと云ふ思召ならんなどの御戯れを仰せらる。夫等の事の上聞に達せしにや。終にハ此事御免なりて。勝手に高くもすべしとなり。御免を蒙られたるより。急に造作して夫迄よりハ。數寸卑くなされたり。今に此間の垣ハ。他所よりも卑しと。予が少かりし時。本藩針醫久保定能の物語なり。

○儉素なるものハ。子孫連綿として。汰侈なるものハ子孫不振なり。我覇府にても。東照神君の御血脈と。有徳院殿の御血脈計り蔓行して。夥敷御繁昌なり。大猷院殿常憲院殿。皆御英主にてましませども。此理を御存知なき故に。今ハ一線の御血胤もなし

○東照神君の。御小姓の茶宇の袴を著たるを御惣り被遊たること。諸記録に見えたり。さて有徳院殿ハ。御大小の拵へ。皆赤銅鐵銅にて。御下げ物ハ黒塗。内ハ梨地。緒じめハ先愚子。根付ハ象牙なり。御馬乘袴ハ。小倉木綿。夏ハ半晒し縮。又ハ粗悪なる縮を召され。筥迫の事ハ。其天錄に載す御召物のゆきたけ短くて。御腰物ハ格別に長し。御肩衣ハ木綿なり。火災の節。菖蒲皮の御立付にて。御頭巾ハ帶に御挾被遊たり。御鷹野の時。木綿の御脚伴。柿色の麻の御羽織。裾を御からげ。草鞋を帶に御挾み被遊たり。さて阿部豊後守殿の蟬の羽の如きのし。縮の帷子にて御前へでて。伺事せしにハ。御返答なく。北條對馬守殿の綸子の單物にて。御前へ伺候せしハ。御目を注せられて。御目通りに難居退去せり。是にて御

制禁なくても。上下の美服。華奢一時に變革せり。政事は人君の身自。率ゐ先ぞるより要なるはなし。漢書に。文帝以敦朴爲天下先と云ひたるは。此等の御事なり。此條は室新助が。麗澤蕪山秘策に。録せるを抄出せり

○有徳院殿の御時。御奥の女中の御前代より多かりしを。容色のよき女子を御選びにて。姓名等を記して申し上げさせられたり。女子の父母などは。進御の事なりと。大に悦びて。前祝をしたるもあり。凡五十餘人なり。御聞正しの上。皆御暇を賜はりて。容色の醜くき女中のみ召し使はれたり。容色よき女中は。何方へ縁組も自由なるべく。醜女は御暇賜りては。難義なるべきを。御推量被遊て如此。是も亦鳩巣の録せる所なり。唐太宗の好名給ひて。宮女を出だせるよりも。智仁兼ね至りて遠くすぐれ給ふ様に覺ゆ

○豐臣太閤は。神智妙算。豁達大度。我邦にて古今無比の人物なり。されど其人は。信長公の大刀蔭より出てゝ。身を立てたる人なり。さて信長公は。織田家（尾張斯波家老）の庶流にて。父の彈正忠信秀は（尾張勝稲城主なり）清洲の三奉行を勤めたる人なり。弘治元年四月に。信長公本家の彦五郎（廣信とも廣友とも）を滅し。永祿二年正月に。大本家の右兵衛尉を滅して（岩倉城主領尾張上四郡彦五郎の家は。在清洲來斯波領下四郡）尾張を全領を。婦翁の齋藤道三が。美濃を奪ひ取るにも。十二年を經たりと云ふ。（信長の尾張を全領するには。二十四年を經たりと云ふ）天下に旗を立つべき勢あるに非ぞ。永祿十二年に。足利義昭越前にありて。朝倉義景が禮遇の不誠を怨み。信長公を憑まれたるに。信長公是を受け納れて。美濃。尾張分國の兵を起し。是を奉じて上洛せり。後には義昭とも不和になりて。天正元年には。逐ひ拂へども。一旦は古人の挾天子令諸侯の故智を用ひたる故に。織田の勢。勃然として。龍の雲を得たるが如く。終には天下を經營するにも至れり。さて佐々木。六角承禎父子は。初より三好。松永と同意故に。義昭の南都を落ちて憑み來られたる時も。鷄肋を以て遇したり。義昭。上洛の路を支へ塞がんとて。和田山箕作に守兵を置く。若此戰に數日を經ば。五畿内に充滿したる三好。松永の徒黨。六角に加勢して。卒爾に義昭の上洛は叶ふまじ。然るに箕作一時に落去して。和田山も明け退き。其夜の内に。承禎父子は觀音寺山の城を落ちて。近江路より京都まで。將軍の上洛に。一矢を射かけるものなし。さて箕作を攻め落しゝ第一の功名は。何者ぞや。松平勘四郎信吉（彼に伊豆守今の伊賀守の祖なり）なり。是一つ。淺井備前守長政は信長公の妹聟なれども。朝倉義景に一味して。同時に滅亡したるは。時務に通せざる。無謀の甚しきものなれども。義理の正を得て。感賞すべきこととなり。夫れは長政の祖亮政は（助政とも祐政とも）

京極の家臣なりしが。永正。大永の間に逆心して。京極老臣上坂治部大輔重景（茲貴齋）の子どもを追ひ排ひて。主人の京極が北近江西近江を盡くに押領せり。六角の此を惡みて。小谷城を圍まれたるに。朝倉の援を得て。運を開き。家を興せり。此舊德を忘れざる故に。妻の縁を棄てゝ。朝倉と滅亡を共にせり。さて初度姉川の大合戰に。信長公十二段の備。長政の先鋒礒野丹波守が武勇に碎かれて。十一段は切り崩されたり。總敗軍となるべきを。東照神君の朝倉の一萬餘の兵を追ひ崩されて。眞柄十郎左衛門など云へる驍兵をも打ち取り。其上にて勝ち誇りたる。淺井勢を微塵に打ち破り給へり。此時秀吉公は。木下藤吉郎と云ひたるが。神君の御床机をなほされたりと云ひ傳ふ。此時信長公の神君へ賜ひたる感狀あり。信長記總見記にもなし。御當家の記錄にも見當らず。武家功名記に見えたり。さて初度の大合戰に打ち負けて。淺井朝倉遂に滅亡に及びたり。信長の天下草創の功は。三河武士のなしたるなり。是二つ。信玄は善人には非ざれども。一代の英雄にて。軍略には長じたり。天正の初には。甲斐。信濃。駿河は全國上野。遠江半國までも領したり。此人の長壽ならば。信長公五畿内邊の弱敵を幷呑したりとも。又々東美濃より。信玄に後を擊たれば。毛利などを征伐することは思もよらざることなり。謙信の能登。加賀へ打ちて出てたるにても。大に手こぞりあぐみたるにても見るべし。幸に信玄の死したる故に。其子を鐵炮をくめにして甲斐の勍敵を取りひしぎ。西方の取合に後を顧みざる樣になりたり。さて信玄を打ち殺しゝは。野田城主の菅沼の足輕なり。されば信長の天下草創の功は。三河武士のなしたる是三つなり。信長公は一體に。甲斐の勍敵を神君にさゝへさせて。已れ中州を經營したるものなり。王莽無道にて。天下蜂起せり。されとも王莽の滅びたるは。昆陽の戰に。王尋。王邑八十萬の大軍を。光武の敗散の卒數千にて打ち破られたる功によれり。劉聖公。（更始）劉盆子など。一旦は人主となりたれとも。終には光武の天下となりたるは。天の其功に報じ給へるなり。大閤神人にて。明智を擊ち。一旦に天下を領し給へとも。信長公の太刀蔭より出でたる人と。信長公の天下を經營せる草創の功を建てたると。同日の論に非ず。さるが故に。天下は御當家に歸してかく繁昌なり。然るを湯武の放伐の事を引き。又は石勒が曹操。司馬懿を欺孤兒寡婦奪天下など云ひたるを。近似の事の樣に思ひて。（新井白石）いやに思ふなどは。當時の事實を詳明せざる誤なり

呉の魯齋の帝王之興。先有驅除と云ひたるは。今古の妙言なり。漢高の興るには。陳

歩。項羽の驅除あり。光武の興るには。王郎。樊崇等の驅除あり。家の興り給ふには。織田。豐臣の驅除あり。足利家と御當家の間に。天正元年より。天正十年までは織田家。天正十一年より慶長八年までは豐臣家。班固の所謂。餘分閏位の類ならずや

○淺井長政義理を正して滅びたり。其故にや。其二女一人は淀殿にて。秀頼公を生みたり。一人は崇源院殿にて。家光公を生み給へり。偶然ならざるを覺ゆ。淺井は藤原氏にて。初代重政。京極持清の時なり。權中納言政氏の子なりと云ふ。又嘉吉年中の事にて閑院家。三條大納言公綱の子なりとも云ふ。識者に尋ねて。匡正をべし。義昭の六角に寄寓せるとき

落魄江湖此結愁。孤舟一夜思悠々。天公亦憫吾生否。月白蘆花淺水秋

其不過の感。言語の表にあらせる。今日の詩人よりも。面白きことなり

○景勝の越後などにて。信長公の本能寺の生害をきゝて。此後の天下とりは。家康なりと云ひたるに。思の外に秀吉公の明智を誅し。柴田を滅し。天下を領せる勢になられたるには。肝を潰したりと云ふ。天正十一年より。慶長八年まで二十年。遲く天下を領し給ふ。一時に屈するは。萬世に伸ぶ。是御當家天下を有たるゝことの永久なる基なり。さて

秀吉公は。初の程。何も赫々たる大功なし。毛利征伐の先手となり。播磨へ出でられたるより後は。其功著明なり。是天正五年六年の事なり。天正十一二年には。最早天下取りなり。其功神速なる故に。其後永久なることを得ず。世に眞書太閤記。畫本太閤記など云ふ妄書ありて。信長公初年の武功とも。皆秀吉公の武略の様に記せり。虛誕妄說。識者を欺くべきには非ざれとも。女。童子まで。此書を玩弄して。眞實のことの様に思ふは。大に宜しからざる事なり

○周官膳夫の職に。王日一擧齋則三擧(スルトキハ)とあり。是は天子の平日は。日に一度盛膳を供して齋戒の時は。三度共に盛膳を供すと云ふことにて。後世の齋素とは。事替りたることなり。夫れは予が論語大疏に詳なり。さて今は天下しろし召す將軍家にても。又は大國の諸侯にても。正月元日より三日までは。嘉儀さへ朝晝は御料理を召し上らるれとも。晩食は御長豆腐と唱へて。八杯豆腐のみを召し上がらるゝことなり。まして平日は猶更のことなり。貴人高位の禮法は。晩食は一統に粗薄なるものなり。士庶人の家にても。古禮法を失はざる家は。晩食茶付香物と云ふこと。一統の常例なり。士太夫にても。庶人にても。無作法の家は。此等の事も知らざるものなり。さて又此禮法。唯今の世の事にては

あるまじ。足利將軍も。鎌倉將軍も。一同の禮なるべし。細川幽齋（藤孝）の東照神君へ。足利將軍の禮式を御相傳申されたる內の條目たるべし。されども是れハ武家の事にハあるまじ。昔の公家の世天子攝關なども同じ事たるべし。故實家などハ。其濫觴をも窮め知りたるや。予ハ此禮の起りを知りたり。是れハ佛家の戒法に。非時の食を禁じて。晝の午時より後ハ。一粒をも食せざること。沙彌の十戒よりして然り。中古王室の盛なる時。天子も攝關も。皆佛法に歸依して。佛戒を受け給へり。俗人ハ戒律僧の如きことハ得て成がたき故。晩食を少き樣に。精進齋素の如くにしたるものなり。晩食を齋素にする。皆婬慾を禁じ。婬慾を薄くするの方法。晩食に膏粱滋味。或ハ醇酒厚味を飽滿せるときハ。氣力盛にして。婬慾勃動す。釋氏の法ハ身體を尫羸ならしめ。婬慾の薄からんことを願欲す。晩食を禁じ。晩食を薄くする。皆其方法ならずや。されバ今の禮法の八杯豆腐。香物茶づけ。實ハ可笑の甚き事にて。妻妾を具有するものハ。夜食にハ。肥肉醇酒を飲食して。氣力を張旺ならしむべきこと。攝養の術なり。僧徒の戒律に比擬すること。以の外なる僻事なり。然れども天下の萬事。片落なることハ云ふべからず。能く事理を考窮すれバ。佛法の餘習にて。天子。將軍にても。國主。城主にても。正月元日より一日に一度。八杯豆腐にて召し上らるゝと云ふこと。人欲を抑制して。質素儉節の道に叶ふ。無量無邊の大德にて。實ハ難有御事なり。此一條にても。能く守る人ハ。一身も壽考康寧なるべく。福祿をも保有すべく。子孫も長久繁榮なるべし。是釋迦牟尼世尊の世道に。大功ある所なり。精進日など云ふことも可笑こともあれども。類推して其美事たることを知るべきなり

三叟の詩にも。飧欠數口と（家中閑祭）云ひたれバ。晩食の少なきこと。攝養の術なり。（人夜分にハ。勞動せざるゆゑに。晩食ハ少きを法とすることあり）

精進日と云ふことありて。屠殺を禁じ。物命を害すること少き時ハ。天地生物の心より見るときハ。此二字にも無量の功德ありて。儉素の爲のみにも非ざるなり

○備前新太郎少將（光政）ハ。江戶在府の時も。國にて刑罪人を誅する日にハ。終日麻上下を著して。齋素（精進料理）し給へりと承り傳へたり。是れハ左傳の蔡の聲子歸生が云へる。古之治民者。勸賞而畏罰。恤民不倦。賞以春夏。刑以秋冬。是以將賞爲之加膳。加膳則飫賜。此以知其勸賞也。將刑爲之不擧。不擧則徹樂。此以知其畏刑也。杜元凱曰。不擧盛膳（襄二十六年）とある意味を能く得給へたり。難有御事なり。天下にても。國にても。君の喜び給ふときハ。國。

天下の民。一統に喜び。君の憂ひ給ふ時は。國。天下の民。一統に憂ふ。如此に非ざれば。治國平天下の功はなし難し。後の人君は。己の榮樂を爲さんとて。民の患苦をも憚らず。故に民も亦人君の患難を悦樂するに至る。亡國の君は勿論のことなり。中庸の君と云へとも。大槪は如此。故に片々にては死罪を斷じて。片々にては猿樂の舞をすると云ふ様に。哀樂の發。皆其道を失へり。是れ民の心服せざる様に。自ら取る道なり。治道に志ある人君は。臣民を褒賞する日は。酒宴歌舞をもなすべし。臣民を誅戮する日は。齋素して悲哀をすべし。如此なれば。人君の憂樂と。天下の憂樂と。一致して。事ある日には。士民も上の爲に命をも致すべし。上下の哀樂悲歡別々のものとなりては。一旦事ある時に士民は上の用となるまじ。可畏の甚しきことなり。人君の心の一國は一國。一天下は一天下に充塞するに非ざれば。聖人の治をなす事は叶はざることなり。されば新太郎少將の美行も。其心なくして其跡のみ真似る時は。虚文々具にのみなりて。又其實用はなき事と知るべし

左傳に鄭厲公の言に。夫司寇行戮。君爲之不擧と。杜云。盛膳(莊二十一年)歸生の言と同じ。三代盛時の恒例と見えたり。精進と云ふことは。佛法六波羅蜜(翻譯六度)の其一にて。布施。忍辱。精進。持戒。智恵。禪定是れを六波羅蜜と云ふ。勇猛精進の義にて。斷じて菜食の事に非ず。されとも齋素を精進と云ふこと。舊きことなり。唐范攄の雲溪友議に。南陽鳴鳩和尚。與元蘭若上坐及寶誌太師與繪の條に。たしかに菜食のことを精進と記したり。又南齊書周顒傳にも見えたり。菜食と云ふは。漢書霍光傳に見ゆ。淨膳と云ふは。梁書武帝紀に見え。皆今の精進の事なり

〇三河の武士。兩度天下を取りたれとも。此事世に知れるものもなく。まして記載せるものもなし。己卯(文政二年)の秋。予先主人吉田の松平侯の扈從として。三河に一年在留せり。是れにて始めて此事を知りたり。さて新田の庶流は。世良田德川を始として。皆上州新田郡の在名なり。里見は義俊流なり。山名は義範(山名伊豆守)流なり。是は新田正統大炊助義兼の兄なり。故に遠く隔たりて。今の上州高崎の南に。山名あり。北に里見(上中下三村が)あり。其他は義貞擧兵の時。天狗山伏の催促せる。三國峠を越えて。越後の羽川鳥山等なり。然るに下野足利郡に。足利と云ふ處はあれとも。足利庶流の人は。村名一もなし。少き時(天明七丁未予二十三)に。毛の野に浪遊して。此事を不審に思ひたれとも。誰ありて。此等の事を辨知せる人もなし三河に在留して。其輿圖を披見すれば。足利庶流第一たる。仁木細川は額田郡矢矧

川の東に並びたる村名なり。吉良。一色今川。荒川。戸ケ崎まで幡頭郡の村名なり。されば鎌倉の初に。足利庶流の人々を。此國に封じたり。細川。一色の人々。又己の次男三男を分封せし地と見えて。三河の國中に。一色。細川と云へる在名夥しく見えたり。元弘。建武の亂にて。尊氏天下を領し給ひ。慶長の亂にて。御當家天下を領し給ふ。三河武士の兩度まで。天下を經營したること奇と云ふべし。妙と云ふべし

仁木。細川は。水島か室山かの合戰に。打死せる矢田判官代義清。足利藏人義康長子にて。足利の正統上總介義兼の兄なり。其子を義實と云ひ。三子あり。長は實國。仁木の祖。次は義季細川の祖。三は義宗戸ケ崎。荒川の祖なり。足利の家にては。仁木。細川を重ぜしことなり

義家の子式部大輔義國。其の子は新田大炊助義重。上西入道 次男は足利藏人義康なり。然るに義重の三男にて。足利の正統を承け嗣きたるも。上總介義兼と云ふ。新田。足利同時同名なり

足利の義兼は。今川了俊が難太平記には。實は鎮西八郎爲朝の子なりと云ふ

○三河の國より。天下を領する人の起りしことを。如何なる故と云ふことを知らず。山川の

英靈にや。鳳来山。本宮山。猿投山等。さまでの高山にも非ず。吉田川。矢矧川も。岐岨川。利根川などに比類をべきにも非ず。往古民情風俗の至りて善き處と云ふこと。新太郎少將の諸士へ勅戒し給へる書にて知りたり。さて予が所見は。山は童山のみ多くて。草木を生ぜず。灌漑の水少なく。いかにも瘠薄の地にて下々の國と云へり。是れ人の興るべき基源なり。魯語の公父文伯の母の言に。沃土之民不才者淫也。瘠土之民。莫不嚮義思也と。瘠薄の土ゆゑに。人浮華に走らず。篤實倹朴にて。能く勤む。是興るべきの源本なり。されとも。只今にては。昔の様子とは事替りたるべし。新太郎少將の見給ふとも。最早ほめ給ふことはあるまじと思ふなり

矢矧の橋を渡りて。西は土地肥磽の異あるは知らず。先尾張と同國様にて。四方を遠望をれば。東照神君の興り給へる國と云ふことも。自然に知るべき形象あり。是れは別論に附す

○昔の平安城の大内裏も。東西は八町。南北は十町かと覺えたり。少かりしとき。鎌倉へは三度遊びたり。頼朝の居所は。八幡の東北の谷にて。法華堂の前の畠にて。方一二町には過きまじ。北條氏の居所は。八幡前の東にて。若宮小路と云ふ所なり。是亦方一二町には

過きにし。足利氏の京師の居所。義満将軍の花の亭と云ひたるも。東は烏丸。西は室町にて。東西は一町なり。一條武者小路邊より。上立賣までの間なれは。南北も三町には過ぎず。天下を領する人の居所。僅に如此事なり。信長公安土に大城を築き。秀吉公伏見。大坂に大城を築きしより。御當家江戸の城を築き給ひて。壮麗廣大。前古の企て及ぶべきことに非ず。鐵炮大筒など。武器渡来して後は。城郭今の様に非ざれは叶はぬことなり御當家の初に。武家諸法度を出だされて。第一に新築城の深溝高壘を禁ぜられたるは。當時數百年の兵亂を太平になし給へり。至極の良策なり。されとも二百年の太平にて。聚斂の吏の害にて。百姓一揆など云ふこと。諸國蜂起す。然るに大名の陣屋など云ふもの。淺間にして防禦すべき道なし。強盗の數十人ならんには。天下に横行すべし。城と云ふこと。大法禁にて叶はずとも。十間の堀。三間の土手。一重は許されて然るべきことなり。驛場。町場などにも。町のはづれには。土手堀ありたきことなり。太平には。羽織袴にて事足れとも。甲冑は兼ねて貯ふべし。土手堀は人家の甲冑なり。此理を知れは。此一條は許し給ふべきことなり。唐土は些少の州治縣治にても。城壁溝塹あり。さて上古は不知。周の時より諸侯の國城は云までもなし。大邑小都までも皆城池あり。左傳を見て知るべし。吾邦は遅く物事の開けたるにて。鐵炮渡来の後。足利の末世より堀をほり。土手を築くことを知りたる勢なり

○京都在留の中に。處々を遊觀したるに。二大慽を生じたり。其一は豊國大明神を拜禮せんとて。智積院と大佛の妙法院の宮の間を登りたるに。昔の豊國の遺跡にや。九尺四面の堂一あり。脇に三尺四方の堂二あり。右の方に堂守の坊あり。内へ入りて事由を詳にせんと思ひしに。僧徒居あはせず。四十有餘の女一人居れり。是れは豊國大明神の御堂にやと問ひければ。いやいや是れは新日吉の宮にて候と答ふ。脇の小堂にても豊國かと問ひければ。いやいや是れも左にては候はぬと云ふ。さて堂の東の山は。阿彌陀が峯にて。太閤を葬り奉りし處と記臆せり。夫れは栅木ありて。得て登るべからず。栅木の前にて。伏し拜みて歸れり。さて石田三成。秀頼公兵を起し。御當家へ敵對して滅亡したり。其近き世には。太閤厚恩の諸侯も多く。民心も一致ならず。疑惑も生じ易く。背叛もなし易し。故に此等の事は棄て置かれたること。當時にありては。御尤千萬の事なり。今は二百年の太平。諸侯諸士は言ふまでなく。鳥獸艸木まで御當家の大恩を蒙らざるものなく。御當家の威德に服せざるものなし。誰ありて背叛攜貳の念を抱くべきや。今日に

て見ることは豊臣太閤も一代の神人なり。又御當家に大功なしとも云ふべからず。されば豊國の社御再興。七間四面の堂作にて。華美を盡さるゝにも及ぶまじ。三百金か。五百金にて建立ありて。其後の破壞には。西國大名の太閤厚恩の家に。互に被仰付ば。いづれも悦びて造營すべし。さて忌日には。所司代御名代に參詣せば。是一擧無涯御威徳の事かと思ふなり。大猷院殿御代に。日光山東照宮の御社を萬代不易になされたきと云ふ思召にて。諸役人に議せられたるとき後に幽也と隱居名付けたる智慮ある人。豊國の社を能々崇め尊ばれたれば。日光も萬代不易と云ひたることを。新井白石の記したるを。少壮のとき見たるとあり。其世にては。いかがあらん。今日にてはかくありたき事歟と覺ゆ。其一には院參町と云ふ處に。三十石三人扶持とか云へる公家四十人ありと。是れは靈元院の御時か。東山院の御時に。公家の二男三男などの。御側に召し仕はれたるものゝ家なり。其世には。御側に召し仕はれて。御寵愛のものもありし故。諸大名より婚姻を結びて。諸大名の扶助を受けたるものなり。今は世隔りて。扶助のものもなく。微祿にて困窮せざるものなし。公家と云ふ名にて。同心足輕と同祿なること。是れも所置の至當を得たりとも思はれず。凡薄祿公家と云ものを。二百俵高に被仰付て可然ことなり。是亦盛徳の御事なり。されとも二條共に。御物入のある事なれば。此後幾世經たりとも。此れを言ひ出だす人もあるまじく。此事を行はるゝこともあるまじ。是吾二大憾たる所以なり。大佛殿も。大阪陣の後は。門を鎖して人を入れず。山草茫々たる體なりしを。妙法院の宮の御願にて。御許ありて。人々大佛殿へ參詣することを得たり。さて大佛殿。今は焼け失せて。石燈籠のみ遺れり。此石燈籠。實は皆豊國大明神へ。諸大名より奉納せるものなり。豊國社破壞の後か。皆是へ引きおろして。大佛殿の燈籠となしたり。寄進の大名の名は。皆々世を憚りて。石工に命じて。刓り去らしめたるものなり。然れども豊國奉納の物たるを知るは。南方の西のいづれの石燈籠に。奉獻豊國大明神と云ふ字。今に歷々存在せり。京師に故事を能く知りたる人のありて。予に語りし故。まざまざ行きて觀たるに。相違なきことなり

○明の萬曆年間に。利瑪竇中國に來りて。天主の邪教を說けり。時の學士大夫是れを悅びて。古來曾有の奇と稱せり。其文盲不學笑ふべきことなり。明人學空疎にして考据の學なき故。西學の中國に來る。其久しきを知らざるなり。清人紀昀が。槐西雜誌に。辨斥せる所尤の事なり。唐の時。穆護の祆神。祆教。祆祠。祆廟。祆寺。祆僧と云ふもの。此事にて。

唐の時には。官品令に祆正と云ふ官まで置きたり。宋姚寛が西溪叢語に。黄山谷題。牧護歌後を辨じて。始末極めて詳なり。唐人の書には。段成式の酉陽雜俎にも載せたり。唐の武宗の會昌五年に。佛法破却の時。僧及尼并大秦。穆護。祆僧皆勅歸俗せしむと通鑑にも。舊唐書にも見えたり。文儒略が西學凡には。唐碑一篇を附載して云。貞觀十二年。大秦國阿羅本遠將經像來獻。即於義寧坊。勅。建大秦寺。一所度僧二十一人云々。西溪叢語に云。貞觀五年。有傳法穆護何祿。將祆教詣闕。奏聞勅令長安崇化坊。立祆寺。號大秦寺。又名波斯寺。至天寶四年七月。勅。波斯經教出自大秦。傳習而來久行中國。爰初建寺。因以爲名。將以示人。必循其本。其兩京波斯寺宜改爲大秦寺。天下諸州郡有者準此とあり。宋次道敏求の東京記に。寧遠坊有祆神廟と云注に。或傳晉戎亂華時立此。又石勒時立此とあり。五胡亂華の時より。佛法と同じく。中國に傳はりて。唐に始まるには非ず。玄宗の詔に。久行中國と云ふにても知るべきなり。さて我か京師の西に。大秦と云へる邑名ありて。ウズマサと稱す。天主をデイウスなど云ふの語にも近し。二十歳の時。通鑑を讀みたるより。是れは先王の唐制に效ひて。大秦寺を建て給へる舊跡ならんと心付きたり。山城名勝誌（一作志）などにて考ふれば。聖德太子。秦川勝事を附會す。廣隆寺と云へる寺は太子川勝よりの事にもあるべし。何とて川勝の事なればとて。地を太秦と云ふべきや。又太秦を何とてウズマサと唱ふべきや。ウズマサと云ふは。胡語蠻語の傳はりたること。明白なり。奈良の朝より。平安城の初まで。大小の事。唐の制を效はれたる世なれば。大宗。玄宗の大秦寺を建てたるに效ひて。京西に大秦寺を建てられたること必定と覺ゆ。庚辰（文政三年なり）の歳。京師に淹留せる内。此一條心中に蘊蓄せる故。廣隆寺へ兩三度も參詣して。異なる像設もあらんと。内陣を窺ひ見しに。何か佛像の夥しくある古寺なり。寺僧に懇意もなければ。近く入りて委く見るべき樣もなし。遺憾とのみ思ひて歸れり。されど一條は見得たることあり。本尊は藥師などにて。常の佛像なり。左右の脇立に細く長き笠を蒙りて。桿の先に銀の月金の日を差し上げたる像なり。佛家のものとは。努々思はれず。波斯大秦などの天教を奉ずる家の。像設たること明白なり。此等の穿鑿は無用の事なれど。此事を知り。此事を言ふは。天下に我一人なり。後の人。我此言を信じて。廣隆寺の像設等を撿閲せば。面白く古きものも出づべき歟。されども是れは國禁の事にて。寺僧の忌むことなれば。彼徒には語るまじきことなり

祆字。顧野王玉篇。音阿憐切。註爲祆神。祆神の唐に始まるには非ず。六朝以來の事た

ること。玉篇にても知るべし。杜預左傳注の妖神を祆神に作るは。覺束なきことなり。さて又妖字。西溪叢語には。予長兄伯聲嘗攷火妖字。其畫從天。胡神也。音醯堅切。教法佛法所謂摩醯首羅也。胡三省通鑑注には。妖呼煙翻胡神也

○西洋人は。家宅を五重七重に作りて。其第一の高層の處に。天主を祭る。信長公天主の邪教を假りて。佛法を破却せる志あり。其事は極めて謬れり。京師一條戻橋の東北に地を賜ひて。南蠻寺を建てられたり。今は攝家方の屋敷となりて。片側町なり。されど天主の途子と唱ふ。さて安土に大櫓を立てられて。天主と稱す。是天下天主の始なり。秀吉公の姫路の天主。大坂の天主。伏見の天主など。是れに次げり。後には大櫓を天主と稱することとゝ覺えて。其所以を知らず。實は其第一の上層に。天主を奉祀せる故に。名付けたるにて。西洋人の真似をしたるなり。軍學者などは。夫等の事も知らずして。最下層二十五間四面にして。千疊敷の間出來ざれば。天主とは稱せずなど云ふは。以の外の僻事なり。其始の安土の天主も。十八門かと覺えたり。大櫓なれば天主と言ひ習はせることとなり。信長公の天主を奉ぜられて。天主と名付けられたりと云ふこと。信長記。總見記等にも記載せず。今は天守など書き改めて。心付くべき樣もなかりしに。一諸侯の臣の。予が門人。予が少かりし時に。物語せるに。是れはあらねには申し上げがたきことなれど。不思議のこと故申すなり。我國城の天主の上層に。何か怪しき神を安置せり。切支丹の神なりと言ひ傳へたりと。予此言を聞きて。豁然として了悟したり。信長公の天主を安置せられて。天主とは付けられたるなり。諸國の天主も。是れと同じ。御制禁となりて。皆取り棄てたるに。其國などは邊土にて。今に其まゝあることならん。たとひ字を無理に取りかへて。天守と稱したりとも。根元信長公の心得違より出でたることにて。天守は天主なりと云ふことは知るべき理なり。今かく御制禁に。官名までも。其稱呼を用ふることは然るべからざること歟と覺ゆ。天下一統に。天守と云ふ語を禁じて。大櫓と云ふべき事なり

○天主教を破られて。宗門。宗旨と云ふことを定められてより。佛法磐石の固めをなせり。僧と云ふもの。檢屍の役人と成りたり。是れは南光坊天海僧正の建議して。かくはなりしと承り傳へたり。能々考ふれば。僧徒には大功ありて。真の佛法には大害あり。是よりして。僧徒は無學にても。不徳にても。事すむことになりたれば。是れ僧徒には大利ありて。破戒不如法の僧のみ多くして。佛理を辨じ。佛心を得るもの。掃地にして絶え。今時

の甚しきに至れば。佛法は滅却したりとも云ふべし。是佛法には大害なり。さて僧徒の勢盛にして。破戒不如法のみ多きは。是れを裁抑せんとには。上の人。佛法に歸依崇尊し給ふべし

○呉梅村の綏史（綏寇紀略）虞淵沈の篇。開けて災祥のみ記せり。明末ほど災孽多きはなし。されど火災は。五千家焼亡したること第一と覺えたり。北土は火災少なしと見ゆ。火災は浙江を天下第一とも。南宋此に都せる故に。南宋は火災多し。少時宋史。南宋書。宋通鑑を讀みて。是れを知れり。十四萬家焼亡したるともありと覺えたり。明。清に至りても。浙江は火災多しと見ゆ。趙恒夫の寄園寄所寄にも。杭城苦火災と云ふ一條あり。即浙江なり。臨安なり。錢塘なり。さて寄園寄所寄に記したる模様。只今の江戸の様子と同じ。恒夫が兄の王峯士縣が。父を救ひたる術。大抵吾藩（加賀）の火消の法と同じ。さて火災は。天變にて。天意のあること。人力にて勝つべきには非ざれども。目黒。行人坂より失火して。千手の驛までに至り。芝の牛町より失火して淺草に至るなど。大平の御世にて事をみたれども。此後いかなる惡心のものあるまじとも量り難し。第一には御不要害のことなり。第二には御物入の費も夥しきことなり。第三には延焼士民の困窮難義。可憐の甚しきことなり。第四には火災の後。風俗人情一變して。あしくなることなり。文化の火災より予が隨に見知りたること。數多の條あり。なるべくは人事を盡して。火災のなき樣にせること。仁政の第一たるべし。さて火は明地に至りて止まるものなり。寛政四年壬子七月二十一日。午前に淺布の笄橋より失火して。二里ほど延焼し。夜の丑時に讃岐の兩屋敷。小石川御門焼失なり。其火勢熾にして水戸の御殿へ火の粉を吹きかくること夥し。御庭の御茶屋などは。二三ケ所も焼け上れり。されども。此時吾藩（加賀）の火消のもの共。大に粉骨砕身して防禦せし故に。火は小石川御門にて焼け止れり。是予が目撃せる處なり。（加賀門人亀田章佐を召連れて。是れを見る）是れは土手あり堀あり。水府の御門前道幅の廣にて焼け止りたるなり。文化三年丙寅三月四日午前に。芝の大木戸の外より失火して。淺草に至れり。下町は不殘焼亡して。東は馬喰町より。淺草萱町の裏へ飛び移り。西は内神田土手より。和泉橋を飛び越えて。佐久間町へ飛び移れり。然るに其間にそきまりて。新し橋一帶の民家焼亡を免れたり。火消の役夫はなけれど。人々出精して防ける故に。災をまぬかれたり。是れも土手あり。堀あり。路ありて。明き地あるゆゑに。四面火災の中央にて難を免れたり。此のとき下谷御徒町の内には。或は一軒。或は兩三軒。災を免れたり。皆あき

地ある故なり。かゝるの大災にても。明地なれば防ぐべく。災をまぬかるゝ事理を知るときは。赤羽橋の一帶。新橋の一帶。京橋の一帶。日本橋の一帶。今川橋の一帶等に。土手を高く築かれ。樹木を植ゑて。空隙の地を存し。（内の方に土手を築くべし。いてやの時は。一部あるべし）さて救火の役徒も。半分は火所に赴きて。火を消すべく。半分は飛び火を消すべし。京橋の火災は。京橋切りにて。日本橋へは飛び移らせずと云ふこと。民心にしみこめば。人にも資財雜具を持ち運ぶことをやめて。屋に乘りて火の粉を防ぐべし。是にて新し橋の南の火は。新し橋切。京橋の南の火は京橋切と云ふことになるべし。いつも連燒するものゆゑ飛び火を消すことは。棄て置きて唯雜具を持ち運ぶのみ心をもちふる故に。火事は行くまゝに大災となることとなり。隅番に火所の火消。飛火の火消と云ふことを定められ。御火消。町火消。大名火消。皆此二役を勤むべし。常に大甕大桶等に水を貯ふること。兼ねて町々にて支度さすべし。さて又文化の火災にも。本町の四丁目か傳馬町一丁目か。多分土藏作り故に。此一丁は燒尾燒土もなく。平常の時かと思ふ樣に見えたり。是亦予が目擊したる處なり。されば商賈も家宅を土藏作りに樓居するものは。平常の町人よりは一格を進められて。名主の末席となし給はゞ。御府内の土藏作り夥しくなるべし。是亦火勢を殺するの一術なり。宋の子罕鄭の子産などの。一時の賢大夫皆火災を救ひたる事。左傳に詳なり。救火の識。治道の其一なり。治道に志あるものは。講究すべからざんばあるべからず

○火の起るは烟あるものなり。臭氣あるものなり。家中にても町家にても。相互に心を附くれば。事に及ばずして打ち消すものなり。然るを。その家にても隱し。近所にても先づは知らぬふりにもてなすこと。今の風俗人情なり。是失火の大事に及ぶ根源なり。連坐の法は。外事には用ふべからず。火の一事は。連坐の法を立て給ひて。失火の家は。向三軒兩隣。小家は。隣の隣までも過料をとらるゝ法を立てられば。相互に心を附けて。火を愼むべし。是救火の要術なり

○近來救火の役徒火を引くと云ふことをやりて。喚火。接火をなして。火災を大きくなす事。一統の風俗なり。放火のものは極刑火罪に處せられて。この救火役徒の放火を赦さるゝこと。何とも知れざることなり。何故にかゝると云ふに。救火の役徒は。仕事師と云ふものにて。大火ありて。人々家宅の營造をなす時は。大工。左官同樣に。厚利を得ることとなり。故に平常の所願は。火災あらんことを願ひ。又火災の大ならんことを願ふ。是を

して火消となれは。盗賊をして金銀を守らしむと一様の理なり。されども此等のきほひあふれものならでは。死地に入りて。火を防ぐものもなし。今更是を取り替ふべきもなければ。唯各列の峻法厳禁を立てられて火を引く一事止むやうになしたきことなり

従来仕事師と云ふものは。大工の下に付。日傭下直のものなり。文化の大火より。日傭高價になりて。今に同じ。大火よりして。萬事一變する。是亦其一なり

○貴人高位は學を好みて。經史を讀み給はゞ。天下最第一の美事なり。有識の者の講義をきゝ給ふこと。是亦同じ。深く學を好み給はずば。吾國の古戰軍記實録ものにても讀み給ふべし。是亦史學なり。其次は諸士の武藝を試み覧給ひて。此等のことを好み樂となし給ふときは。風俗も人情も。衰に就く事はあるまじ。遊藝を好み給ふは。以の外の惡きことなり。上に立つ人。遊藝を好み給ふ時は。下の人皆それに走りて。文學も武術も。精勤する人なく。華奢風流。愉惰淫逸のみ増長して。萬事衰弊を。亂亡をまねく種子を植うるなり。貴人の好む樂は大切の事なり

武術は心得を善くして。出精すれば。身體も壯健なり。武骨風にて。華奢惰弱にながれを。珍重すべきことにて。惡き文學にはそるかにまさる事なり

○昔時政治の弛廢せる世に。近在へ出役せるもの。婦女を淫掠すること。常事にて。多く村邑の名主の家に止宿して。少婦。少女などの容色あるを見付くれば。酒の相手に出だすべしと云ひ。否む時は大なる迷惑難義を仕掛けらるゝ故。不得已其意に應ぜり。故に出役の人の止宿する夜には。新婦少女を土藏の内に隱したりと云ふ。又上總へ出役せるもの。豪富の農家にて。新坐敷を建てたるに。其家の饗應の薄きか。又は賄賂の少きを怒りしか。泥草鞋にて疊の上へ上り。磨き立てたる天井の板を打ち割りて。手に携へたる道具を挿みたり。農民ながらも。其主人も昔は關東武士の落魄せるものなれば。唯一打にと思ひ定めたれど。妻子の袖にすがりたるにて。黙止せり。此等は予が聞見のたしかなるを記せるなり。一旦は政治嚴密にて。此等の事は止みたり。今は又如何にかあらん。小吏共の惡業にて。勿體なくも上の御不德を積むことゝなれば。兼ねて人君宰相たる人は。政治弛縦なるときは。下には如此の惡事ありと云ふことを知り給ふべし。さて婦女を淫掠せる惡吏共ある家は。其後滅亡せり。上には知り給はねど。天は赦し給はぬぞ。されば天に代ふる人君なれば。政の縦弛なるは。仁に似て不仁也。威嚴なるは。不仁に似て仁

也。此味は大切のことなり。能々心得給ふべきことなり。蕭子良が上疏に。返を返をも面白きことを說盡せり

○東照神君の御遺誡にも。諸侯一旦の怒にて。矛楯を企てたる兵亂は止むべし。困窮より生じたる兵亂は止まざるものなりと仰せられたり。是れは一旦の怒は。久くして消るものなり。又和睦を取り扱ふものもありて止むべし。國々の武士困窮すれば。徒死せんよりは。命をすてゝ事を起すべしと云ふ氣象になること故。止むべき期なし。近く應仁兵亂の起りも。百年前の事にて御存知被遊たる故に。かくは被仰たることなり。公女下嫁の禮。是まではは各別に。上下の費用を減ぜられて。國士の困窮に至らざる樣に。舊例舊格に拘るべきことに非ざるは。遠くは詩易聖人の敎なり。近くは東照神君の神慮なり。後の君相。予が此言を末世腐儒の言と思召し違はずして。能々信用あらば。國祚靈長の福ならん。如し予が此言を信用なき時は。天下の諸侯困窮して。此末いかなる禍あらんも測り知るべからざることなり

諸侯の相互に嫁娶する制も。各別に減損して。費用少き樣に命ぜられたきことなり。諸侯の家にても。女子の多ければ。困窮に至る。盗不過五女之門と。後漢書にある

は。尤至極の事なり

○周易泰之六五。歸妹之六五に。帝乙歸妹と云ふことあり。周易は此象にて。其儀自深し。是れは列論なり。されども高宗伐鬼方と同例にて。其事は實に有りたることなり。さて帝乙は周書に。自成湯至帝乙とあり。左傳にも。微子帝乙之元子也とありて。紂の父なり。周書は紂の無道滅天下に對して。自成湯至帝乙と云ふ語。賢王の樣に見ゆれど。實は賢王に非ず。太史公の殷本紀に。革囊盛血射天などのことは。實否はいぶかし。惡王たる證据は。左傳に。鄭祖厲王。宋祖帝乙。猶尚祖也。文二年とあるにて知るべし。周易の此事極めて盛事美事なる故。惡王の所爲にはあるまじと云ふ。諸儒の疑より成湯天乙のことなり。祖乙のことなりなど云ふは。周學不達ものゝ誤なり。さて帝乙は惡王にてありしかど。其歸妹の禮を能く得たり。妹とは詩には季女と云ふ例にて。をと女の愛子のことを云ふ。天子の愛子を諸侯へ下嫁せしめば。第一には倨傲不遜なるべく。第二には華奢侈大なるべく。姪娣媵妾までも。天子の威をかりて。諸侯を凌侮すべく。ひては琴瑟不調に至るべきに。さはなくて。尊を降りて卑に事へり。謙下隆挹の旨を盡さしめられたり。帝乙の此擧美大盛事。故に其近き世には。帝乙歸妹と口實となしたるを。周易にとりて

比象となしたるなり。京房易傳には。載湯歸妹之辭曰。无以天子之尊。而乘諸侯。无以天子之富。而驕諸侯。陰之從陽。女之順夫。天地之儀也。往事爾夫。必以禮義とあり。是れは後世好事者の假托して。爲之たるなり。されど其辭は善しと。呉澄の易纂言にも云へり。さて泰の卦にては。以祉元吉と云ひ。天子の女にて諸侯の妻となり。柔順恭遜の道を盡さんには。琴瑟和調。閨門肅清にて。其國家は繁昌すべし。天の祉を得て。大吉たるべきの理なり。歸妹の卦には。其君（小君あり）之袂不如其娣之袂。良月幾望などの色を以て。寵幸を願ふ徒には各別故に。衣服の飾も質素儉約して。媵妾の衣袂の美麗には及ばぬと云ふこと。月の望は十五夜滿月也。幾の近とは。十三十四の夜のことなり。天子の女故。陰の盛なるべきを。萬事裁抑して。内ばにひかへめにして。十三十四夜の月の如く。十分に究滿ならざる様にする。是恭遜謙退の徳なり。乃福を得るの道なり。故に吉と云ふ。次には詩の召南に。周平王の女の齊の僖公の子に嫁せしを。曷不肅雝。王姬之車とあり。肅は敬肅なり。雝は和睦なり。天子の女なりとて。倨傲不遜なるべきに。夫に事ふる道に。愉惰怠慢の念なく。尊奉愼重の心を盡さゞる是肅なり。柔順温良にて。親愛和樂する是雍なり。天子之女。諸侯へ下嫁するの道。詩易にて說き盡したり。秦漢以後は郡縣にて。魏晉より

今日まで。天子の公主に尚するものは。駙馬都尉に拜せられて。夫れにて身を立て。家を興すことなり。故に美男子を選むことにて。間々公卿の家柄の人へ嫁することもあれども。必竟駙馬都尉と云ふもの。男めかけの類なり。劉宋の山陰公主の慾ゆゑに。廢帝夫れが爲に。面首三十人を置きたること。宋書南史共に記載せり。可笑の甚しきことなり。故に後世公主下嫁のことは論ずるに不足なり。さて當時は。封建の制にて。三代の古に同じ。然るに公主下嫁の禮制。詩易の言に同じからず。覇府の費用極めて夥しく。尚配の諸侯も亦費用極めて夥し。一體禮制に費用の多きは。鎌倉將軍の時。一萬金の費用。室町將軍の時。五千兩になすべし。室町將軍の時。五千金の費は。御當家にて二千兩になすべし。先御代二千金の費は。當御代千金になすべし。禮記にも。禮從宜とあれば。時に應じて宜しきを制すること。禮の本意なり。論語に。林放問禮之本に。孔子禮與其奢也。寧儉とあり。禮制の儉約に從ふ禮の本意なり。聖人の言は。天理の正當をのべ給ふなり。されば舊禮舊格の。其世にて夫れにてすみたりとも。今の世は今の宜しきを量りて。上下の費用少なく。士民の困窮に至らざる様に。制度を定め給ふこと。是賢哲の仁君。大有爲の人の所業也。公主の尚配したる諸侯の。一旦に困窮して。家中の諸士へ面扶持を與へた

ることを承り傳ふ。以の外のあしごとなり。國〻の武士の困窮は。天下大亂の源なり。應仁記の初にも。應仁兵亂の起ることは。八ヶ條の其故あれとも。其根源と云ふは。義政將軍愚昧不肖にて。奢侈に長じ。七箇度の晴と云ふことをいたされて。天下の武士困窮しはてゝ。事がなあれかしと。亂を願ふ心より起れりと云へり

○庚辰の歳。文政三年予京師に在りしに。攝津山中の民家に。久しく秘藏せる竹筒を。其正月元日に開き見しに。一巻の文書なり。京都へ持ち出でゝ。日野亞相資愛卿などへも御覧に入れけり。さて其文書は。安德天皇の壇浦の難を逃れ給ひて。攝津の深山中に潜居ましまし。御病身にて其翌〻年十歳にて。かくれさせ給へる事實を。御供せし人〻の内歟。其子の記載せるものにて。明人の致身錄に似たるものなり。往〻蠹蝕磨滅の處ありて。全備ならず。吾友北小路大學助の鑒定には。紙墨筆跡共に古く見ゆれども。足利時代のものにて。決して源平時代のものには非ずと云へり。如何にも眞僞を正せば。覺束なきものなり。さて安德天皇入水の事は。予初より兩說あり。源平の囚となり給ふとも。淡路廢帝。崇德院の例にて。流し奉ることはあるべし。御命を失ふことはあるべからず。然るを二位殿の抱きて。海に沈み給へることと疑ふべきことなり。一床不出兩様人とて。俗に云ふ

鬼の妻には。鬼神なるの類にて。清盛の妻にて。重盛を生むほどの人なれば。只人にあらず。抱帝而沈み給へるは。源家の者共を弑逆の大惡大罪に陷れて。後に有志の者あらんには。賴朝義經の罪を擧らして兵を起して討せしめんと。後圖を貽せるかとも思ふ。是一つ。又安德帝は。女子にておはしませども。平相國の勢にて。男子なりと唱へ。高倉院に位をすべらせ參らせて。此帝を立てゝ己外祖父の威を震はんとて。謀らひけるにや。北魏の胡太后以女詐言爲皇子。其後立爲太子の故智を襲ひしならん。盛衰記に。御男子御出生のことは。こしきを屋の棟より南へ落す。御女子の方は。北へ落を。御産の重かりしに。人〻倉皇錯愕ある故。誤りてこしきを北へ落したりとあり。是脇に御女子たる證左なり。源家の囚となり給ひては。此等の姦謀までも。露顯をること故。二位殿抱きて沈み給へるか。是一つ。此二つの内は出づまじきことなり

二位殿の女子と。傘法橋の男子と取り替へ給ひたるは。平家の滅ぶべき種子を栽ゑられたるなり

○吾が知る所の一小諸侯の臣に。姦才あるものありて。其君に用ひらる。さて其ものゝ主人に說けるには。天地の間に。味方となるべきものはなし。唯金銀のみ味方なり。金銀を

與ふる故に。婢妾も寵幸の愛を希ひ。金銀を與ふる故に。臣下も奉公の忠を勤む。臣妾篤吾味方となるも。金銀ある故なり。されば天地の間に。我味方となるものハ。金銀のみなりと云ふことを教へ込みて。第一に吝嗇を事として金銀を貯へ。小々ハ商賣體の事をもすゝめて。貨殖せしむ。其一代ハ先づ無事にてすみたり。然るに嫡子ハ早世して。女子に聟養子せられたるに。女子淫放にして。父の貯へたる金銀ハ。多くハ散亂す。養子の世に。家中騒動して。姦才の者の子。其時亦理財の職なりしが。入牢して危き命を免れたり。其子ハ父よりハ優りて。文武の事にも略渉り。小々才量もあるものなれども。父の宿惡免れがたし。又外一小諸侯に骨董（フルドウグ）を業とせられたるものあり。是も其子の無道にて。移封の罰を蒙むられたり。儉素を宗として財用匱窮せざる様にするハ。聖人の大道なれども。強欲無慙にて。金銀のみ貯へんとするものハ。商賈ハ各別の事。士君子にありてハ。天誅を得ること必定なり

○一諸侯兄弟二人のみにて。兄ハ大酒にて。書をも讀み給ハず。弟ハ温厚の實にて。學を好みたるあり。兄弟友愛深かりしに。其臣に坊主より出頭して百石計りの祿を得たる士あり。一日君に侍せる時。御舍弟の篤實好學故に。家中の諸士皆心を傾けて。御舍弟を奉ぜんことを願ふと説けり。是より兄弟の間不和となりて。弟ハ一生沈落の體にて終られたり。主人の兄弟の間をも離間するほどのものなれば。家中の諸士。彼れが讒口に禍を得るもの少なからず。さて其もの中年にて。亂心して自害せり。其子ハ無事なるものなりしが。何か言ひけなき惡事をなして。出奔して家ハ斷絶せり。天道の歴然たる。吾が目撃親見する所なり。幼少の時。父東岩府君の膝下にて。天道の歴々差はざることを。數多指し數へて教へ給ひし故に。天道を知る事ハ。吾先入の主なれども。世の惡學者の中に。漸漬して獨立すべき強立の行義もなく。又其理を明辨するほどの才智もなかりし故。世の惡學にも化せられたれども。多年讀書の功。聖人の徳なり。亡父の教なり。終にハ略天道天命を窺ふにも至れり。なれども五十年来目撃親見して。聖經の差はざることを悟りしハ。天より年を假し給ふ功少からず。少壯の人ハ。天道天命に疑ふ心ある故に。實に道を知ることハ難きことなり。吾が知る所の百中の一を録して。子孫の道を踏み違へざる様にと思ふのみなり

○天下國家の亂敗ハ。欲の一字に生ずるなり。女寵も。佞幸も。土木も。甲兵も。皆々欲に生ず。奢華侈大。孰れか欲に非ざる。天理人欲の學。講明せずんばあるべからず

○知者の心は不善にして。利あるは甘き毒を食ふに均しと思へり。されども河豚を食ふには。比喩すべからず。河豚の毒は千百人の中に。一人の毒に中るものあればなり

○予京師に在留の日。北山の鹿苑院の金閣寺へ兩度。東山慈照院の銀閣寺へ一度參詣せり。金閣の金は今にのこれり。銀閣の銀は少しものこらず。さて當時は光麗なることなるべし。されども今より見れば。金閣の池などは。餘程廣けれども。一體の分内狹少にして。今の諸侯の別莊などに比儀すべきに非ず。銀閣の庭は。殊に狹小にして。今の商賈の別莊位なり。義滿。義政。天下を領する勢にて。其侈如此に過ぎず。是にて今の世の富貴繁華の盛を知りて。此世に生れて逢ふことは。悦ばしく樂しき難有ことゝは思へども。驕が富貴。榮。華。能幾時。山川滿目淚沾衣と云ふを思ひ出だせば。慄然として戒懼の心なきにも非ず。有道の君相は。風俗を敦朴に歸して。奢侈繁華を裁抑せられずんばあるべからざることなり

金閣は三重なれども。各別に崇大ならず。思の外矮小なるものなり。銀閣は再重なり

○越前は不吉なる國なり。義貞北國に入りて。遂に滅び給へり。元龜に朝倉信長公と雄を争ひて滅びたり。天正に柴田秀吉公と雄を争ひて滅びたり。不勝之國（左傳）と云ふべし

○文父山が（天祥）正氣歌は。一代の正氣此辭に在りて。誠に一唱三歎すべきものなり。されど初の一段より。終篇の意。石徂徠（介）が孔道輔（平仲）が爲に作れる。擊蛇笏銘を踊躍せり。獄中にて書籍の披閲すべきなく。腹藁吻草にて。胸中に浮びたるまゝを誦ぜしもの故。古人の文辭たるをも忘却して。如此と見えたり。擊蛇笏銘は儒林公議に出でたり

○左傳に。臧哀伯の桓公を諫めたる。君子の明令德而示子孫と云ふ。全德の第一は儉にして。さて清廟は茅屋とあり。（桓二年）祖先の廟貌は。くずや葺にて。國天下を創造する人も。保有する人も。皆儉德を最第一とすることを。子々孫々に示すものなり。伊勢の大神宮は。王家の太祖にてまします。くずやにて白木造りなり。左傳の言と符合す。難有御事なり。帝王百二十代の今日まで。連綿たるも。此等盛德の功ならずと云ふべからず。されば後の人主。人君は。此等の事に深く心を用ひふべきことなり

○今の世に盛なるものは。歌妓なり。飲食は一箱二十五兩の菓子あり。煮しめ四重にて。常價二十五兩なり。三十七兩の重詰もありと聞けり。是等の事は。如何なる風俗にか。如何なる人情にか。江戸を去ると十二三里には過ぎずして。下總の猿島郡には。芋の葉を多くして。粟と稗とを雜へ煮て食ふ農民あり。まして三十里を隔てたる處は。推して知る

べし。天下の本たる農民如此。太平の御恩澤に浴されればとて。奢侈華靡かくなり行くと。にがにがしき事の極なり。賀璟如き人あらば。言上もすべけれども。今の世は其人なければ。世は益々華靡に流れて。人は益々困窮をすべし。四海の困窮は。吉事にや。凶事にや

○佛法を尊ぶとて。寺塔を建立にも及ばず。經像を刊造にも及ばず。唯積學積徳の僧を。本寺本山の主僧として。賣主坊主。山師坊主を用ひられず。破戒不如法の僧は。佛法の怨敵なれば。嚴に禁戒を加へらるべし。如此なれば。僧徒は少くなりて。凶勢自然と滅息すべし。是にてよき出家も出来て。愚民を誑誘する害少く。善に導き。道に嚮ふ一助ともなるべし。是佛法を尊崇して。僧徒の妄を裁抑する至極の良策なり

○賄賂の一條。古今政治の通弊なり。堯舜三王の御世には。各別なり。其他は賢主明君の世とても。此一條は止みがたき理なり。嚴禁を加へられば。公には行はれずして。隱私に行はる。進むまじき不材の者の進むも。勝つべき訟獄の負けになるも。政治の濁亂。是よりして生せり。甚しきは官爵も。獄訟も賣り物となりて。世は傾くなり。畏るべきの甚しきなり。賄賂を多く取る人は。賄賂を多く使ふ人なり。是自然の勢にて。己の公用勤め向きに。費用多き故。心ならずも。賄賂を取ることもあるべし。北條泰時の己が無欲を以て。奉行頭人の賄賂にふけるを止めたるは。聖人の所行にて。上頭第一の良策孔子の苟子之不欲雖賞之不竊也と仰せられたるに符合せり。是れは難企及盛徳なり。さて北宋の時。士大夫の祿を過分に與へられし故。人々廉恥の心を養ひ得て。名賢君子比肩て輩出せり。其理を推して。老中は一萬石。若老は五千石。御用の御側は。三千石とか。別段の役料を賜はりて。一には主人勤向の費に供すべく。二には公用に預る家来に。家祿の外に。各別の給金を與へて。勤向の費に供すべし。諸家常式の贈物は。各別のこと。其他不時の贈は。一切に受けざる様に嚴禁せられば。此風も止むべき歟。されども營造方。會計方。評定方。收納方。坊街の小吏等まで。中々耳目の可及には非ざるなり。故に此一條は。聖人は各別なり。明君賢主にても。たしかに禁止せられんこと。難の難なり。唯々儉朴を以て政となし。人々華靡に流れざる様にするときは。士君子廉恥の心ありて。此風も少しは止むべき歟。實は此一條は。治亂の根源なり。義政將軍の愚暗にて。伊勢伊勢守と云ふ大小人を内管領となして。大小の事。彼に任ぜられ。伊勢守賄賂にふけり。女色に溺れ。畠山政長義就二人共に武勇ありて。一時の豪傑なるに。其家督爭に忽に政長に與し。又忽に義就に與し。又斯波義廉義敏の家督爭にも。初は義廉に與し。義敏己の妹を伊勢守

が妾となしゝ故。後義敏に與し。反覆顛倒手のうらをかへすが如くせし故。應仁の大亂醸し出だせり。賄賂の行はるゝ時は。如何なる仕損じ大間違の出来ましきものに非ず。畏るべきの甚しきことなり。東照神君への御奉公。何卒此一事の盛ならずして。政治の清明なる様に。當途の君子は心得らるべきことなり

呉越王錢俶より十瓶の金銀を趙普へ贈りしを。太祖の見咎められて。趙普に命じて受けしめられたると。一諸侯より本多佐渡守正信に。一瓶の小粒金を贈りしを。神君の御前へ持ち出でたると。古今似たることなり。此等は戰國時代のことにて。後世官爵を賣り。獄訟を鬻の賄賂と同日の論に非ず。周禮内史の職に似たるもの。權勢の有所にて賄賂叢集の地なり

○賄賂の盛に行はるゝは。衰世の事にて。是より風俗人情皆亂れて。大害を生じ。大亂に及ぶべきことを知り給ふべし。人を用ひらるゝも。文學あるか。武術あるか。行状も正しくて才能あるか。諸侯は國政を能く正すか。諸士は家事を能く治むるか。是れを聞き正して進め用ひられば。賄賂のことは自ら止むべし

○聖賢の千言萬語。他事あるには非ず。其要は己の欲を抑へ制するの工夫なり。上は一人より。下萬民に至るまで。其理を知らずんばあるべからず。其學を講せずんばあるべからず。是夫子告顔淵。事己の二字にて。聖學の根元は。此にあり。欲を制すると。欲を肆にすると。存亡治亂興廢の數。唯此にあり。是を知るを智者とし。是を知らざるを愚人とす。智愚。賢不肖の別も。唯此にあるのみ

○唐の玄宗の姚崇。宋璟を用ひられしより。張九齡までは賢相政を執りて開元二十年。太平天子と仰がれたるに。李林甫と云ふ大姦邪國にあたりてより。天子は御老年なり。萬事思召次第と云ふ邪議を建てゝ。玄宗の我まゝ次第を導きしより。諫官も御史も。一言の諫爭と云ふこともならざる様に。取り計らひ。内は楊貴妃の寵愛より。外は泰山の封禪。驪山宮の御事等。天下の財用匱急に至りても。奢侈華靡は日々に増長して。終には天寶十四年に。安祿山叛逆して兩京覆沒に至れり。されど玄宗の蜀へ奔らるゝ途中。高力士の霧深きを爽ぎ給ふ爲に。酒を温めて勸めけるに。玄宗の醉後。誤りて死罪を斷ぜるを悔いて。數年禁酒し給へることを語り給ひしこと。柳氏舊聞に見えたり。末年聲色に沈溺し給へども。猶酒を禁じ給ふは。少壯英明の氣習の遺りたるにて。是屈せる處あるなり。兩京覆沒せれども。天下を亡し給はざること。此一條にても見るべし

○惡念動かざれば。混然たる至善の本體明了なり。事に觸れ物に應じて。善心發見の妙に非ざることなし。是れは是仁の本體なり。造次顛沛。終食之頃とは。唯是一の惡念を動ぜざることを云ふのみ。惡念不動是仁なり

○近世清人考證の學。此方へうつりて。凡百の學者。考證を悦ぶ。義理の精妙も。考證の功にて判然明白なることもありて。學問は考證を要とすることなり。されども今は考證の學。北野屋鞠塲。山東京傳に下り及べり。今にありて。考證。考据を爭ふは可恥の甚しきことなり。學者孔孟の聖學を學びて。心身を脩め。國家を治るの大道を得ることを修行し給ふべきなり

○聖人の學は。心學なりとて。靜坐冥目して。此心を觀ずるの類は。坐禪。入定。觀念。觀法の部類にて。孔子の學には非ず。節用愛人と云ふ。是即心學なり。節用とは奢侈の欲を抑へ制して。財用をなるべきたけに。倹約にすることなり。愛人とは殘忍の心を。務めて破り。慈悲恩惠の心の下に及ぶ様にする。膏澤降於民と云へる是れなり。此皆己が邪欲を制して下民を愛育するの仁心に出づ。是れを心學の妙用とす。聖賢の言々語々皆如此なるものなり

○孔子は依於仁。終食之頃無違仁。顏子は三月不違仁。三月に一度は仁に違ふの過ちあり。諸子は日月至焉而已矣とて。或は一月仁に至り。或は一日仁に至り。一日至るものは。翌日は仁に違ふことあるに。一月至るものは。翌月は仁に違ふことあるなり。明の郝敬は。我人の仁は。電光石火の仁なりと云へり。妙と云べし。邪欲擾亂し。利欲混淆する心の内に。事に觸れて。善心の發動するは。暗夜に一燈を照せる如く。從々衆陰諸惡昏濁の内に。一陽一善心の明を生ずるの象なり。されど忽に生じて忽に滅すれば。電光石火の善心なり。（復の卦は本心に復して。段々と善の長ずる象）是れを電光石火の仁と云へるなり。顏子の得一善則拳々服膺。而不失之矣との給へる。是三月不違仁の工夫なり。されども不貳過とありて。一時に一度過あるは。是違仁の處にして。聖人の混然たる至善に及ばざる處なり。さて今の學者の工夫は。袁了凡の陰隲の學などより入りて。善心の發見を擴充して。務めて善事を行ふべし。さて其上には。惡念を動ぜざる様にすべし。惡念動かざれば。惡事を行ふ理なし。此境界に至れば。孔顏も遠からず。十分の地位五分は至るべきことなり

○孔孟の言に。學者放蕩の助けとなるべきこと。一條もなし。唯一つの狂簡曾點の狂錯會すれば。放蕩の口實となるべし。純粹の狂者には。造ること最難し。今の世の狂者は。狂

箇の似せものなり。然るに狂箇の似せものをなすときは。一郷にては一郷の子弟をして放蕩ならしめ。一國にては。一國の子弟をして。放蕩ならしめ。一天下にありては。一天下の子弟をして。放蕩ならしめ。世間の人を悞ること不聞。其罪最深重なり。眞の狂者も。中行君子の次なり。狂者の似せものならんよりは。其一等上たる君子の似せものたる。郷愿を行ふべし。此意は郝敬が時習新知に反覆して。辨じたり。善行を脩する人は狂の一字は深く忌むべきことなり

○性は人の天に受けて生るゝを云ふ。生るゝ先と謂したる妙なり。性は一なり。されど三性を立つべし。一には道徳の性と云ひ。仁義孝弟は人の天より稟けて生るゝものなり。孝經の父子之道天性也。中庸の徳性孟子の性善。皆是れなり。二には情欲の性と云ふ人の情實。皆欲の異。又天より稟けて生れざるはなし。孟子食色性也と云ふ。又目之於色。四肢之於安佚性也と云ふ。是なり。三には形色の性と云ふ。人身の短長面色の黒白の異。是れ又天より稟けて生れたるもの也。孟子形色天性也と云ふ。是れなり。孟子性善を說きて。孟子に三性あり。辨列せざればあるべからず

○惡を祛き。善を行ふに。至近切要の學あり。惡木を去るに。一葉一葉を摘み。一枚一枚を剪らんとには。勞して功少し。本根を斷てば。枝葉は皆枯るゝなり。佳木を養ふに。一葉一葉を作り。一枝一枝を舒んとせば。勞して功少し。本根に糞へば。枝葉は一時に繁茂するなり。唯是本心を明亮にして。善の本體明なるときは。事に觸れ。物に應じて發する處。皆善く孝弟忠恕是れなり。大陽天に中をるときは。魍魅魑魎皆潜伏する如く。惡念自然に消滅するなり。本心の妙明なるは。午天の白日に仝じ。佛家に大日如來と稱號せるも宜なり。されど此境界は。一旦には造りがたし。多年書を讀み。義理を講じて。良心の發を養ひ。邪欲の動を制せる積習の功にて。此に到るべし。此に到れば。聖人にては非ざれども。八九分の地位に造れる人と云ふべきなり

○無欲主靜は。宋儒の言ひ出だせるには非ず。孔安國仁者靜を解して無欲なるが故に。靜なりと云へり。無欲主靜は。聖孫の舊說なり

○仁に專言ありと云ふこと。程伊川の言ひ出だせるには非ず。邢昺論語の疏。里仁篇名の下に。仁者善行之大名なりと云へり。是專言の仁なり。されども孔安國爲仁自己を解して。爲善在己とあれば。仁は衆善なりと見たるものなり。是亦專言の仁にて。專言の仁は。聖孫の舊說なり

孟子曰。道二。仁與不仁而已矣と。專言の仁。實は。孟子の舊說にて。論語の仁皆是れなり。漢宋學者の言には非ず。孔孟の言なりとしるべし

○一以貫之。里仁篇内にありて。一とは仁を云ふ。劉敞が七經小傳に。一以貫之者仁也。唯仁爲能一。惟一爲能貫とあり。胡寅論語詳說自序に。先聖先師敎學者於多岐。欲歸之於至當。故曰。吾道一以貫之。一者仁也。聖門之途。皆學爲仁。夫子言行莫非仁也。其在論語者著矣。宋儒の說如此。妙なりと云ふべし。程朱一理の說（一理ハ皇侃の說あり）にまさること萬々なり。なれども。此れも亦宋人の說には非ずして。孟子の說なり。孟子曰。三子者不同道。雖然其歸一已。一者何也。曰。仁也と。一の仁たること孟子の舊說如此。是亦後儒の說には非ず。孔孟の言なりと知るべし

孟子又云。道二。仁與不仁而已。又云。夫道一而已矣。一とは仁なり。善なり。仁は諸善の統名たることを知るべし。是專言の仁なり

○仁は衆仁の統宗諸德の根源なり。されども先づ輕く善と心得て。論語を解し見るべし。孝弟也者其爲仁之本歟。親に孝。兄に弟なるは。善を行ふの初なり。巧言令色鮮矣仁。巧言令色の人に。善行あるものは。世間には少きことなり。汎愛衆而親仁と。あまねく衆人を愛して。善人とは殊に親しく交るなり。人而不仁如禮樂何と。人たるもの善心なきときは。禮の節文。樂の和樂も。何の用をかなすべき。里仁爲美。擇不處仁焉得知。善に安んじ居るを美事とす。善惡の境を明辨して惡を擇び棄てゝ。善に居ることを知らざるものは。智と云ひがたし。仁者安仁。知者利仁。仁者は善を安んじて行ふ人なり。智者は不善の害を知りて。善を利なりとして。行ふ人なり。造次必於斯。顚沛必於斯。急遽卒迫の時も。惡念を動かさず。善心を失はず。踣蹶顚倒の時も。惡心を生せず。善念を失はず。終食の頃も。惡念を動かさずして。善に違はざる樣に心掛ることなり。仁は論語第一の字也。されども聖孫孔安國の解に從ひて。先づ先づ善の字を以て解すれば。往く處として明白たらざることなし。さて其上にて。善宗德源をば悟るべきことなり。善の字にて。仁を解すれば。往く處としてさしつかふることなし。秘事は睫毛と云ふは此事なり。されども善の字にて。一に通ずべきには非ず。仁は衆善の本。衆善皆仁なるを悟るべきのみ

○衆善は己の欲を抑へて。人をよくするにあるなり。衆惡は人を傷害して己の欲をなすにあるなり。仁者人也。仁者愛人。仁に偏言あり。專言ありと云へども。仁者人也。二人爲仁の義。所往として然らざることなきなり

○安仁利仁の別。安行は舜由仁義行非行仁義の境界にて。我心と仁と一致にして。仁を行ふ心なく。行ふところ自然と。仁に叶へるを云ふ。不勉而中。不思而得。從容中道。聖人の境界なり。此理は。人々解知する處なり。利行の字は。解知するもの少し。此は利害の利にて。智者は不仁の害を明知する故。仁の利なるを知りて。不仁を棄てゝ。仁をなす。今人路を行くに。路右は泥濘あり。路左は乾けり。それへ向へば。必ず泥を避けて。乾ける方を行く。如何となれば。泥を蹈めば。足袋を汚がし。草履を濕すの害あればなり。何も勉強することはなけれども。已と仁と未だ一致の場所に至らず。仁の利なるを知りて。此れを行ふ。是賢人の境界なり。此下を勉め行かんとて。強ひて吾欲を抑へて。仁を勉め行ふものなり。中庸にも。安行利行勉行と。三段に說きたり。表記にも。安仁。利仁。勉仁と三段に說けり。然るを物茂卿の論語徵には。利仁を勉強と說きたり。義理に盲昧なる天性のみか。中庸表記をも不知。不學無術笑ふにたへて傷ましき人なり。さて此の仁者安仁は。上章の里仁爲美と云へる是なり。智者利仁は。上の章の擇びて處仁と云へる是なり。仁とは唯仁なり。孝弟も忠恕も仁なりと思ひて行ふべし。其内に安ずると。利すると。勉むるとの三段あることなり

○伊川先生の四德之元猶五常之仁。偏言則一事。專言則兼四者と。易傳に云はれたるは妙なり。晦庵先生の仁を解せるに。心之德愛之理と云へり。心之德とは。專言の仁にて。仁義禮智を兼ねたり。愛之理は。義の宜しきの理。禮の別つの理。智の知るの理に對して偏言の仁を云へり。是れも亦妙なり。さて孟子の仁義と說き給ふ仁は。親愛之德。偏言の仁にてもすむべし。孔子の說き給へる。夷齊の國を讓りて餓死せるを。仁を得たりと說き。微子の去り。箕子の奴となるをも。仁と稱し給ひ。顏淵には克己復仁。仲弓には敬恕。樊遲には恭敬恕。子張には恭寬信敏惠。司馬牛には仁言。仁の一字一向に無象の象なり。此則專言の仁にて。愛人安民などの義にて。少しも通ずべきの理なし。是れは衆善行の統宗を指して仁とは云ふものなり。論語の仁の字は。善行と云ふことゝ心得れば。通ぜざる處なし。文言ニ仁以行之とあり。中庸に。力行近乎仁とありて。善を行ふは。皆仁なること。古より然り。此義程朱などの見開かれたることには非ず。漢唐以来相傳の舊說なるを。世の學者宋儒を惡みて。專言を妄となし。仁を愛人となし。安民となす。愛人安民は仁なり。されども仁を愛人安民と解するは。他書は略通すべくとも。論語一書は。全く通じがたし。仁は善行なり。衆善の統宗たることは。性理の學不興以前に。邪仁が論語の

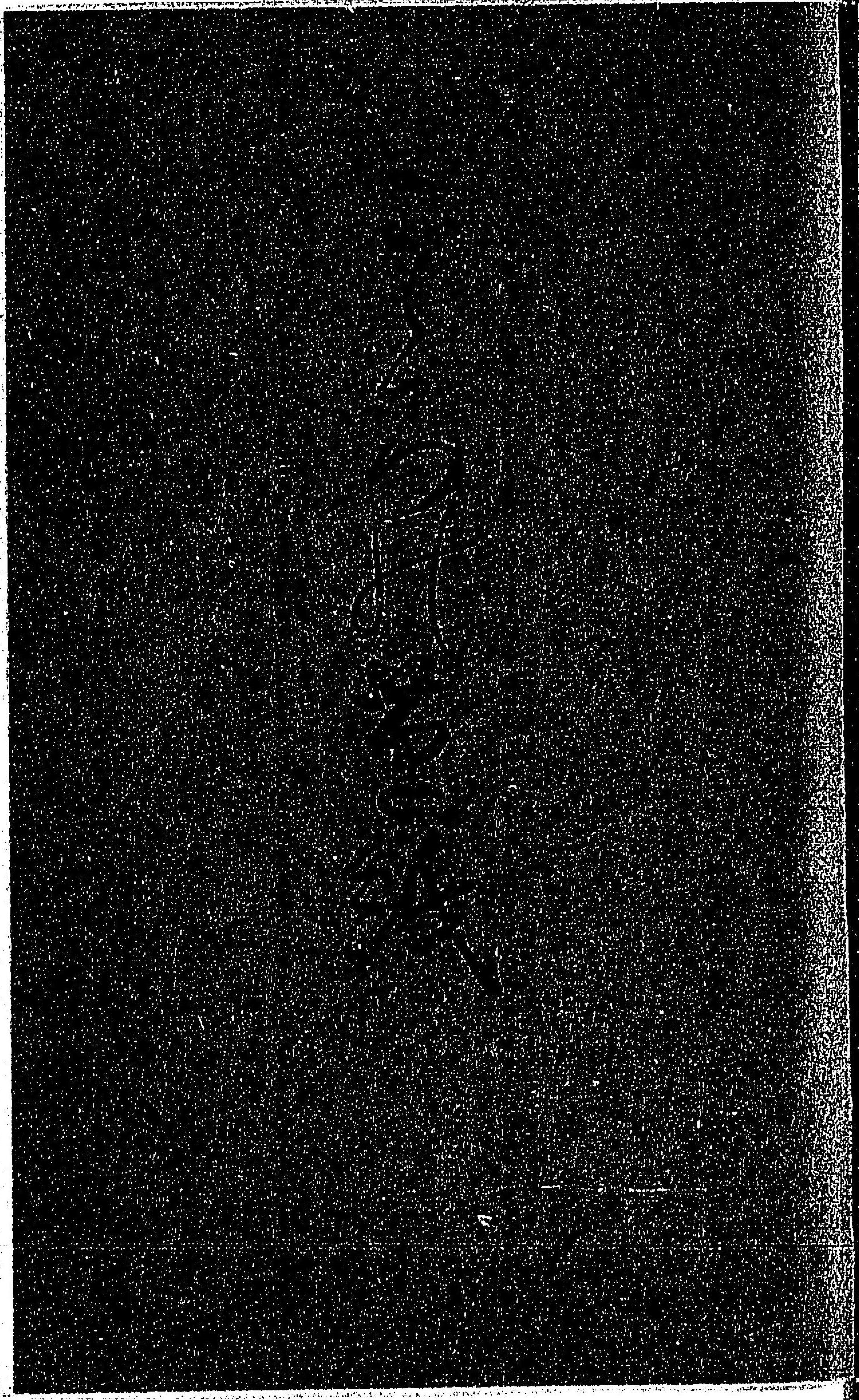
疏里仁篇名の下に。仁者善行之大名なりと云へり。是程朱の專言の仁なり。さて是後儒の言には非ぞ。眼を開きて能々見るべし。孔仁國の爲安由己を解して。爲善在己と云へり。論語の仁は。唯是善なること。孔子十一世孫の傳へられたる處なり。以文會友。以友輔仁。朋友の教導にて善行を輔益するなり。愛人を輔く。安民を輔くるにてすむべきか。博學。篤志。切問。近思仁在其中矣。學問の中より善行を生ずるを云ふ。愛人其中にあり。安民其中にある而已にてすむべきか。これは中庸にて。博學。審問。愼思。明辨の次に篤行と云ふ處を論語にては。仁とあり。仁は行なること明白了々なり。仁は衆善なり。衆行なり。衆善行の統宗なり。衆善の宗統を得たるを仁者とは云ふなり。孟子も道二つ仁與不仁而已矣と仰せられ。もし偏言の仁ならんには。此語通せぞ。義不義あり。智不智あり。禮無禮あり。何ぞ道二つのみならんや。道二つ善與不善而已矣と云ふことゝ心得たれば。言下に亮然たり。三子者不同道。雖然其歸一也。一者何也。曰。仁也とも仰せらるれば。言下に亮然たり。愛人安民など云はんには。履を隔てゝ痒を掻くに同じ。仁は衆善の宗統。故に一以貫之とは。仁の一字を云ふなり。安仁とは善行を安行するなり。利仁とは善行を利行するなり。勉仁とは善行を勉強するなり。造次於斯とは。かりそめの間にも。善心を失はざることなり。傾路の間にも。善心を失はざることなり。顛踣の時。愛人の心。安民の心を失はぞと云ふべきか。仁は衆善の統宗。故に元者善之長也と。文言にもの給へり。さて恭敬忠も。恭寛信敏惠も。克己復禮も。敬恕も。宗統の仁へ入るべき道なり。又仁の支流別派なりと云はんも可なり。「わけ上る麓の道は多けれど。同じ高峯の月を見るかな」と云へるは。論語の仁に符合せり。夷齊三仁などは。衆善の統宗を得給へる賢者にて。孔門諸子善行あれども。未だ其本源を得ず。故に仁を許し給ふものなきなり。其本源は他に非ず。己が心なり。されども是れは別論に附せ。論語の一書は。仁經と云ふべし。古人も此れを知れるにや。呂氏に諸子の學術を論ぜるに。老子言柔孔子言仁とあり。孔子の學。唯此一字にあることを知べし。此一字聖人の秘密藏なりと思ふべきことなり

○誠に我本心に省み問ふべし。親に事ふるの孝。君に事るの忠。兄に事るの悌。朋友に交るの信など云ふもの。各々心肝脾腎などに存在せること。呉服屋に段物を並べたる。是れは縮緬。是れは羽二重。是れは八丈島。是れは植田島など云ふ如く。各々別々に此ありや。我心内に飾り置くべき棚もなし。唯是空虚靈妙の一心のみなり。此一心父に事りて

ハ孝となり。兄ニ事りてハ悌となり。君ニ事りてハ忠となり。朋友ニ交りてハ信となる。此是仁の本體ニて。一以貫之とハ。此物なり。此等の處よりして論語の仁ハ悟るべきことなり

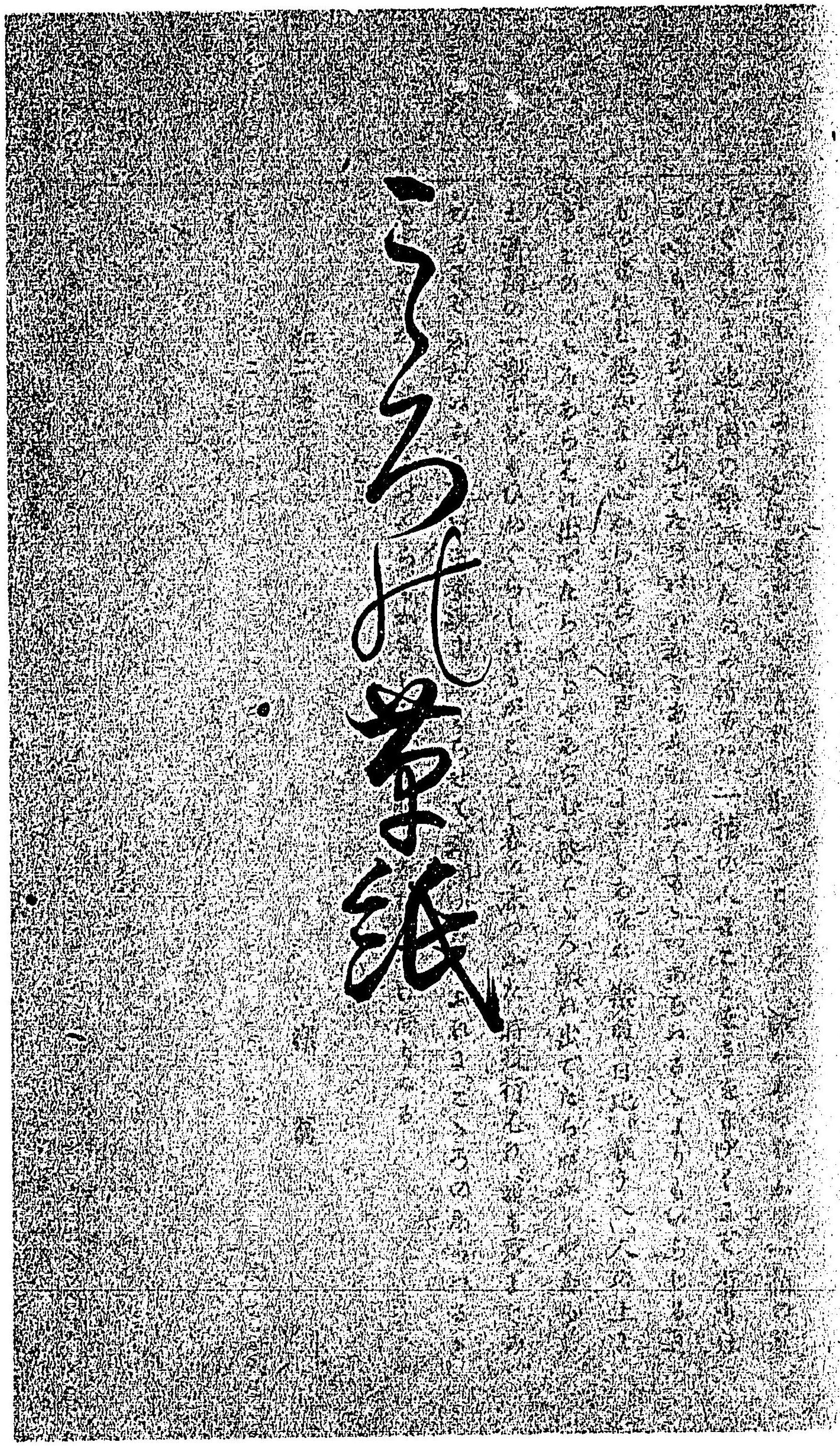
○仁者人也。仁者愛人。此れ仁の字の用前ニて。聖の字の通知ニ同じければ。仁の字ハ親愛の義なりと云ふこと。確然として不可易。されど論語の仁の字ハ。此向上一段の義あることを知るべし。聖人至誠大而化之之謂聖。通知の義のみニ非ざるニ同じ

○他書の事ハ。姑く置く。論語の一書ハ。心學の骨髓なり。世の古學者と云へるもの。論語のみを崇奉して。孔子の學ハ心學ニ非ずと云ふ。笑ふべきの甚しきことなり。先づ知り易き所より辨ずべし。子路の孔子の御前ニて。言志時ニ。車馬衣裘與朋友共敝之と云ひたらんニハ。心ニハ惜しく思ふとも。外面義理を飾りて。朋友の事故ニ。己の衣裘を假して敝るニ至るとすべし。然るニ其下文ニ無憾とあり。憾と憾みざるハ心術ニある事なり。是心學ニ非ずや。人ニ衣裘を假して垢づくことだニも。凡人の心ニハ不滿なるものなり。まして敝りたらんニハ。口ニハ義理を飾りて不苦など云ふべけれども。心内ニハ憤恚の念少かるまじ。然るを少しも憾る心なしとハ。聖賢の心術の豁然大公ニて。己ニ私するの情欲なきことを知るべきなり。朋友ニ假して衣裘の敝を憾る心ニて。伯夷叔齊の兄弟國を譲ることとなるべきか。堯舜の天下を其子ニ傳へずして。其臣ニ譲ることとなるべきか。されば子路の此心ハ夷齊堯舜の仁德ニも至るべき路脉なり。此理を悟らば不亦悅乎。悅ぶものハ何物ぞや。吾心の悅ぶなり。不亦樂乎。樂ものハ何物ぞや。吾心の樂むなり。人不知而不慍。慍ると不慍とハ何物ぞや。吾心の慍ると不慍となり。慍るを小人として。不慍を君子とす。言々語々。皆是心の事なり。故ニ孔子の學の心學たるを知るべし。論語の一書。心學の骨髓たるを悟るべし



梧窓漫筆拾遺 終

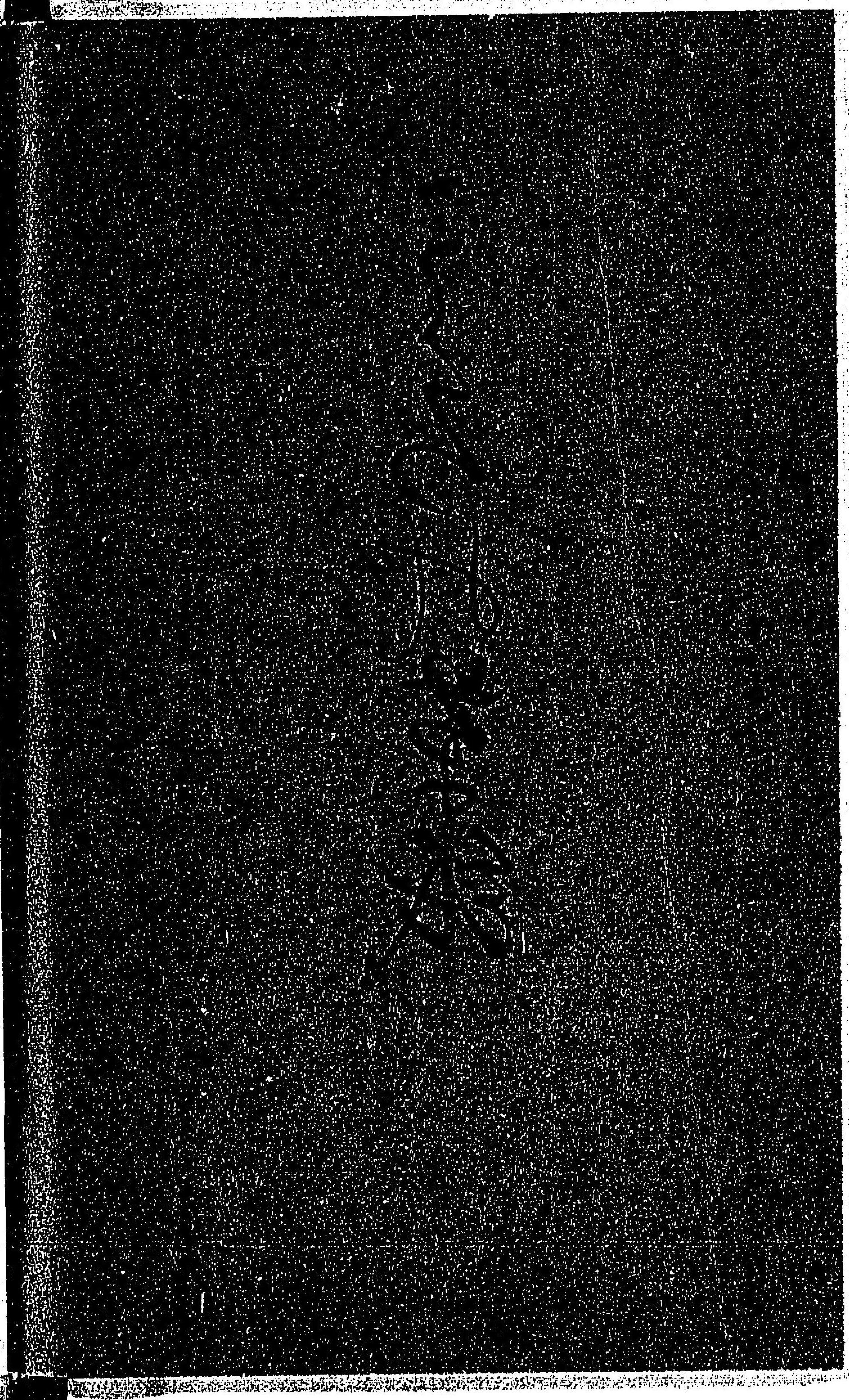
梧窓漫筆拾遺　終



色うるはしく形みやびに。衣あざやかなれば。恥てふこゝろは。誰かあらむ。かの一指の延びざるだに。遠つ國の藥師へたのみ侍るは。一指の人にことなる をなげくにぞ 有りける。心もしあらはれ出でたらば。いかゞあらむ。かくるゝにあらはるゝよりもいちじるきものなれど。愚かなる心からしらで過ぎ侍るにこそあなれ。樂翁。日比。我うへ。人の上にも。このこゝろあらはれ出でたらばとやあらむ。彼こゝろ顯れ出でたらばかくやあらむと。清閑の一樂におもひめぐらしけるが。ことし春の末つかた。時疫行はれ。翁も疫にそみけるにぞ。かたはらに居ける養浜に。筆とらせて。清閑のたはふれに。こゝろのあらはるゝさまを畫がゝせて。みづからもかきして。心雙紙となむ名つけ侍りぬる

享和二年三月

樂翁



心の雙紙

松平樂翁著

月さやかなる夜。人々うちつどひて。酒のみけるが。管弦は風流のうつはなりとて。其道の深さ浅さをもしらで。我こそと笛吹き出だすもあり。琴などひきて。世またるもの。たゞ人まこのまれむ。多く賜へてんとのこゝろをかきならすもあり。ものしれる人の前も。えさからで。かくは歌よみたり。詩つくりたりなどゝ。我はがほまいひのゝしりあへるもあり。又ひときは高き心にて。月は世のかたみなり。むかしの人のみし影と思へば。こひしうこそあなれど。もの静まいひ出だしたり。昔人したうかぐはしさの名のみまして。なす事。みなこの世のつたなきま

何をもていましへ人
したふまや。したはるゝむかし人おもふらむそづかし

風流の座
まそてこゝろハ
わかきせん
男舞だにそ
すゞしく侍らめ
くるゝ日ハ
おもしろく
多かなし

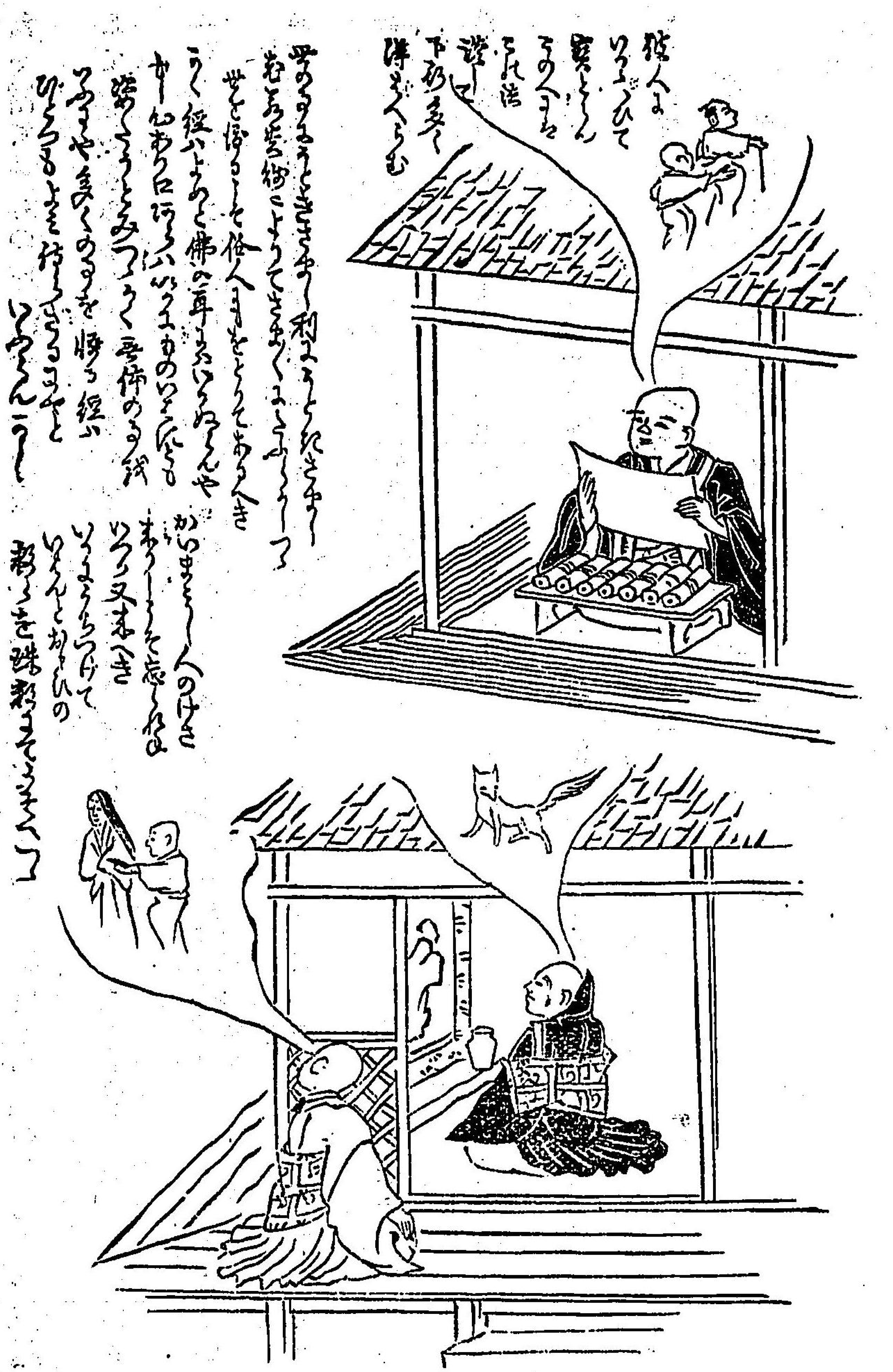
こゝろハ
文字てん月の絵
まく
しゐりや
賦も六朝の風ハ
おもしろうらん
月影ぞなし
夢へそこらへそれ
それ世をうる
ゆしき
へまぞ
うつゝれ

河に落ち入るものは。少なけれど。溝などにはあやまり。落ち入るものぞ多き。ちむ毒などみづから呑みて。毒にあたるものはあらねど。多食して食傷霍亂し。又脾胃損じて。死に至るものぞ多かめる。さらば心の安きところより。終に其害を得てべるものにこそ。ものゝ道。よく辨へもし。ざえもある者は。敵の計にも落ち入らざれど。女をみては。いとひきゝみならで。心ゆるし侍る。女も男たぶらかして。害せむとおもふ心はなけれど。只寵得侍む。寵奪れじとも。心として朝な夕ないふ事。なす事。この外ならぞ。終に心ゆるし侍るものに。心せぞ。おもふもの思ひ入れたれば。しらぞ〱して心奪れ侍る。よしや。これ我をたぶらかをとさとるものもあれど。もと寵奪はれじの心より。やさしくもかくなすに。などていたくとがめむと。心ゆるをぞ心うしなふ初めなる。鵲は其年の水をしるとて。洪水のありなしをよくさとり侍る鳥なれば。水出むとおもふとしには。ひきゝ枝に巢くひ侍る。いかにとなれば。されど水しるものはあらじ。ことしの水おほく出づとも。この枝は水にはいらじとおもふより。常よりもひきく。水なきとしには。其こゝろなければ。高き枝に巢くふと。かの國の文にもあなれ。さればいかに我をたぶらかしてんと思ふにぞ。いとゞちかづくとも。遠ざくる心はあらじ。彼玄宗のかしこきも。揚氏の女にいつか心とられて。中原の亂るゝをもしらぞ。高くはいの露のかろきもまでれる心にいとおもく思ひけるこそあさましけれ

秦の趙高。二世皇帝の寵を得て。終にみかどの心をまどはしけり。世のみだれ行く事も。耳
まいらせず。かしこき人もめしつかはず。終にほろびてけるとぞ

たゞ僧てふものは。何のわざもなく。人に得てものくひ得て。家寳も四民のうちには立越えて。しかもみな人にゑ侍るにぞ。いとゞ罪はおもかるべき。さるに今の世。道徳あるはさらなり。常ざまの僧は。よきをすゝめ。あしきをいましむる。天堂地獄の空ごとをだにもいはず。宿業などゝいふ事いひて。執着心をそらさむことにもあらず。只寳得て。富みきはめ。よき衣着。錦身にまとひ。輿に乗り。先をそらはせ。塵けたてゝ。高ぶる事をのみこのみ侍る。堂塔の寄進そかるは。其中までのかしこきなり。佛の名となへ。数珠つまぐりたる姿ならぬこゝろもちて。いさゝかも道徳戒律の沙汰にもおよばず。衆生濟度の事は。露もこゝろに置き侍らざるも。少なからじ。佛てふもの見侍らば。いかゞおもふらむ

其いたづら事は。いかゞいふべき



賴とも卿志すとや有りけむ。義經の勲功をうち捨てゝ。めしとらへむとぞしたまひける。義經身の置き所なく。落ち行きたまふ所。あたかの關にて。關守あやしみ咎めけるを。辨慶。よし經に似たるのにくさよと。杖もてうちける。其忠貞に感じて。關守關をぞ通しける

醫師ハ人を救ふものにして。萬心直なるべし。よくあれば。心くらし。いかで病をしりえむ。さるに醫學にのみふけりし者ハ。人のしらざる藥などこのみ用ひ。彼書を試み。この書を試み侍らむと。せちに思ふもあり。名聞をのみ專らとし。其外ども〱心にあふやうにもてなし。治療ハよそにして。世渡る事をせちにするもあり。生死ハ醫師のしらぬ事を。心得そべるもあり。又ハ脉もしらず。論説もしらず。病をもしらで。只しりがほにもてなし。名をうりて。我非しるもなければ。高言して人をそしり。我をよしとおもへば。いつも其拙を守り。上達せず。病の動くごとにおどろきあわてゝ。只倡中の幸をもとむるぞ。膽いとも小に心いと大なる醫師にして。是も右輿に乗りて。高き門出入ることをのみ。心とする。いかなる仁術とかいふべき

入道相國佛御前を寵して。妓王につらくあたりしかば。妓王世をうらみつゝ。嵯峨のおく山に引きこもりて。尼となりければ。妹妓女もゝ刀自もともに尼となりけり。佛は世の常なき事を觀じて。彼館をまかり出でゝ。尼となり。妓王が庵に來りて。其よし語りしかば。日比うらみつる心もそれて。ともに後世をねがひけるとぞ

茶たつる事は。いとたふとき道と心得て。客まねぎつゝ。主人いかにもしりがほに出でゝもてなし。此かけ物は。虚堂の墨跡。多くの黄金出だして買ひたり。この釜は。あしやにて。何千貫の折紙こそあなれ。この茶にむは。ふり出しなれど。世に有るべしとも覚えず。殊に我は禅味しれば。名たゝる宗匠も。などて及ばむ。ひさく斯く持ち。水斯く汲みて。斯く釜にいるゝに。松風の吹きたえて。静かなるごときは。心の妙とやいふべきと。心におもふ客も。それぞれの心に有りけり

神ハひとすじの誠にして。これあめつち第一となり。其まことをもて。此人となれば。ひとつの誠感應して。神靈いちじるく験させたまふまで有りける。さるに神佛ハいさめたまふ事も。いましめたまふ事もなければ。愚なる心より。何の恐れもなく。心のたけいひて。とき侍るなり。姿いと心有りげに。にぎてそらひ。かしこみ〳〵と口にハいへど。心のねぎ事いとけしかる事なむ多かる。麦まくものハ。雨を願ひ。稲刈る人のなげくを顧みず。いとも愚に成りもて行くハ。こえも用ひず。稲草もとらず。遊び暮して。よく實のるを。神の恵みよとねがふたぐひぞ多かる。いとなげくべき事にぞ。神ハ思ひたまふらむ。神ハおもひたまふなり

かゝる事は。なさじと思へど。捨てがたく繰り返しおもへば。猶捨てがたし。多くの人かゝる事なすは。我とても。只に一度のみし侍ること。あへて咎むべきにもあらじとおもへど。又何となう心苦し。いや〳〵かゝる事はし侍るまじ。かぞいろの。庭の教も耳にとまり侍るものをと。おもひかへをもあり。とにかくおもひ捨てがたく。一弛の道とやらんいふ事もあなれ。古のかしこき人にも。此人には。かゝる拙き有りけり。彼の人には。かうやうのあしき事も有りけり。其賢き人さへ有りけるものを。餘りに心つよく慎み守らば。病をやえ侍らん。さらばまたふかりのとしなり。多きこそあしけれ。只に一度の事。いかであしからむと。理つけて。我こゝろ欺き侍るも有りけり

心の雙紙 終

明治廿五年二月十八日印刷
同　廿五年二月二十日出版

版權所有

校訂兼編輯者　（佐藤政）今泉定介
東京小石川區西江戸川町一番地

同　畠山健
同　牛込區水道町四十二番地

發行兼印刷者　吉川半七
同　京橋區南傳馬町一丁目十二番地

關西大賣捌所　松村九兵衛
大阪南區心齋橋南一丁目

發賣人　林平治郎
東京日本橋區箔屋町八番地

印刷所　必昇社
東京々橋區鎗屋町九番地

各府縣發賣所

- 東京日本橋通三丁目 丸善書店
- 同 京橋區尾張町 東海堂
- 同 神田表神保町 東京堂
- 同 同 中西屋邦太
- 同 本郷春木町 布美乃屋
- 大坂備後町 梅原龜七
- 同 同 吉岡平助
- 同 北久太郎町 柳原喜兵衞
- 同 久寶寺町 三木佐助
- 同 南久寶寺町 前川善兵衞
- 京都新町通 便利堂
- 同 寺町通 梅原支店
- 同 河原町二條下ル 大黑屋書舗
- 熊本新二丁目 長崎次郎
- 神戸相生橋東 吉岡支店
- 佐賀白山町 河内壯助
- 愛知名古屋本町 川瀬代助
- 靜岡新通一丁目 勝見儀助
- 同 掛川 三原屋甚藏
- 石川金澤 近田太平
- 同 同 雲根堂
- 新潟新潟市 林富吉
- 同 水原 西村六平
- 同 長岡 目黑十郎

- 新潟長岡 上田屋治平
- 長野善光寺前 西澤喜太次
- 同 松本 水琴堂
- 同 小諸 小山佐傳次
- 山梨甲府八日町 五明堂
- 群馬前橋本町 煥乎堂
- 宮城仙臺國分町 金港堂
- 同 同 高藤書店
- 同 大町 正々堂
- 岩手盛岡呉服町 便益堂
- 山形八日町 五十嵐太右衞門
- 同 酒田 白崎善助
- 秋田大町 本間金之助
- 北海道函館 魁文社
- 同 札幌 石塚猪男藏
- 福島福島町 萱間左右太
- 栃木宇都宮町 正々堂
- 同 集英堂
- 茨城水戸上市泉町 川又銀藏
- 同 石岡 高野清助
- 同 古河 高木文正堂
- 千葉佐原 朝野利兵衞
- 同 千葉町 多田屋支店
- 同 佐倉 村山書房

今泉定介 畠山健 兩先生校正

隨筆叢書 百家說林

洋裝大形 美製本 全十冊 完備
一冊定價金四十錢
一冊郵稅金八錢

卷一より卷十まで目次左に

卷一
- 獨語 太宰春臺
- 奈留別志 荻生徂徠
- 都の手ぶり 石川雅望
- 北邊隨筆 富士谷御杖
- 筆のすさび 菅茶山

卷二
- 兩窓閒話 著者不詳
- 泊洦筆話 清水濱臣
- 北里十二時 石川雅望
- かたびさし 齋藤彦麿
- 玄同放言 上集 曲亭馬琴

卷三
- 玄同放言 下集 曲亭馬琴
- 桂林漫錄 桂川中良
- 奧のほそ道 松尾芭蕉
- 善庵隨筆 朝川鼎
- 尾花か本 本居宣長

卷四
- 圓珠庵雜記 僧契沖
- 輶軒小錄 伊藤東涯
- 關のあき風 松平樂翁公
- 昆陽漫錄 青木昆陽
- 假名世說 太田南畝

卷五
- 鋸屑譚 谷川士清
- 春波樓筆記 司馬江漢
- しりうこと 小說家主人
- 茅窓漫錄 茅原定
- 蜘蛛の糸巻 岩瀬京山
- 難後言 著者不詳

卷六
- 梅園叢書 三浦安貞
- 遊京漫錄 清水濱臣
- 小かね草 石川雅望
- 世事百談 山崎美成
- 墳塋考 仲山信名

卷七
- 家屋雜考 澤田名垂
- 我宿草 太田道灌
- 畫譚雞肋 中山信名
- 續昆陽漫錄 青木昆陽
- 訓蒙淺語 太田晴軒

卷八
- 兎園小說 自一集至五集 曲亭馬琴等
- 花月草紙 松平樂翁公
- 金剛談 小林元儁
- 雲萍襍志 柳澤淇園
- 鳥おどし 川崎重恭

卷九
- 兎園小說 自六集至十一集 曲亭馬琴等
- 人名考 新井白石
- 轉註說 狩谷棭齋
- 閑窓自語 柳澤大納言
- 准后准三后考 新井白石
- 大海のはし 富士谷成章

卷十
- 兎園小說 十二集大尾 曲亭馬琴等
- 消閑雜記 岡西惟中
- 心の草紙 松平樂翁公
- たはれ草 雨森芳洲
- 梧窓漫筆拾遺 太田錦城